
『10代目ミアの搜索譚』

狐星ツグミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『10代目ミアの搜索譚』

【Nコード】

N66510

【作者名】

狐星ツグミ

【あらすじ】

どこか浮世離れた記憶喪失の女の子は、なんと300年も昔の古代人だった！？

記憶喪失の女の子・シンシアは、喋らない女の子に異国の剣を帯びた女の子、そして親友・ミアの名を語る魔法使いの男性と出会う。世の中は魔法に囲まれながらも、徐々に機械技術の勢力が増してきているそんなご時世。

にもかかわらず、シアの生きた時代にはそのような物は影も形も存在しなかった！

シアの目に映る物は皆不思議で、目新しく、全てがさながら『魔法』のよう。

親友から貰った『物探し』の魔法を手に、見知らぬ街を見知らぬ時代を駆け抜ける彼女の『搜索譚』。どうぞご覧あれ。

一章 『再会』と良く似た『何か』 一話目

Wrote: RIL

月の無い夜の事だった。

「いやー良いものを見せてもらった！アレは世紀の大発明だ！」
帰り道。

教会への招待状をひらひらと弄びながら、ベルクはケタケタとやけに上機嫌に笑っていた。

「学会なんてつまらんもんだが、毎回あんなものが見れると良いんだが」

ベルクにつられるように、サヤも微笑んでいた。

「車輪を回すだけで光を発するとは、どういう仕組みなんだろうな。魔具の気配も魔法の気配も無かった」

「あの様な珍しい物、エルリットさんにも見せて差し上げたかったですね」

サヤの言葉に、ベルクは軽く笑い、答えた。

「多分あいつがアレを見る事は無いだろうな」

「何故ですか？」

「エルがその手の学会に呼ばれる姿が想像出来るか？」

ベルクの問いかけに、サヤは数秒軽く空を見上げて考え

「そんな事言っちゃ、エルリットさんに失礼ですよ」

と、苦笑しながら答えた。

ようするに、サヤも同じ結論という事だ。

「まあ…あんな便利な物が世の中に出回る事が考えられないのもあるんだけどな」

「なんでですか？火も魔法も使わずに光を得られるなんて、とても便利じゃないですか。皆さんの生活も楽になります」

ベルクは目を細めながら、言った。

「あんなものが世の中に出回ったら…」

瞬間、私が持っていたランプの中の蠟燭の火が、音も無く消えた。辺りが闇に包まれる。

「…蠟燭が売れなくなるだろう？」

サヤが苦笑しながらランプの中に火を点け直す間、ベルクは続ける。「蠟燭なんて俺達ですら使ってるんだ。あんな物が出回ってみる、蠟燭屋が売れなくなって暴動起こすぜ。世の中便利過ぎる物はそう簡単に受け入れられないもんさ…それこそ、ミア・フォルトみたいにな」

ランプに火が点くと、辺りが橙色に包まれ風に私達の影がゆらいだ。「魔力も触媒も使わず、ただ車輪を回すだけで光を得るとは…それこそまさに『魔法』だ。この間の汽車の事といい、科学ってのは実に恐ろしいものだ」

ベルクは、やれやれと肩をすくめた。

月の無い夜の事だった。

屋敷に着くと、ベルクは私達の前に出て私達を手で制した。

「おかしい。強引に『開けた』跡がある」

私には『視え』ない。サヤに目配せすると、首を横に振った。サヤにも『視え』ないようだ。

つまり…

「お前達はここで待ってる」

ベルクは人差し指を口元にあて、足音を立てずに屋敷の中に入っていた。

屋敷の中に『誰か』が居る。もしくは、居た。

…そしてその『誰か』は、私達の手を負えない相手。

私はランプを地面に置き、首から提げた鈴を手に。

サヤは腰のカタナを手に。

ベルクの入っていった屋敷を警戒する。

幾ら私達より格上でも、ベルクが誰かに後れを取る事はありません。

だから危険なのは、ベルクに追い立てられた『誰か』が私達を狙う事。

風が吹くたびに私達の影が揺れ、その度に私の鈴が音を鳴らし、サヤのカタナがびくりと動いた。

息を殺して待つ事、十数分。

「ヤバい物が盗まれた。回廊の方だ」

頭を掻きながら苦々しい顔をしたベルクが戻ってきた事で、私達は警戒態勢を解いた。

「盗まれたのは金目の物が幾つか、魔具も幾つか。まあこの際そんな物はどうでもいい」

回廊の荒れ具合に、サヤは珍しく怒りが見え隠れした表情をしている。

おそらくは、私もサヤと同じような顔をしているのだろう。

壺は割れ、花は踏みにじられ、本棚からは本が散乱し、引き出しは全部引っくり返され、至る所に置いてある水晶も全部割られている。

「この屋敷を3人全員で離れる事は滅多に無いからな…：やっぱ教会の学会なんぞ行くべきじゃなかった」

回廊の一番奥、私達ですら普段は立ち入れないベルク専用の部屋。

魔力に満ち溢れたその部屋の中央に置かれた台座には、何も置かれていない。

「こいつだ。初代の造った封印式の遠隔装置。」

回廊はベルクの魔法で閉ざされた空間。だから、普通の人は表向きの屋敷の中に入れない。

だからこそ、本当の意味での貴重品は回廊の各部屋に厳重に保管される。

犯人はベルクの魔法を食い破れるほどの存在。

そんな人には先ほどの調度品荒らしはただ無意味な事だろう。

この目的は、ベルクへの嫌がらせ…：そして、挑戦？

「初代・ミア・フォルト最大の遺産が盗まれた…：これは教会に報告

しないわけには行かない…かあ…」

ベルクは忌々しげに舌打ちをすると、手を額に当てた。教会に弱みを握られる。それは私達には…いや、ベルクにとっては酷い痛手だ。

「まずったな…先代との約束も、このままじゃ果たせそうにないぞ…」

ベルクは大きなため息をつきながら地べたに座り込み、眉間にしわを寄せ額に手を当てて何事かを考え始めた。

私もサヤも、初代ミア・フォルトについて知っている事はあまり多くはない。

ただ、ミア・フォルトとベルクの関係について。その一点は私達もよく知っている。

シンシアという女の子とミア・フォルトの交わした約束。

そして、ベルクとミア・フォルトの交わした約束。

私達ですら知らなかった場所に保管されていた、世界で一番有名な魔法使いの遺産が盗まれた事実。

私達の安穩とした生活はこの事件から狂いだすのだろう。

月の無い夜の事だった。

一章 『再会』と良く似た『何か』 一話目

Wrote:??

たぶん、もう昼間だ。

朦朧とする意識の中で、目を閉じた上から瞳をつらぬく日差しが強さから、ぼんやりと思った。

大寝坊だ。すぐに起きなくちゃいけない。

体を起こそうとしても指先一つ動かず、私はしばらく体に力を入れたり、頭を左右に振ったりしてなんとか起き上がるうとする。

結果、体をぴくりとも動かせず、そのくせ疲れるだけで終わったから諦めた。

妙な夢を見ている延長線に居るのかと、大声を出して自分を起こそうとも試みたけど、うめき声一つ上げられなかった。

もう起き上がるのは諦めて、考える事に労力を傾ける事にする。

それにしても、変。

草のにおいを感じる。

普通、寝る時はお家のベッドのはず。

私は昼寝でもしていたの？

ダメ。思い出せない。

風がそよぐ度に微かに鼻腔をくすぐるのは、明らかに家の中のおいではない。

そもそも…私の家の近くに森なんてあったっけ…？

思考が止まる。思い出せない。

…たぶん、あった。あの子と一緒に何度も木の実を採ったりして遊んだじゃない。

そしてまた、そこで思考が止まる。

…あの子って、誰だっけ？

思い出せない。

恐くなってきた。恐ろしい。

…私って、誰だっけ？

それさえ、思い出せない。

動かないはずの体が、震えた気がした。

私の過去を。私の生活を。私のお母さんを。私のお父さんを。私の家を。私の街を。あの子の事を。

考える。考える。考える。

風が、とても冷たいものになったような、気がした。

気がついたら、照りつける日差しはもうとつくに無くなっていた。

今ではもう風は本当に冷たいものになっていた。

もうとつくに日は暮れてしまった。

あれだけ動かなかった体が、指先が、ぴくりと動くようになっていた。

体が、動く。

でも、怖くて動かしたくない。

起きてしまったら、私の嫌な夢が現実になってしまうような気がしたから。

考える。

…そういえば。

何か約束があった。そうだ、きっと、大切な約束。考える。

約束だ。約束は、守らないといけない。だから、私は、眠ってる場合じゃない！

もう考えない。

私は、全身全霊の力を使って飛び起きた。

実際には、酷く緩慢な動作で上半身を起こしたに過ぎない。

それでも、起き上がった。私は、起きあがったんだ！

体中が鉛のように重たくて、瞼も開ききらない。

霞んで見える光景は、ガラスの欠片が辺り一面に広がって、キラキ

ラと月の光を反射してとても綺麗だった。
まるで、天国のように。

私とガラスの欠片の絨毯を覆うように、木々が生い茂っていた。
と、いうより森の中私の居るところだけがぼっかりと開いているか
のように…

私は足元のガラスの欠片を一掬いポケットに詰めると、たどたどしい
体使いで立ち上がり、ゆっくりと森の方へと歩き出した。
良かった。歩くことは、出来るらしい。

まずは、ここから街へ戻る道を探さないといけない。

ガラスの欠片にざくざくと足跡をつけながら木々の処までたどり着
くと、何か不思議な気配がした。

「なんだろう、これ」

手をついた木が薄く、ぼんやりと光っている。そんな気がする。

とりあえず、今の急務は綺麗な木よりも帰り道だ。

ぱつと見で道らしい道は無いけど、獣道の一つくらいあるかもしれ
ない。

私はすぐに周囲を観察しつつ次の木に手を当て、軽く体重を掛けな
がら歩き始める。

5本目辺りの木で気がつく。特別なのは最初の木だけで、それ以外
はただの木だ。

はて、と首を傾げてもわからないものはわからない。

特別な木は、まるで魔法のようだ。

私は魔法使いではないから、魔法の知識なんて無い。

本当に、魔法使いの考える事は良くわからない。

そこまで考えて気付く。

…そうだ。あの子は魔法使いだった。

思わぬところで一つ忘れ物を思い出した。この調子なら、きつとす
ぐい로운な事を思い出せるだろう。

不思議な木については、あの子に聞いてみよう。きつと何かわかる
はずだ。

私は一旦戻って、例の木から葉っぱを数枚拝借してポツケに入れる。きっと、話して聞かせるだけより実物の欠片でもあった方がわかりやすいだろう。

私は少し楽観的になりながら、また歩き始めた。

木々に右手をあてながらぐるりとガラスの絨毯を一周する。

木々は鬱蒼と生い茂り、目的地の方向もわからない私がここを抜けるのは無理だと思った。

何より、今は足が重たくって、踏み固められていない道を歩ける気がしない。

結局、一本だけ淡い月明かりを吸収しているかのような最初の木の元に戻ってくるまでに、道らしい道は見つけられなかった。

この神秘的な景色の中、光る木があってもあまり不思議だとは感じない。

けど、何十何百と普通の木が生い茂る中、たった一本だけが特別と違うのには違和感があった。

実際に木が光っているわけではないけど…

「はあ…これからどうしよう」

思わず独り言を呟きながら、例の木に背をもたれて座り込もうとした。

疲れた。

重たい体を引きずりながら歩くのは、骨が折れた。

それに、帰り道を見付けられなかったシヨックも大きい。

今日は諦めて明日、日が昇ってから帰り道を探す方が得策かな…

なんて、考えながら木に体重を掛けたら

「ぎゃん!?!」

頭を地面に強打した。

「いたたた…」

ジンジンと熱を発する頭を抱えながら起き上がると、周りの景色が変わっていた。

そこに広がるのはガラスの絨毯とそれを覆う木々ではなく、大理石で出来た部屋と大きなオブジェ。

やっぱり、あの木は魔法の産物だった。あの子への土産話がまた一つ増えた。

それに、これは明らかな人工物だ。森の中に一人ぼっちより何かの建物の中で一人ぼっちの方が、ずっと気が楽だ。

何故なら、きつと街が近くにある。

起き上がって回り込んでみると、そのオブジェには文字が刻まれていた。

それにしては余りに大きすぎるから、後ろからでは気付かなかった。これはお墓だ。

こんな大きなものは初めて見る。きつと、大分偉い人のお墓なんだろう。ひよつとしたら、ここは私みたいな身分の人が長居しちゃいけないような類の場所かもしれない。

「え…えむ…あい?…い…いー?…えふ…ええつと、みいふ…お…?ダメわかんない」

私は元々学校には行っていなかったと思うから、字が読めない。

記憶があってもきつと読めなかっただろう。でも、何故だかこの文字列は懐かしい感じがした。

しばらく悪戦苦闘した結果、このお墓の中で眠ってる人の名前を確かめるのは諦めた。

十字を切って手を合わせて、軽くお祈りを済ませると足早に部屋から出る通路に行く。

お墓の文字をじつと睨んで目が疲れたせいか、涙が出て止まらなくなってしまうている。

それに悲しい気持ちになってしまったから、一刻も早く立ち去りたかった。

『遺跡』と言えば良いんだろうか。道の分岐は沢山あったけど、一番大きな一本道を抜ければ問題無く外に出る事が出来た。

外から見た建物の全景は凄かった。

とても大きく、蔵かで、入り口にはバリケードがしかれ、『立ち入り禁止』を意味する絵の立て札が立てられていた事から、あのお墓以外寄り道しなかった事が正解だったと知る。

バリケードは有刺鉄線で敷かれていたから外に出るのには苦勞するかと思っただけ、比較的あっさり鉄線が破れている所を見付け、外に出る事が出来た。

「ん…」

丘の上に立てられている遺跡からは、少し放れた所に街の明かりを確認する事ができた。

範囲から察するに、そんなに大きな街ではないらしい。

私が居たところかどうかはわからないけど、森も見付けた。

歩くには少々遠いけど、街に行けば私の事も何かわかるかもしれない。

何より、私が起きた場所から一番近くにある街だ。きっと私が住んでいた街に違いない。

「それじゃ…がんばってこよう」

顔も名前も忘れてしまった『あの子』との再会を思い描きながら歩き出した。

振り返ると、遺跡の上に昇っている月が、とても綺麗なのが印象的だった。

一章 『再会』と良く似た『何か』 三話目

Wrote: SIE

「おなか減った…」

もう、多分かれこれ2時間は歩いている。

段差の無い階段のような木枠の両脇を、鉄で挟んだようなものが地平線の向こうから街まで続いているのを最初に見付けた時は、好奇心から木枠を踏み鳴らしたり細い鉄線の上だけを歩いてみたりしてそれなりに楽しめけど、もう飽きた。

草木が生えていないのはこの木枠のそばだけで、結局の所、飽きてしまえばこの小さな段差も歩きにくいだけだ。

そもそも、この街への道には馬車の通り道は無いんだろうか？

ちゃんと草を抜いて固めた土で舗装された大きな道が無ければ、馬車の一つも通れない。

もしかしたら、私の住んでいた街は他の街との物資の流通すらままならない田舎だったのかもしれない。

木枠で躓かないように足元に注意しながら歩きつつ、これまでの状況と思い出した事をまとめてみる。

まず、私は綺麗なガラスに囲まれて眠っていた。

そこから、何かの魔法の産物の力で、誰か偉い人のお墓のある遺跡に来了。

今、その遺跡から一番近くにある街に向かって歩いている。

思い出した事は…誰かと…きっと、あの子と何かの約束がある事。

そして、あの子は魔法使い。

ポッケの中に持っていたお金の数え方と、だいたいの価値。これは、街についたら重要な事だ。

それと、つい先ほど鉄枠に映った自分の顔を見て思い出したもう一つ重要な事。

「シア…」

これは多分、私の名前。

あの子が何度も私を見つめて『シア』と呼んでいるのを、おぼろげながら思い出す事ができた。

少し、心苦しい。

どうせならあの子の名前を思い出したかった。

そうすれば、この先にある街ですぐにあの子を探せるし、あの子が見つかれば私の事も教えてもらえる。

それに、顔を見れば思い出せるかもしれない。

…そうだ。それならいつそ、忘れ物を思い出せるようになる魔法が扱える魔法使いを探すのも面白いかもしれない。

きつといっぺんに全部思い出せる。

「いい事思いついちゃった…」

自然と、頬が緩んだ。自分ひとりでそんな名案を思いついたのが誇らしかった。

「よし、がんばってこう！」

私は綿々と続く木柵の上を、先ほどよりも足取り軽く走り出した。

翌朝。

私は小さな地響きと轟音によって目を覚ました。

飛び起けると、巨大な鉄の塊がまるで火事か何かのような煙を立てながら、木柵と鉄の柵の上を物凄い速さで通り過ぎていくところだった。

シユゴオオオオオオン！

ガシャガシャガシャガシャ！

「ひゃっ!？」

私は驚いて飛び上がって声を上げてしまったが、どうやら気付かれないですんだらしい。

『ソレ』はとても大きな威嚇音を立てながら、街の方へと走ってい

く。

私は呆然とそれを見つめながら、『木枠の上で寝なくて良かった』
と思った。

そうしたらもしかしたら、今頃ぺしゃんこになっていたかもしれない。

最初、昨日の深夜疲れきってしまったって今日はもう寝ようとした時、
木枠を珍しがってその上で寝ようとした。

ゴツゴツして思ったより寝心地が悪く、結局やっぱり脇の草むらで
寝る事にしたがそれが正解だったらしい。

「なんなのあれ……」

どつくんばつくん音を立てる心臓を手で押さえつけながら、さっき
の鋼鉄の塊を思い出す。

ちらつと見えたけど、車輪があつたような気がする。

でも、馬車以上の速さで、牛車の何十倍もの大きさで、その上全部
真っ黒な鋼鉄製だ。

その上火事のような煙を出して大きな音を出して怒って、そんな魔
物聞いたことも無い。

それこそ、あの子に教わった神話に出てくるドラゴンじゃないか。
そんなものを使役できる人があの街に居るのか……という思いと、
あんなものが平然と向かっていく街に向かう事に対する抵抗が私の
出発する決心を鈍らせた。

「……ドラゴン？」

そういえば、大昔はそういう生き物が居たという話をあの子がして
いた気がする。

鋼鉄の鱗に覆われた巨躯を大きな翼で宙に浮かし、炎をも吐く化け
物だ。

確かに、さっきのやつは話に聞いたドラゴンに凄く似ていると思う。
また、今度は、無意識に忘れ物を思い出していた。

「……でもこれはちよつとどうでもいいなあ……」

私は立ち上がると、また昨日のように歩き出した。さっきのドラゴ

ンに対抗するように、おなががぐるぐると唸った。今日中に街にたどり着けないと、いよいよもってあの子どもころじゃなくなってしまう。

「そっか……あの街にはドラゴンが居るんだ……」
でも、あまり悲観する事も無いだろう。

私の後方の遺跡は、もうとっくに見えない位置にあって、私の前方にはもう、街の塀が見えてきている所なんだ。
街はもう、すぐそこだ。

街：というか、市街地にたどり着いたのはもう昼過ぎになってからだった。

街に入るのに手続きか何かが必要かと身構えていたけど、関所ではすんなりと入れてもらえた。

正直、ほっとした。

自分の名前も出身地も思い出せないうえ、偽名を考えても文字を書けない私がそういうものを突破するのは、かなり難易度が高いと思っていたからだ。

塀の中に入ってもしばらくはただの住宅地で、お店が立ち並ぶような場所にはまだ距離があった。

それにしても、何か様子が変わった。

「レンガ造りの家って、こんなに多いものだったっけ……？」

そう。立ち並ぶ家々が、木造じゃない。

それに、すれ違う人々の服装も、妙に豪勢……というか、簡素ではない。

今思えば、私もかなり良い生地、綺麗な民族衣装のようなものを着ている。

「…実は特権階級の人の街？」

そう考えれば、上等な服を着ていた私が関所を顔パスできたのも頷けるかもしれない。

一般の衛兵さんより貴族の人のほうが偉いのは当たり前だし、そう

いう人相手に関所であれこれ問い質すのは失礼に当たるんだろう。その御令嬢様と間違われた事は、少しくすぐったいような感じがした。

わいわいがやがやと賑やかな市街地で、きよろきよろと辺りを見渡す。

道中で確認したけど、私はセロ銅貨を3枚に、硬貨を5枚しか持っていない。

ちゃんとしたレストランなんかでごはんを食べたら、銅貨なんてすぐに無くなってしまふ。

お金は大事に使わなくちゃいけない。

私は、少し寂れたようなパン屋さんを見つけると、お店のおじさんに声を掛けた。

「おじさん、セロ硬貨2枚で買える、出来るだけ大きなパンを下さいな」

「お譲ちゃん、お使いかい？えらいねえ……」

おじさんは茶色い紙袋を用意すると、私の想像よりちょっと大きめなパンを一つと、バターに乗った一口大のパンを入れてくれた。

「こっちはサービスだ」

「ありがとう！」

おじさんにはっこりと笑いながら言った。私も、作り笑顔ではない笑顔で答えた。

「ええと、御代のセロ硬貨2枚です」

お金を払うと、おじさんは怪訝な顔つきになった。

「……どうかしましたか？」

おじさんは私に渡しかけた茶色の紙袋を手元に戻し、私にセロ硬貨を戻した。

「おじさんは神様を信じているからね。こんな高価なものを騙すようにして受け取るわけにはいかないよ。きつと、お譲ちゃんのお母さんが間違えて渡したんだね。」

「え？」

言っている意味が、わからなかった。

「それは、旧セロ硬貨だよ。今では殆ど流通していない珍しいものだ。なんでお譲ちゃんがそんな物を持っているかわからないが…場合によっては銀貨よりも価値のあるものだ。それもこんなに状態の良い物を……受け取れないよ」

「そうなんだ……」

初めて知った。

私は硬貨の見分けなんて付かない。そもそも、旧セロ硬貨とか、新セロ硬貨とか、そんな言葉も聴いた事無い。

念のため持っている5枚全部の硬貨を確かめてもらったけど、全部が旧セロ硬貨でおじさんはものすごく驚いていた。

とりあえず、私の勘違いだったフリをして - 実際何も知らないけど - パン屋さんから離れる。

銀貨といえば、銅貨10枚かそれ以上の価値がある。銅貨1枚でも、硬貨にすると20枚もの価値があって普通のパンじゃ一人で何日か掛けても食べきれない程の量買ってしまうのに、その10倍だ。

からかわれているんじゃないとしたら、あのおじさんは凄く良い人なんだろうと思った。

次の行き先は、これで決まった。

「旧セロ硬貨4枚を流してほしいんですが」

出来るだけ、堂々と。

少しだけ爪先立ちをしながら、質屋さんに入った。

質屋のおじさんは「ん……」と答えながら、奥から出てきた。酷い強面のおじさんだ。

恐いけど、ここで負けちゃいけない。

「この4枚です」

手持ちのセロ硬貨を4枚、テーブルの上に置いた。

「ふむ……」

チラリ、と睨みつけられた後、強面のおじさんは一枚一枚、セ口硬貨を調べ始めた。

ルーペをとて大きくしたようなものを使って硬貨をみたり、キンキンと硬貨同士を当てて調べたりしている。

「……………」
強面のおじさんは、チラリチラリとこちらを睨みながら作業を続ける。

その度に、私は息を詰まらせながらも無表情を繕って虚勢を張る。パン屋のおじさんの目利きが正しいように、心の中でお祈りをする。

「……………一応、全部本物だな……………」
やった！

「本当ですか!?!」

ありがとうパン屋のおじさん！やっぱり物凄く良い人だったんだ！強面のおじさんはニヤニヤと笑いながら、鑑定の結果を続ける。

「まあ、ただちいとはつかし状態が悪い。いいとこしめてセ口銀貨2枚と銅貨3枚ってとこだ」

「え……………」

銀貨2枚？

考える。

質に流すのにお金が掛からなかったら、質屋さんが潰れてしまっただろう。

考える。

だから、価値に比べて貰える額が減るのは当たり前だろう。

考える。

それに確かに、質屋の方が本職だ。

考える。

でも、パン屋のおじさんは目利きでなんて言っていた？

思い出す。

『それもこんなに状態の良い物を……………』
そうだ。

場合によっては銀貨より価値のあるという旧セロ硬貨。

それも、状態の良いものと言う。

でも、質屋のおじさんは状態の悪いものと言う。

……パン屋さんの目利きと、質屋さんの目利きと、どっちを信用する？

そんなの決まってる！

「わかりました」

強面におじさんは、にっこりと……にんまりと……？笑った。

「それじゃあこの書類に……」

「別の質屋さんに行く事にします」

4枚の硬貨を、さっと取り返した。

強面のおじさんが、まるでカエルのような間抜け面をした。やっぱりだ。

小娘だと思われて、足元を見られたんだ。

「こんなに状態の良い旧セロ硬貨を4枚も、銀貨3枚以下で手放す事なんて出来ません！」

強気の口調で、言い放った。

強面のおじさんはしばらく呆気に取られた後、クツクツと笑い始めた。

「そうかい、そうかい……じゃあ銀貨3枚で」

「それと、銅貨を5枚」

試しに言い放った。実際に、ここ以外にも質屋さんはある。

一度足元を見られた以上、ここで無理に流す事も無い。むしろ、強気の取引だって通用するはずだ。

そうして私の要求に、強面のおじさんは大声で笑い声を上げた。

「ハッハッハッハッハ……肝の据わった讓ちゃんだ……舐めてんのか？」

低い声で脅し、睨んできた目を睨み返した。こうなったら、負けるわけにはいかない。

「銀貨3枚と銅貨を5枚」

そこから数秒間睨めつこを続ける。

一度カエルに見えたせい、強面のおじさんがカエルに見える。もう恐くない。

勝負だ。

「銀貨3枚と、銅貨を5枚」

主張を変えず、またキツ！と強く睨み返す。

カエルのおじさんが、やれやれと目をそらした。睨み合いは、私が勝った。

「銀貨3枚と銅貨を3枚。それ以上はうちには出せない」

やっぱり、本物だと判った時に喜び過ぎたんだ。

あれは失敗だった。覚えておこう。

「それじゃあ、銀貨3枚と銅貨を3枚、あと硬貨を2枚おまけにつけて下さい」

「……嬢ちゃんはうちを潰す気かい？」

「集めてるんでしょ？」

にっこりと、私は答えた。

殆ど相場ストレスの値段のやり取りに乗ってきたんだから、私にだってわかる。

この人は商売でなく、個人的に欲しくて買い取ろうとしている。

「……末恐ろしい嬢ちゃんだ」

カエルのおじさんは先ほどの書類を私に手渡してきた。

「まあ、商売上必要な手続きだ。ちゃっちゃと名前を書いてくれ」
全面的な、私の……いや、私達の大勝利だ。

書類の内容は、読めなくて殆どわからなかった。

それでも一応、目を通す『フリ』をする……けどどうしよう、何処に名前を書けばいいのかわからない。

「そんな体たらくでよくあんな交渉が出来たもんだ」

うるたえる私の姿をニヤニヤと眺めていたカエルのおじさんは、私から紙を取り上げると、書類の一部分を指差した。

「ここだ、ここ。こういう書類は線が引いてあるトコに書くんだ。」

名前だけで良い……書けるか？」

「ニヤニヤと笑うその笑い方に、ようやく気付いた。

……文字が読み書き出来ないの、バレてる。

「書けます！」

私はカエルのおじさんから紙をひつたくると、傍らの羽ペンを使って名前を書いた。

思い出した自分の名前が、知っている文字だけで構成されていて、心底助かった。

「S・I・E……シイか。変わった名前だな、譲ちゃん。覚えとこ
う」

……あれ？

「本当ならあの辺の棚に並べておく品だが、俺が今買い取っちまっても構わねえんだよな？」

「あ……はい、どうぞ」

カエルのおじさんは真新しい銀貨と銅貨を3枚、そして新セロ硬貨を2枚渡してきた。

「商談成立だ。ところで」

旧セロ硬貨を愛しそうにしまい込みながら、カエルのおじさんは小声で聞いた。

「何処でコイツを手に入れた？」

「最初から持ってました」

「……何処でコイツの価値を知った？」

「パン屋さんで教わりました」

カエルのおじさんが、今までで一番カエルのような顔になった。

私も、このお店に入って、一番の笑顔を浮かべた。

「ガッハッハッハッハッハ！その年で肝の据わり方は一流かと思えば、ジョークも一流だ！こりゃ参った」

「全部ホントですよ？」

「もういい、もういい……譲ちゃん、後5年したら読み書き覚えてここに来な。商売のイロハを叩き込んでやる」

「……遠慮しときます」

一気に元の十何倍もになったお金を、落とさないように大事にしま
い込む。

「もつたいねえなあ。一流の商売人の才能があるのによ」

「あはは……」

そういえば、この際聞かなきゃいけない事がある。

「ところで、『A』って、なんて書くんですか？」

「……俺はこんな譲ちゃんに競り負けたのか……」

カエルのおじさんはジトつとした目つきで紙に『A』と書いた。

……覚えておこう。

「ありがとうございます。お世話になりました、カエルのおじさん」

「カエル？」

呆気にとられるカエルのおじさんをわき目に、私はパン屋さんの元
へ駆け出した。

「すみませーん、パン下さいな」

「おやお譲ちゃん、どうだったかい？やっぱり間違いだったろう」

パン屋のおじさんは、私の事を覚えてくれていたようで、にっこり
と笑った。

「はい、間違えておじいちゃんのコレクションを取ってきちゃった
みたいで、怒られちゃいました」

はっはっは、とパン屋のおじさんは愉快そうに笑った。

「次は硬貨の見分けをつけられるようにならないとね」

おじさんは、先ほどのパンの袋を私に差し出してくれた。

「はい、そうします。これ、お代の新セロ硬貨2枚です」

今度こそ、パンを買う。

「……それと、おじいちゃんから、危ないところを助けて貰ったお
礼に一枚多く渡すように言われた『新セロ硬貨』1枚です」

おじさんは、私に渡された硬貨を見て、驚いている。

「これは…」

「集めてるんでしょ？」

私は、今日一番の笑顔をパン屋のおじさんに向けた。

それに答えるように、おじさんにもにっこりと笑ってくれた。

「ありがとうね、お譲ちゃん。それじゃあ、おまけにこれも付けてあげよう」

と、おじさんはお店の中で一番高価な、お肉と野菜がふんだんに使われたパンを幾つか紙袋に入れてくれた。

「ちゃんと、硬貨の見分けをつけられるようにならなきゃね」

にっこりこと、先ほどと同じ事を言うおじさんに向けて、私は今思い出した受け売りの言葉を返した。

「『神様は、人に騙される正直者にこそ光を与える事でしょう。人を騙す利口な愚者には闇を与える事でしょう』」

「おやおや……」

「私も、信じてますから。神様」

カエルのおじさんに勝たせてくれたお礼です。

「それじゃ、私、もう行きますね。おまけ、いっぱいありがとう」
「ございます」

「ああちよつと待って、お譲ちゃん。お名前だけでも教えてくれな
いかな？」

おじさんは、にっこりと笑って首を傾げた。

私はちよつとだけ考えてから、答えた。

「シイ、です」

「そうかい、そうかい……シイちゃん、これも持っていきな」

おじさんは一旦店の奥に消えて、戻ってくると一つの帽子を私にかぶしてくれた。

「わ……ありがとうございます！」

「うちの娘が昔かぶっていたものだよ。信心深いシイちゃんが使ってくれたら、きっと娘も喜んでくれるだろう……またね」

「はい、また！」

私は、パンのいっぱい詰まった紙袋を持って駆け出した。

帽子のツバで上の方の視界が少し悪くなってしまうけど、きっとすぐに慣れるだろう。

あの子の言葉を思い出した。

思い出せた。

それが、とても嬉しかった。

「……………」

もう、パン屋さんが見えない所まで走ってから気付いた。

「忘れ物を思い出す魔法使いの事、聞き忘れちゃった」

……………まあ、今日はもういいか。

「それは明日から、がんばってこつ」

私は一番豪勢なパンを選んでかじりながら、暮れ掛ける夕日に向かって宣言した。

一章 『再会』と良く似た『何か』 四話目

Wrote: SIA

「そういえば、ドラゴン居ないな……」

お昼休憩に昨日貰ったパンをかじりながら、呟いた。人に使役された、人を襲わない安全なドラゴンなら、少し見てみたい気もするのにな、さっぱり見掛けない。

結局、昨日私は割と大きなお屋敷の階段で野宿をした。壁に囲まれてて屋根があつたから、快適とは言わないまでも道端で寝るよりマシな睡眠を取れた。

とはいえ体の節々が固まってしまっていて、首周りでべきん、べきん、と音を立てると少し頭が軽くなった。

私は昨日よりもっと街の中心の方に向かっていている所だ。パンに使われている少ししょっぱくて甘い、赤い液状の不思議な香料はとても気に入った。

それで汚れた手を舐めきってから、今日何回目かになる質問を街の人に見てみた。

「忘れ物を思い出させる魔法？そんな事が出来るのは、それこそ世界中でミア・フォルトくらいのも物だろう」

今日何回目かの同じような返答を聞いて、ちよつとげんなりしてきた。

「教会に行ってみたらどうだい？何かわかるかもしれないよ」朝のうちに何度か教わった事を聞いてみる。

「確か、この街にミア・フォルトさんの家があるんですけどよね？」

「ああ、そうだね。歩いて行くには少し遠いけどね」

何度か人に尋ねてその都度方向を確認しながら、街を進んでいく。ミア・フォルトというのは何やら、物凄い魔法使いらしい。

曰く。世界一有名な魔法使いである事。

曰く。彼女は女性で、全知全能とも言える存在である事。

曰く。不老不死で、何百年も昔からこの国にいるという事。

曰く。200年も昔に、なんとかかという伝説の魔物を倒したという事。

曰く。彼女を守る恐ろしく強い魔物を2体も使役しているという事。

「ここまできると眉唾ものだなあ……」

あまりにも、現実味が無い。魔法使いだったあの子も言っていた。

『不老不死なんてものは存在しえない』と。

それでも、当てが無い私は教会とミア・フォルトとを両天秤に掛けてミア・フォルトを優先した。

理由は一つ。

あの子が教会を疑問視していたからだ。

日を追う毎に、随分と色んな事を思い出した。

その殆どがあの子の事だ。顔も名前も思い出せないけど、あの子の言動……

あの子との記憶だけは、割と鮮明に思い出せるようになっていた。

「えへへ……」

昨日パン屋さんで貰った帽子をくるくると回しながら、私の旅路の好調っぷりに笑みをこぼした。

この帽子はツバの部分が小さく、かぶる部分が大きく膨らんでいて、見た事も無い珍しい形をとても気に入った。

あの子の言っていた教会に対する評価を思い出す。

昔の教会は、記録では神様を純粋に信仰する素晴らしいものだった。改革が行われた後の教会はおかしい、という事。

それにしても……

「ミア・フォルト……ミア・フォルト……何処かで聞いた事あるよ
うな気がするのになあ……」

私がこの街で聞いた誰もが知っている有名人だから、聞き覚えがあるだけかもしれない。

なのに、妙な引っかけりを感じていた。

しばらくの間歩いてから、また方角を確かめるのに同じ事を街の人に質問をした。

また、同じような答えが返ってきた。

「え……何、お金とるの？」

歩いては『ミア・フォルト』について聞きを繰り返し、ミア・フォルトの家に着いた時には夕方過ぎだった。

結局最後は、親切なお婆さんが道案内をしてくれて、無事にミア・フォルトの家に着いた。

だけど……

あまりにも、そんな物凄い人が住んでいるような家には見えない。

昨日勝手に野宿に使わせて貰ったお屋敷の方が、大分……というより、比べる事が失礼な程にこの家はみすばらしい。

先ず、壁がレンガですらない。昔懐かしの木造建築だ。

この辺一帯でも珍しい。しかも、見たところかなり昔に建てられたような朽ちた家だ。

そして……

お婆さんが去り際に教えてくれた、料金箱。

この家を訪ねるのには銅貨を一枚入れなければならぬらしい。

銅貨を一枚！

お洒落なレストランで、ちょっとそれなりのランチが食べられてしまう値段だ。

こんな人の生活の気配すらない家に入るのに銅貨一枚というのは、どうにも躊躇われた。

そもそも、好き好んでこんな家に住んでいるだなんて、どう考えたって変人だ。

建物の古さという物珍しさでお金をばったくる商売に、ミア・フォルトの第一印象は『最悪』。この一言に尽きる。

「……仕方ないけど、決まりは決まりだもんね」

銅貨を一枚木箱に入れると、チャリンと銅貨同士のぶつかる音がした。

意外な事に訪ねる人はそれなりにいるらしい。

「ごめんください」

コンコンとノックしても反応が無いからドアノブを回してみたら、家の扉は鍵が掛かっていなかった。

仕方なく家の中に入ると、これまた妙な光景が広がっていた。

「……なんで家の中にバリケードを張るの……？」

家の中には、生活に必要な調度品は一通り揃っていた。

けど、おかしな事に、一人が通れるくらいの大きさの通路を作るかのように、家の中にはロープが張り巡らされている。

部屋のこちらから部屋のあちらに行くのに、ぐるりと壁際を回らないといけないなんて不便じゃないだろうか？

それに、何の変哲も無いランプや、ツボや、楽器なんかの傍に立て札が立ち、何やら大量の文字が書かれている……使い方でも書かれているのだろうか？そんな物の使い方は小さな子供でもわかるだろうに、どうやら魔法使いは優秀なら優秀であるほど頭の中があべこべらしい。

そうすると、あの子はあまり優秀な魔法使いでは無いのかもしれない。

「うーん……」

それでも、この街に着てからなんとなく一番見覚えがあるような気がする品々を横目に次の部屋に入る。

この部屋もバリケードが敷かれていた。使われた形跡の無いベッドに、数個の黄ばんだヌイグルミ。

「あ、これ見た事ある」

この街に着いてからヌイグルミを見る機会なんて無かったから、私の記憶の中にあるものだろう。

それにしても、布地も黄ばんで薄汚れていて、相当昔のもののような。

「……やっぱり似てるけど別物かな」

常識的に考えて、学校にも通っていなかったような小娘が、そんな貴族の集めるようなアンティークを持つているわけ無い。

出来るだけ家具には触らないようにして、まるで子供部屋のようなここを後にする。

次の部屋に向かおうとした所で、庭に一人の女の子が居る事に気付いた。

この位置からは顔は見えないが、紫色の髪の毛を両側で縛って垂らし、淡い色のドレスを身に纏っている。

私は街で聞いたミア・フォルトの外的特徴を思い出した。

女性で、不老不死。

「でも、小さすぎない……？」

そう。『女性』というには、あまりにも背が低い。私よりも低い。

まるで小さな子供のような……

彼女は私に気付かず、窓から見えない死角の方に歩いていってしまった。

「あ、ああ！ちょっとまって！」

私は窓から身を乗り出すと、「えいつ」と声を上げながら窓から外の芝生に飛び降りた。

くしゃり、と昨日のパンの入った紙袋が、潰れてしまった。

私の声に戻り返った女の子は、やっぱり私よりも小さな子のようだった。

薄紫色の髪の毛に紫色の瞳。淡い色のドレスに、首からは大きな鈴を垂らしている。

女の子はぼかんと小さく口を開け、目には少しの戸惑いの色を浮かべていた。

「あの、あなたがミア・フォルトさん？私……」

出来るだけ不信感を抱かせないように声を掛けながら歩き寄ろうとしたら、女の子は大きな動作で、でも素早く首に垂らした鈴を私に

向け、半身を引きながら私を睨みつけた。

リイイイン……

あまりの状況に、私も困惑する。鈴の音が、私の言葉をさえぎった。女の子は、震えている。気丈な目で私を睨みながらも、私への恐怖心が見て取れた。

警戒心とか、そういうレベルのものではない。

この子は、私を、敵視している。
困った。

「か、勝手に入っちゃってごめんね？でも、ちゃんと銅貨を入れてきたんだよ」

言い訳をしながら私が一步步くと、女の子も一歩後ずさった。

どうしたものか……と、考える。どうやらこの子はミア・フォルトでは無いようだ。そういえば、さっき子供部屋のようなものがあった。もしかしたら、この子はミア・フォルトの娘さんなのかもしれない。

何が怖いのか、ガチガチと歯と歯で音を鳴らしながら、女の子は涙を浮かべている。

それでも、その目に私への敵意は消えていない。むしろ、涙を流しながらも目を見開いて、まるで親の敵か何かのように睨みつけられている。

正直、怖いのは私の方だ。

「え、えーと……お姉ちゃん怖い人じゃないよ？ちょっと、あなたのお母さんに用事があった……」

私が一歩、近づく。

女の子が一歩、後ずさる。

「そ……そうだ、パン、食べる？美味しいのがまだ一つ残ってるんだよ」

私が一歩、近づく。

女の子が一歩、後ずさる。

一体私がこの子に何をしたんだろう。わけがわからない。

そのうちに、女の子の背が塀にぶつかった。それに驚き、焦った女の子はバランスを崩して転びそうになる。

「危ないっ!」

間に合うかどうか分からないけど、倒れそうになった女の子を支えようと走る。

ぱしんっ

と、私に鈴を向けていた女の子の右手を掴んで、なんとか倒れるのをふせいだ。

暫くの間、沈黙する。

空気が、固まる。

数秒後。

「あ……ああ……ああああああああああああああっ!」
火が点いたように、女の子が耳をつんざく悲鳴を上げる。

「うわひゃっ!?!」

これには、むしろ私が驚いて、思わず女の子の手を離す。

リン、リン、リイイーン……

と、鈴の音を立てながら右手を振り回して、女の子は私を追い払う。私もたじろいで、数歩後ずさる。

半ば半狂乱に陥ったかのような女の子を前に、どうすれば良いのかわからない。

とりあえず謝る? パンでご機嫌を取る? さっきの部屋にあった人形でなだめる?

…とりあえず一つずつ試す!

「あ、あの、ごめんね? お姉ちゃん別にあなたに何かしに着たわけじゃ……」

リイイーン!

先ほどと同じように、鈴の音が私の言葉を遮る。

……いや、言葉だけじゃない。

リン、リン……

鈴の音がする事に、体が重たくなっていく。

気がついたら、立ったまま、水晶の絨毯で寝ていた時のように全身が動かなくなっていた。

女の子の目に、殺意を、感じた。

「滅せよ！」

その一言を聞いた瞬間。

私の意識は、闇に溶けた。

一章 『再会』と良く似た『何か』 五話目

Wrote: RIL

件の月の無い夜。

地べたに座り込み、ぶつぶつと何か呟きながら考え事を始めたベルクを前に、サヤはベルクと扉の外とを見て比べて少し迷った後、回廊の方に向かった。

回廊の片付けに向かったんだろう。ベルクの思案の邪魔をしてはいけないし、私もサヤに続こうとすると、ベルクに呼び止められた。

「リル」

ベルクは部屋の隅に置かれた机に向かい、羊皮紙に何事かを書いて私に渡した。

「初代ミア・フォルトの生家の住所だ。誰か使いが来るかどうか…何にせよ、変化があるまで暫くここに滞在してくれないか？」

見ると、セルリアの首都からは随分と離れた処だ。

しかし幸いな事に、汽車が通る街だから難しい注文ではない。

「この状況で俺がここを離れるわけにいかない…が、そっちもかなり事は重大だ。必要ならいくらでも呪言を使って良い」

視線が揺れた。

……ベルクは、嘘をついている。

意識すると、本来なら呪言を使って欲しくない任務。ただし、呪言を出し惜しみするにはあまりにも危険な任務ということか。

私は、こくりと頷いた。

出来るだけ、ベルクの本心を優先しよう。

「とりあえず銀貨が10枚あればいいか……っと、一応金貨を1枚用意しよう」

ベルクはがさごそと机を漁り、幾つかの硬貨を準備する。

皮で出来た袋に入れて、手渡される。私が大きなお金を持たされる事は珍しい。

普段の買物物は、サヤの仕事だからだ。

「……まあ、夜は汽車も動いてないから今夜は回廊の片付けだけだな……」

はあ、とベルクは大きくため息をついた。

翌日、屋敷の片付けはサヤに任せ、ベルクは教会へと昨日の被害の報告に向かった。

「教皇の小言を聞きにわざわざこっちから出向くのが面倒だ」

と、ぶつくさ文句を言いながらも、とぼとぼと歩いていくベルクを見送ってから、私もサヤに向き直った。

指先で宙に描く。

『行ってきます』

「はい、行ってらっしゃい。気をつけて下さいね」

サヤは笑顔を浮かべて、左手で私の右手を取る。

私は左手でサヤの右手を取った。

両の掌を合わせ、目を閉じてお祈りをする。

「『エンゲージ』」

お祈りをすませると、軽く手を振って駅の方へと歩き始めた。

きつと、いつも通りサヤは私の姿が見えなくなるまで屋敷の前で小さく手を振り続けるんだろう。

それがわかるから、私は足早に駅へと向かった。

『ミアキャベルまで子供一人』

駅員は職業柄、全員筆談が通じるのが楽な所だ。ある程度教養のある人間しかねない職だから、やれ喋れないのか何とかと詮索されて面倒な事も無い。

流石に、家出じゃないかとかあれこれと聞かれたが、「田舎へ祖母に会いに」という設定を貫いた。

子供料金でこのような施設が使えるのはありがたいが、こういう時にこの身体の不便さを感じる。

それに、いつもながらベルクは詰めが甘い。ベルクは司教なのだから、紹介状の一つでも用意してくれば、鶴の一声でこんな面倒な詮索もされずに済むというのに。

銀貨を5枚渡し、お釣りに銅貨を2枚貰う。

確かに転移魔法を使う触媒代よりは安いとはいえ、大人の料金の半分でこれとはかなりの額だ。

この儲けの上前を教会がはねている事から逆算すると、ベルクの稼ぎがいかに安いのが窺い知れる。

駅で暫く待ち、この駅に止まった汽車の行き先が逆方向ではない事を確認してから乗り込んだ。

ベルクはいやに汽車を気に入っているが、私はこのごっこつとした安い造りの椅子も、走るときの振動も苦手だ。

とはいえ三代目の時代に汽車があったら、おそらくはあの科学かぶれはベルク以上に私達を連れて無意味に乗り回るだろう。その所を考えると、変に付き合わされない分ベルクの方が大分マシかもしれない。

思わぬ所でベルクの良い所を見付けてしまった。

……いや、ベルクは先代に比べあらゆる点で劣っている。

そもそもこういう物を相手に、はしゃがない大人な精神を持ち合わせていないベルクがいけないのだ。

受け継いだ名に相応しくない破天荒なのは3代目と4代目だけで十分以上だ。

思い出すと、アレにつき合わされていた義妹が少々哀れに思えてくる。

ベルクも、はやく精神的に成長してくれないものだろうか。考える。

無理だな。

アレはもう、何故何処が先代の目に適ったのかが不思議なくらいの

男だ。

首都から辺境のミアキャベルまではかなり時間が掛かる。うるさい騒音を鈴の音で私に届かぬようにして、眠りにつく事にする。

『おやすみ、サヤ』

いつも通り宙に描いてから、私は目を閉じた。

揺さぶられて、目を覚ました。

汽車の車掌が切符の確認に来たのだ。

自分で遮音をおきながら、しばらく何故何も聞こえないのかわからなかったのは、失態だ。

ベルクやサヤが居なくて良かった。

車掌に切符を見せ、筆談で現在地を聞く。

全く知らない地名を言われたのでミアキャベルまでの時間を聞くと残り1時間かそこらという事だった。

眠るには短く、起きて待つには少々長い時間だ。

「おはよう、お嬢さん」

声を掛けられて気付いたが、汽車の座席の相乗りに妙齡のご婦人が座っていた。

私がこの汽車に乗った時には居なかったから、私が眠っている間に乗ったんだろう。

小さく会釈すると、何処から来たのかを聞かれた。

面倒を嫌って宙に描こうとしたが、少し迷った末筆談を選んだ。

セルリア公園の辺境は教会の力が余り強くない。魔法使いだという事をひけらかす事は無いだろう。

『メルラ』

「それはまた、随分遠くへ行くのね」

婦人は先ほどの車掌と私とのやり取りを見ていたのだろう。行き先は聞かれなかった。

私は、こくりと頷いた。

「私はね……」

穏やかな顔をしながら、婦人は私に自分の目的地や出身地、家族……特に、最近生まれたという息子の事を話し始めた。

私が喋らない事、筆談を多用する事から気を回して自分が喋る側に回ってくれたのだろう。

まだ小さいという婦人の息子を祝福したかったが、それはサヤの担当だ。逆の事しか出来ない私は、何もしない方が良さだろうと結論付け、作り笑いを浮かべながら時々相づちを打つだけに留まる事にした。

「そうだ、貴方にも分けてあげる」

半ばぼんやりと聞いていた為、話の繋がりを見失っていた。

「夏になると、常に太陽を向いて花を咲かせる不思議な花の種よ」
婦人はバツクから細長い花の種を出すと、私に2、3粒分けてくれた。

「実は食べられるのよ、その種。殻を吐き出すのがちょっと難しいけれど」

『ありがとう』

婦人は笑いながら言った。

「お嬢さんはその年で落ち着いていて、しっかりしててお利口で偉いわね」

私は、苦笑しながら頷いた。

褒められたのは嬉しいが、こういう時に自分の年を言ってしまったくなる衝動は何年経っても変わらない。

流れる外の風景を見た。

初代ミア・フォルトの眠る遺跡が、遠くに見えてきた。

ミアキャベルの駅で婦人に別れを言って、切符を駅員に渡して降りる。

初代ミア・フォルトとの直接の関わりすらある私も、その生家には行った事が無い。

もつと言えば、ミア・フォルトにあやかっけて付けられた名を持つこの街に来た事すら、無い。

何事にも例外は存在するものだが、ミアキャベルは辺境ではほぼ唯一、住んでいる人々が教会の魔法使いに対して友好的な街と言えると聞いている。

辺境には辺境のルールがある。

ここでは道中と違って気兼ねなく宙に文字を描いて『会話』が出来るので、かなり楽だ。

基本的に誰にでも習得出来る『文字描き』である。

少々驚かれこそするが、驚かれる内容は『文字描き』を扱う事よりも、それを扱う私の見た目の年齢に対して、だ。

首都のメルラ以上に、魔法使いに対して寛容なのが窺い知れる。

それにしても笑ってしまう。

道行く人々にミア・フォルトの生家について訪ねると、決まって返される返答。

ミアが不老不死だとか、全知全能だとか、魔物を2体使役しているだとか。

噂も案外馬鹿に出来ないものだ。しかし噂は所詮噂でしかなく、ベルクが全知全能などへソで茶を沸かせる。

しかし私は100歩譲ってそうだとしても、人に祝福を与えるサヤを魔物呼ばわりとは良い度胸をしている。

駅から小一時間程歩き、ミア・フォルトの生家にたどり着くと、まず笑った。

完全に観光地化されてしまっている。

銅貨を一枚入れる料金箱が設置されているが、私はそれを無視して家の中に入った。

家の中は中で、家中にロープで部屋の中に観光道を造り、ミアが当時使っていたとされる家具が展示されている。

全体を見渡して、ミアの生家の様子を見てくれというベルクの依頼は最優先事項に変わり無いが、ミアの生家の中に住む事は無理

がある」と結論付けた。

しかしコテージにはロープも無く、芝生の庭がある為、家に入らずコテージで生活をする事にした。

私は純粋な人間とは違うから、別にその位問題無い。

「……」

コテージから芝生の庭を見ていて、思い出した。

初代ミア・フォルトは何かの花の畑を造りたがっていた。

ただの一度だが、聞いた事がある。

畑と言うのにはあまりに小さいが、婦人に種を貰ったのも何かの縁だ。

それに、ただの飾りとしての意味合いしかない遺跡の方に置いてくるよりも、生家で咲いて貰った方が彼女への供養になるだろう。

私は、貰った3つの種のうち、2つを地面に埋める事にした。1つはベルクの屋敷で育ててみよう。

「……」

花の種を育てた事など無いから、いまいちどれくらいの深さで埋めたら良いかわからない。

適当に間隔を開けて穴を開け、種を入れて土をかぶせた。

祝言の一言でも言えたら良いのだが、それは生憎と私には縁遠い物だ。

この種には自力で頑張ってもらおう事にしよう。

井戸を探して、ミアの生家からカップを一つ拝借し、水をかけてやる。

……私が手伝えるのはこのくらいだ。

「誰か使いが来るか何か変化があるまで」の、暇つぶしになるものを見付けた。

月が、顔を覗かせ始めた夜の事だった。

変化があったのは、土の中から芽が出た頃の事だった。

花に水をやって成長具合を確かめて、次は何をしようかと考え始めた時だった。

「あ、ああ！ちよつとまって！」

背後から聞こえた声に、振り返る。

少女が、居た。

土色の髪の毛にキャスネット帽をかぶり、まだあどけない顔をした少女。

いや、そんなことは、どうでもいい。

手に持っていたマグを投げ捨てた。

今はその少女の外的特徴などに目を向ける時ではない。

少女に憑いたモノは……アレは、一体、何物だ！？

「あの、あなたがミア・フォルトさん？私」

獲物を見付けて猛った『何か』に憑かれたまま近づいてくる少女を、私は鈴を使つて制した。

不味い。

不味い。

不味い。

不味い。

不味い。

頭の中で警笛が鳴り響く。

なんだ？「アレ」は。あんなものに憑かれて、平然としているあの少女は何者だ？

私の所作に、少女は困惑しているようだ。

……少女が「アレ」を使役しているわけでは、ないようだ。どうすれば良い？

私が相手をするには、危険すぎる相手だ。

闇が、濃すぎる。底知れない魔力と、殺気を感じる。

一目でわかる。この悪霊は、神格化された精霊と同等の力を持っている。

こんな街の中に、平然と居る事から想像つく。

こいつは、エサを見付けるまで、じつと少女の中に潜んでいたんだ。私の持つ魔力に惹かれて正体を現した。

この私をすら兎のように捕食する、獅子だ。

「か、勝手に入っちゃってごめんね？でも、ちゃんと銅貨を入れてきたんだよ」

何事かを言いながら、少女が私に近づいてくる。

少女は何も気付いていない。

よほど強い抵抗力の魔力持ちなのか、異常な程に鈍感なのか、あるいはその両方か。

どちらにせよ今は、そんな事を聞いている状況じゃない。少女の言葉は耳に入れず、一步下がる。

こんなもの、どうしようもないじゃないか。

サヤが居なければ、祝言で断ち切る事は出来ない。

……いや、サヤをこんな危険なモノにぶつけるわけにはいかない。ベルクが居なければ、強引に倒す事も出来ない。

……いや、ダメだ。武芸に秀でた三代目ですら倒しきれなかったシーラ・ル・レッドよりも、余程不味い威圧感を放つ相手だ。

あの軟弱なベルクごときが一人居てもどうにかなるとは思えない。ここにはあいつも居ない。

いつもいつも、大事な時に限って居ない奴だ。力はあってもそれが役に立った試しが無い。

この状況と、義妹を連想するように、不意に『血塗れシーラ』の一件を思い出した。

あの時と同じ。

神格化された精霊は伝承の中にある竜族と同じだ。人間がどうにか出来る領分ではない！

身体の震えが止まらない。

どうすれば良い？

どうすれば良い？

叫んではダメだ。声を発してはダメだ。『アレ』を攻撃する前に、

少女が死んでしまう。

食いしばったはずの歯が、ガチガチと音を鳴らす。生理的に流れる涙が、止まらない。

それでも、『アレ』から目を逸らすわけにはいかない。そいつは少女の肩口から、まるで脱皮でもするようにずるりと爬虫類の骸骨を象った半身を覗かせ、ケタケタと笑っている。

「え、えーと……お姉ちゃん怖い人じゃないよ？ちよっと、あなたのお母さんに用事があったって……」

少女が……『ソレ』が、一歩、一歩と近づいてくる。

私は、じりじりと後ずさる。十分以上に、怖い人を連れているじゃないか！

「そ……そうだ、パン、食べる？美味しいのがまだ一つ残ってるんだよ」

今はそんな状況じゃない！

じりじりと後ろに下がる。

そのうちに、壁にぶつかって、逃げ道を失ってしまう。

反射的にそちらに目を向けると、出たばかりの芽を、片方踏み潰してしまっていた。

慌てて足をどけようとしたら、バランスを崩した。

「……ッ！」

「危ないっ！」

事もあるうちに、少女が、その肩口から死神を覗かせ、私の腕を……よりによって鈴を持っていてる方の手を……掴む。

少女の腕を伝って、死が私の身体に這い寄ってくる。

「……ッ！」

ダメだ。声を上げては、ダメだ！

私の身体が、侵食されていく。

痛い。

痛い。

痛い。

「……………」

痛い。

痛い。

痛い。

「ああ……………」

痛い。

痛い。

痛い。

「あああああああああああああああああっ！」

右腕が、勢いよく、『喰い千切られた』。

持っついていかれた右腕を、死神が貪る。

しかし、無くなったはずの私の右腕が、手元にもある。

死神が腕を貪る度に、腕を喰われる鋭さも鈍さも解らない激しい痛み
みに、腕を振り回す。でたらめな呪言のこもった鈴が、鳴り響く。

助けて。

助けて。

助けて。

「あ、あの、ごめんね？お姉ちゃん別にあなたに何かしに着たわけ
じゃ……………」

死ぬわけにはいかない。

死にたくない。

まだ、死んではいけない。

エンゲージを交わしたサヤを、残して逝くわけにはいかない。

私は、呪術師だ。

祝言のサヤとは違う。

人を呪い殺した事だって、ある！

リイイン！

明確な意思を持って、呪う。

殺されるくらいなら、殺してやる！

何度も、何度も、ショックで死にそんな痛みを堪えながら、鈴を鳴

らす。

「あああああああああああああああああつ！」

死んでしまえ！

死んでしまえ！

死んでしまえ！

鈴の音が鳴り響く毎に、目の前の少女から徐々に生気が失われていく。

死神が、私の腕を、とり落とした。

頭を押さえ、苦しみ始める。

瞬間。

腕の痛みが、殆ど嘘のように消え、ほんの一瞬だけ、冷静に。冷酷に。

私の意識が、一つに纏まる。

「滅せよ！」

明確な事の葉を、鈴の音に乗せて放つ。

死神は、苦しみながら少女の中にもぐり込んで行った。

少女は、人形のように……それこそ、本当に人形のように、どさりと倒れた。

肩で息を吐きながら、右手を見つめる。

在る。

指先も、動く。

痺れを残しながらも、痛みは残っていない。

さっきのは、幻覚だった……？

いや、奴は本物だった。確かに、そこに、『居た』ハズだ。

ありえない。一体どういう事だ……？

そこまで考えて、人としての理性を思い出す。

私は、何をやっていった！？

殺すべきを間違えて、何をしようとした！？

「……ッ！」

少女を抱き起こして、脈を測る。瞳孔が開いていない事を確認する。

心の臓が動いている事を確認する。

「……………」

私は、大きく息を吐く。

助かった。あの時と同じ過ちを、犯さずにすんだ。

少女は、生きていた。

一章 『再会』と良く似た『何か』 六話目

Wrote: SIA

なんだか身体が重たかった。

意識があるのに、目が覚めない。

なんか気分としては、数日前のガラスの絨毯からやり直しをさせられてる感じだ。

嫌だ、と思った。

カエルのおじさんに勝った事。パン屋のおじさんに帽子を貰った事。せつかく思い出してきたあの子の事。

それらの過程が無かった事のようになって、また同じ事をするのは嫌だった。

もし今また記憶をなくしたら、この珍しい帽子を、何の感慨も持たずにかぶり続けるんだろう。

あの子の事を、忘れた事さえ忘れてしまっただろう。

そんなのは嫌だ。

私は忘れない。もう、これ以上絶対に忘れてやらない。

強く思ったその時。

冷たい何かが、私の頬に触れた。

「ひゃんっ!？」

びっくりして飛び起きると、私を覗き込んでたんだろう女の子とおでこをぶつけた。

「たっ……」

「……!」

思わずおでこを押さえる。女の子も同じく、しりもちをついた。

腰の引けたような状態で、リンと鈴を私に向けた。

女の子は私を探るように見て、鈴を下ろすと額を押さえた。

この子の、鈴で人を指差すのは何の遊びなんだろう？

「だ、だいじょうぶ……？」

女の子は、少しだけ私への警戒心を見せながら、こくりと頷いた。何か、かなり夜だ。

思い出す。私は夕方過ぎにミア・フォルトの家を訪ねたハズだ。

……いつの間にか、眠ってしまったようだ。

その間に、女の子は大分落ち着いてくれたらしい。

人見知りをする子のようで、さっきのはきつと情緒不安定だったんだらう。

辺りを見渡すと、私を中心に淡く光る素材で何かの魔方陣？が描かれ、所々にガラスの欠片を置いていた。

……や、何？この子何してたの？

「えつと……」

話しかけようとしたら、女の子が空中に指先をさらさらと動かす仕草をして、申し訳無さそうに頭を下げた。

「わあっ！？」

空中に、淡い紫色の光り輝く文字が現れ、思わず声を上げてしまった。

やっぱり、流石はミア・フォルトさんの娘さんだ。こんなに小さいのに見たことも無い魔法を事も無げに使われて、びっくりした。

とはいえ、私はまだ魔法らしい魔法をきちんと見た事無いんだけど

……

「……？」

私が驚いた事に対して驚いたかのように、女の子は疑問符を浮かべている。

女の子が、また、同じように指を宙に走らせる動作を始めたので、私はその手を取って掴んだ。

「待って」

「……？」

女の子は、また疑問符を浮かべる。

「私、字、読めない」
恥ずかしいけど、正直に言った。

女の子は渋い顔をしながら、ジエスチャークイズをし始めた。
顔を赤くしながら何事かを私に伝えようとするけど、さっぱりわからない。

私はむしろ、女の子の事より魔方陣の方が気になっていた。
怪しい交霊術でもしてたんじゃなかるうかと言える、不思議な文様だ。

「あれ？このガラス……」

私が眠っていた森にあったものと、とても似た色をしている。
見比べようとポッケを調べたら、ガラスの欠片が全部無くなっていった。

「あれ……？」

わけがわからない。

女の子は、申し訳無さそうな顔をしながら、私のスカートのポッケを指差し、魔方陣の端々に使われているガラスを指差しをした。
つまり……

「……」

ばつの悪そうな顔をしながら、女の子が私の顔を見上げている。

ミア・フォルトの娘さんは、かなりの悪戯っ子らしい。

「あの……多分、一緒に光る葉っぱが入ってたと思うんだけど……」
女の子は、「合わせる顔も無い」とでもいうような顔で、数枚の淡く光る葉っぱを取り出した。
念の為お金が無くなっていないかを確認したが、そちらは無事らしい。

ミア・フォルトの娘は悪戯はするがそんなに悪い子というわけではないみたいだ。

一生懸命空中に文字を書いて言い訳をする姿が、妙に可愛らしい。

「もう、人のもの勝手に取っちゃダメでしょ」

おでこを指でつつくと、不満げな顔をされた。
私が掌を差し出すと、女の子は困ったような顔をした。
取り出した葉っぱを、背中に隠すような仕草をする。

「……もしかして、欲しいの？」

女の子は、複雑そうな顔をして頷いた。

確かに、不思議に光る葉っぱはとても綺麗だ。欲しくなる女の子の
気持ちもちよっとわかる。

だけど、少し困った。この葉っぱは、多分私の記憶の手がかりだ。

「じゃあ、一枚だけ返して？残りはあげるから」

私の提案に女の子は頷いて、淡い光を放つ葉っぱを一枚私の掌に戻
してくれた。

一緒に、一つの何かの植物の種も置かれる。

「お礼にくれるの？ありがとう」

女の子は、頷いた。

女の子が喋らない事に、違和感を覚えた。さっきは叫んだり、喋っ
てたような気もするけど……

こんなに小さいのに、苦労してるんだろう。あまり詮索するのは可
哀想だからそれには触れない事にした。

種は、細長くて縞の模様がある形をしている。

何の花だかはわからないけど、何か物を人にかけてそのお返しに物
を貰うというやり取りは、少し嬉しかった。

「このガラスも、取って良い？」

女の子は、こくりと頷いた。淡く光る魔方陣の上から、ガラスの欠
片を拾い上げていく。

透かしてみると、元の色より陰りが見える。単に夜だから気のせい
かもしれないけど。

ガラスを全部拾い上げると、魔法陣の淡い光は消えた。

探しやすいように、光を残していてくれたらしい。

「ありがとう」

女の子は、少しそっぽを向いた。

「そういえば、貴方のお名前はなんていうの？お母さんは？」

焚き火を見つめながら、先ほどから気になっていた事を聞いてみた。女の子は、不思議な事に家の中にはあまり入ろうとせず、庭で焚き火を始め、ケトルでお湯を温め始めていた。

さつきと同様に、宙に文字が描かれた。

「あ……い、る？」

首を横に振られた。

「えつと……あーいる？」

首を横に振られた。

難しい。私は後ろの方の文字は殆ど読み方がわからない。

女の子は自分の口元を指差し、何度か唇を動かした。

「い、う？」

唇を読んだら、小さく頷いた。

「いうちゃんね、私はシアっていうの」

渋い顔をされた。どうやら、まだ名前が違っらしい。

女の子が、宙に字を書いた。

『A』

首を傾げられた。読め、という事らしい。

「あ？」

これは、カエルのおじさんに教わったばかりだから、自信がある。

女の子は、こくりと頷いた。また、宙に描く。

『RA』

「あーあ？」

女の子は、かなり渋い顔をした。唇の動きを読んでも、違いがわからない。

それでも

『IL』

「いる？」

女の子は表情を戻し、頷いた。

『L A』

「…………らあ？」

面倒そうな顔をされた。

『L E』

「…………らい？」

ため息をつかれた。

『L』

「……ら？」

女の子は目を閉じると、ゆっくり頷いた。

「もう好きに呼んでくれ」という無言の提案だ。私に名前を教える事を諦めたらしい。

少し残念だけど、私もわからないものはわからない。話題を変える事にする。

「お母さんは？」

首を横に振られた。

どうやら、今日はミア・フォルトは出掛けているらしい。こんな小さい子を放っておいて出掛けるなんて、なんて親だろう。

それも、目の前に家があるのに野宿まがいの事をこんな子にさせるなんて。

そういうするうちにお湯が沸騰したようで、女の子がマグにお湯を注いで私にくれる。

「ありがとう」

こくりと頷き、宙に文字を描かれた。多分、どういたしましてとかそういう事だろう。

一口飲むと、甘さと苦味が混在したような、というか殆ど苦味で構成されているくせ変に口の中に甘みが残り、かといって後味は悪く、正直いって微妙な味だった。

というか、断言すると不味い。

「…………何のお茶だろう」

殆ど独り言の気持ちで、聞いてみる。

女の子は光る葉っぱを取り出して私に見せた。

……まさか

「その葉っぱを入れたの？」

こくり、と頷いた。

この子は一体何がしたいんだろう……

見た目には綺麗だけど、正体不明の変な葉っぱの出汁はちょっと遠慮願いたい。

「……残しても良い？」

首を横に振られた。

むしろ、『おかわりもある』とでも言いたげに私にケトルを差し出してきた。

「……全部飲ませる気？」

真剣な顔で、頷かれた。

「あなたは飲まないの？」

真顔で、頷かれた。

この子は、こんな小さいのに宙に文字を描いたりとかが出来るから、多分優秀な魔法使いに分類されるんだろう。

それに、なんといても世界一有名な魔法使いの娘さんだ。

……やっぱり、魔法使いは優秀になればなる程、変な行動をより多く取るようになるんだろう。

この子の場合は、特に奇行が目立つけど。ひよっとしたら名前を読むことすら出来ず手間取らせた事へのささやかな報復なのかもしれない。

「はああ……がんばってこつ……」

私は、泣きながらきらきら光る不味い紅茶を飲んだ。

深夜になっても女の子は家の中に入る事はせず、結局二人して家の外で夜を明かした。

私がこの子と一緒に一晩明かす事にしたのは、何かしら奇行に走りたがる小さな女の子一人を残して別の場所に行くのが躊躇われた事

と、どうせ私に行き場所は無い事、そして……

「寝てるのにまだ寝たまま掴んでる……」

女の子が、私がどこかに行こうとする度に私の服の裾を掴み、寝る時にも放してくれなかった事が一番大きい。

掴まれた服の袖を振ると、女の子も目を覚ました。

けだるそうに身を起こす。

「おはよう？」

女の子も、宙に字を描いて答える。

「美味しいパンあるよ、美味しくして赤い水っぽい香辛料がついてるの」

私は、昨日くしゃくしゃにしてしまったパンの袋を取り出した。

昨日の夜はあの不味い紅茶でおなかいっぱいになってしまったから、私は何も食べなかった。

女の子も何か食べている様子は無かったから、おなかが減っている事だろう。

女の子は、途中まで宙に文字を描きかけ、首を振った。

「いらないの？」

頷いた。

この子と話す時は、二者択一の選択肢を用意すると良い。

私は昨日学習した。

「おなか減るよー？」

女の子は、首を横に振った。

朝ご飯を食べない派の人なのかもしれない。そういえば、あの子も朝はとても小食だった。

そうすると、お昼がひもじくて可哀想かもしれない。

一つだけ残ってた豪華なパンは残して、私は味気ない大きなパンを千切ってかじる事にした。

私がパンを食べ始めると、女の子は家の裏の方に歩いて行って、暫くするとマグ一杯の水を持って戻ってきた。

庭の端の芝生の生えていない所まで行くと、マグの水を垂らしてい

る。

何をしているのか見てみると、何かの植物の新芽に水をやっている所だった。

2つの芽のうちの片方は順調に背を伸ばそうとしているが、もう片方は折れて潰れてしまっている。

女の子は、何事か宙に文字を描いた。

彼女が何を言いたかったのか。

私は、自分が文字が読めない事に言いようもない物悲しさを感じた。女の子は、十字を切るとマグを持って家の中に入り、すぐに出てくると私の方へ向き直った。

昨日の夜と同じように、私の服の裾を掴む。

「どうしたの？」

『ついてきて』とでも言うように、何度か私の手を引いてから、女の子は歩き出した。

「わ……ちよつとまって、わっ……」
落としそうになった紙袋を抱えなおしたりしながら、私は女の子に手を引かれて歩き始めた。

しばらく手を引かれたまま歩いた後、私が逃げも隠れもしない事をようやく理解してくれたのか、今は普通に二人並ぶように歩いている。

女の子は時々街の人に宙に文字を描いて何事か尋ね、その度に道の先を指差し、そちらへ行くように促した。

あの家を離れて良いのかとか、お母さんが心配しないかとか、色々聞いてみたが、簡潔に頷くか首を振るかだけで答えられた。もう私相手に文字描きする気は無いらしい。

イエスかノーかで答えられるように仕向けてるのは私だけど、少しさみしい。

女の子は早足で歩くから、私が歩幅を調節する必要は無く……むしろ、私が女の子を追いかける形になった。

女の子がちらちらと私の方を振り返るが、むしろ私の背後を気にしているらしい。私と目が合つと、ぷいと目を逸らした。

誰かに尾行でもされてるのかも思ったけど、背後を気にした感じ多分そんな事は無い。

私がちゃんとしてきてるか、確認してるのかもしれない。

昨日の事からも察するに警戒心が強い子みたいだから、きっと私と視線を合わせにくいんだろう。

「あとどれくらい歩くの？」

何気なく聞いてみると女の子は少し思索し、宙に を一つと少し離してxを一つ描いた。

を指差してから私達の来た道を指差し、xを指差してから目の前の道を指差す。

からもうxへ向かって線を引き、真ん中辺りで指をぴたりと止めた。

『わかる？』というように首を傾げられた。

「あと半分くらい？」

女の子は、こくりと頷いた。

女の子の機転に拠る所が大きいけど、初めて筆談(?)でまともなコミュニケーションが成立した。

それにしても、文字以外も描けるなんて魔法って便利だ。

そういえば、魔方陣も淡く光っていたから長い間文字を残す事も出来るんだろう。

「普段絵とか、描いたりするの？」

女の子は不思議そうな顔をして、首を振った。

今度、機会があったらこの魔法で絵を描いてもらおう。夜にやってもらったら、きっととても綺麗なことだろう。

「あと、半分かー」

私達がミア・フォルトの家を出てからもう30分くらいは経っている。

何処に連れて行かれるのかわからないし少し疲れたけど、あと30

分の辛抱だ。

「よし、がんばってこつ」

女の子に笑い掛けると、目を逸らされた。

こっちは、まだしばらく時間が掛かりそうだ。

そうこうして歩く事三十数分。

賑やかな大通りを抜けると、とても大きな建物の前にたどり着いた。ひとときわ、その建物の前の広場はわいわいと人が賑わっている。

女の子と一緒に広場を突っ切ってその建物の中に入ると、女の子は建物の入り口に居た人に、金貨を一枚渡した。金貨なんて銀貨10枚以上の価値のある品だ。銅貨の100倍以上。硬貨の2000倍以上。つまり、日常生活で使われる事なんてほぼ無い品物。

「わ……金貨なんてはじめて見た……」

さらに驚いた事に、金貨を出して買ったものが、ただの小さな紙切れ2枚と、おつりに銅貨をたった4枚だ。

これはなんて買い物だろう？信じられない。

女の子は2枚の紙切れのうちの片方を、私に渡してきた。受け取るかどうか、物凄く迷う。

「え……つと、そんな大金使っちゃって、お母さんに怒られないの！？」

女の子は何やら少し考えると、私を無視して近くに居た男の人の服の裾を掴んで会釈した。

金髪碧眼で、長身の感じの良い男の人だ。

男の人に対して指先で宙に文字を描くと、男の人と一言二言言葉を交わし、リルは銅貨を一枚渡した。

女の子が、男の人を連れて戻ってくる。女の子は宙に今日見た中で一番長い文字列を描いた。

「どうも初めまして」

「は……はじめまして」

女の子と男の人の関係がわからない。

「教会の修行、お疲れ様です」

「はあ……………」

話を読めない。

「そちらのお嬢さんに通訳を頼まれました……………いや、妹さんと会話が出来ないというのも大変ですね。それにしても、その年でそれ程にまで世俗から離れた修行をしていたとはご立派です」

「……………はあ……………」

後半の意味がわからない。多分、推測するに私が文字が読めない事で恥をかかないように女の子が気を回してくれたんだろう。

「まず……………今はリルと読んで欲しい」

なるほど。文字が読めて喋れる人が居れば、女の子とのちゃんとした会話が成り立つんだ。

「行き先はメルラ……………遠くに行くんだね。君が会わなくちゃ行けない人が居るんだそうだ」

会わなくちゃいけない人。

そのフリーズに心引かれるものがあつた。なにしろ、ミア・フォルトの娘さんだ。私が記憶喪失なのは寝る前彼女に話したから、きつとそれに関する人だろう。一気に展望が明るくなった。

「メルラには汽車で行くから、この切符を受け取ってほしい」

女の子……………リルちゃんは、私に先ほどの紙切れをもう一度私に渡してきた。

「ありがとう」

今度は、受け取った。

ちよつとよくわからないけどこの紙切れは切符と言って、人に会いに行くのに重要な品物らしい。

通行許可証のようなものなんだろう。代金の事は、後で考える事にした。

「リルちゃんは、その……………一緒に行ってもお母さん心配しないの？」
男の人が疑問符を浮かべた。

リルちゃんは少し困ったような顔で思案したが、またさらさらと男

性に向かって文字を描いた。

「リルちゃんという呼び方は、恥ずかしいから止めて欲しいそうです」

「あ、はい、ごめんなさい」

「いえ……謝る相手は妹さんでは」

そうだった。つい、喋る相手に返事をしてしまった。

「ごめんね、リルちゃん……じゃなくて、えっと……リル」

リルちゃんは……リルは、こくりと頷いた。

「お母さんが居るのがメルラだそうです。」

驚いた。ミア・フォルトの家はここにあるのに、ミア・フォルトが居るのは遠い街なのか。

そういえば確かに、あの家は日用品は揃っていたようだけど、人が住むにはかなり朽ちた家だ。

あそこは別宅なのかもしれない。それじゃあ、リルはなんで一人で別宅に居たんだろう？

疑問は尽きないけど、込み入った話だからここで見知らぬ男性にではなくミア・フォルトを交えて話した方が良さだろう。

「わかりました……ところで、キシヤってなんですか？」
でも、これは先に聞いておくべきだと思った。

私の知らない乗り物だ。馬車は牛車なら知ってるけど、キシヤとはなんだろう。

男の人は、目を丸くした。なにやら、余程変な質問らしい。

リルため息をつきながら、宙を描いた。

「ああ……そうでしたね、世俗から離れるというのはそういう事なのですか……」

何か、知っているのが当たり前な品物だったらしい。考えてみても一般常識的なものはだいたい覚えていたつもりでいたけど、そんな乗り物に心当たりは無い。

「汽車というのは、この駅から乗れる乗り物です……ほら、着ましたよ。あれです」

男の人が指差した先に、小さく見えてきた。
でもあれは……

まるで火事の煙を吐きながら。まだあんなに遠くに居るのに、ここからでも聞こえる音を立てながら。真っ黒なものが近づいて着ている。でもあれは……この街に入るときにも、遭遇した。

……え、何？ドラゴンに乗るの？

がっしゃんがっしゃんと威嚇音を立てながら、真っ黒な鋼の鱗の塊が私達の目の前に止まった。

「ひ！」

私は、思わず声を上げながら逃げようとした。

リルに服の裾を掴まれて阻止された。

男の人は、苦笑している。

ドラゴンのお腹があちらこちらでぱかぱかと開いて、人が出たり入ったりしはじめた。

お腹に沢山口があるなんて、なんて不気味な生き物！

それに、自分からあんな大きなわけわかんない生き物のお腹に入り込むなんて！

まるでレミングスの集団自殺だ。

リルが宙に字を描いた。男の人が、それを読み上げる

「行きますよ」

「やだ！やだ怖い！やっぱり歩いていく！あんな！あんなドラゴンに食べられたくない！」

「ドラゴン……？」

確かに、ちょっとは見えてみたいかなー、とは思った。

しっかりとしつけをされて、人を噛んだりしないような大人しい子だったら、少しくらい触ってみたいなー、とも思った。

でも、ドラゴンのおやつになりたくはない。無事が出てきてる人も居るみたいだけど、もしかしたら入ったらすぐにも消化されちゃうかもしれないじゃない！

リルは呆れた様子で私の服の裾を掴んで、ぐいぐいと引っ張った

「やだ」

私は、引っ張られても引きずられないようにしっかりと柵を掴んだ。

「……」

「やだ」

「……」

「やだの」

「……」

「怖いものは恐いの」

「……」

リルは私から手を放して、オロオロと私とリルを見比べている男の人に何か描いて伝えた。

「ええと……お姉さん、落ち着いてください。まず、あれはドラゴンではありません。そもそも、生き物ですらありません」

「だって動いてるじゃない！煙吐いてるじゃない！怒って唸り声あげてるじゃない！」

男の人は、困りきってしまったようだ。私には、どうしてもあれがドラゴンじゃないと言われるのが信じられない。100歩譲ってドラゴンじゃないとしても、どの道あんなわけわかんないものの中に入りたくない。

また、リルがさらさらと文字を描く。

「汽車が動くのは乗り物だからです。煙を吐くのは、動力に石炭を使っているからです。音は機械音です」

「後半さっぱりわかんない！」

「つまり、危険なものではありません。その証拠に、中から出てきた人も皆無事でしょう？」

「外に出られたのは入った人のほんのごく一部で、皆中で死んじやつたかもしれないじゃない！」

リルは心底疲れたように片手で額を押さえながら、またさらさらと文字を描いた。

「世俗を離れるというのは、大変な事なんですねぇ……」

「とにかくやだ！」

男の人は、うーんと唸って少し考えてから喋り始めた。

「あれは、動く家のようなものです。見てください、壁面に窓ガラスが張られているでしょう？」

ちらりと、振り返って見てみる。確かに、窓らしきものは見える。

「大きな家に、馬車に使われるよりも頑丈な車輪を幾つもはめ込んだようなものです。落ち着いて見てみて下さい」

確かに、下の方は車輪がいくつも並んでいる。

「でも、それだと引つ張ってる動物が居ないじゃない！それに、煙を吐いてるし家の中火事じゃない！食べられるのも嫌だけど焼け死ぬのも嫌！」

リルと同じように、男の人も額を手で押さえた。

ピイイイイイイイイ！

大きな笛の音に、はつとそちらを見ると、がっしょんがっしょんと音をたてながら、『汽車』が煙を吐きながら、動き出した。

「あ………」

男の人とリルが、顔を見合わせて呆然とした顔になった。

緩やかに動き出した『汽車』は、ぐんぐんと勢いを強めて、あつという間に遠くまで走って行った。

助かった。あつちいってくれた。

「どうしようかな………」

男の人が、物凄く困ったような顔をした。

「……………」

リルが、無言で銅貨を一枚取り出すと、男の人に手渡した。

「……………すみません、いただきます」

男の人は銅貨を懐にしまいこんだ。

何か、じとつとしたリルの視線が物凄く痛かった。

一章 『再会』と良く似た『何か』 七話目

Wrote: S I A

「まずですね、汽車というのは正式名称を蒸気機関車といって、石炭を燃やす蒸気を原動力にして……」

「石炭って何？」

「……そこからですか」

一通り怒ったリルに文字攻めにされて（殆ど読めなかったけど、流的に多分）お説教された後、私は男の人 - 名前はハリウスさんと言うらしい - に、汽車についてたずねていた。

次の汽車が来るのに、かなり時間が掛かるとい事だったから、暇つぶしだ。

「石炭というのは、燃料です。地中から発掘される真っ黒いダイヤのような鉱石です」

「ダイヤを燃やしちゃうの？もったいないじゃない、薪じゃダメなの？」

「石炭と薪とは火力が違います。薪の炎の力では汽車を動かす事が出来ません」

ハリウスさんはかなり博識だった。

「蒸気？っていうのは？」

「火室で石炭を燃やし、その炎で水を熱するボイラーと呼ばれる機構で発生するガスです」

「ガス？」

「ケトルの中の水も沸騰すると音を立てたり蓋が動いたりするでしょう？ああいった力です」

ちよつと考える。確かに、ケトルの中の水が沸騰するとピーピー音を立てて白い煙に似たものを吐く。

「でも、その蒸気？があると何で動くの？」

「ボイラーはシリンダーで車輪と運動しているんですよ。蒸気の圧力で動く部分を、車輪とつなげてしまふ事で車体ごと動かす事に成功したんです」

あまりぴんとこない。

「つまり、汽車は生物ではなくれっきとした機械という事です」

「機械……」

「振り子時計のようなものです」

「振り子……」

「……世俗から離れるというのは、本当に大変な事なんですね……」
リルは頷きながら、ハリウスさんに文字を描いた。

振り子がついているというのはよくわからないけど、時計ならわかる。

「あと、煙を吐くのは何で？」

「物を燃やす力をエネルギーとするので、煙を吐きます。別に火事というわけではないんですよ」

「煙を吐くから、乗ったら中は煙たくないの？」

「ありません。煙は全部煙突から出て行きます」

「へえ……」

よくわからないけど、わかった事にした。同じ事を説明してもらったものなんだか悪いし、とりあえずアレが汽車って名前でドラゴンじやなくて、噛んだり燃やしたりしてこないのはわかったからもういいや。

「じゃあ、安全なんですね」

「はい、安全です」

「本当？」

「本当です。そうでなければお金を払ってまで乗りませんよ」

「……それもそっか……」

考えてみると、それだと私の我俣で列車に乗れなかった事になる気がする。

「……ごめんなさい」

「いえいえ」

ハリウスさんは軽く許してくれた。リルはむくれた顔で、何事か文字を描いた。

「それにしても、お姉さんはこれほどまでに世俗から離れて、一体どんな修行をしていたんですか？興味があります」

困った。それはリルの口から出任せだ。助け舟を出してもらおうとリルに目配せすると、『しょうがない』とでも言うような顔でさらさらと宙に描いた。

「なるほど……それにしても、姉妹揃って優秀な魔法使いさんなんですね」

ハリウスさんは、それに納得したのかそれ以上の質問をしてこなかった。

リルは、文字を描くと小さく頷いた。

……私のあずかり知らぬ所で完結してしまった。

しばらくの間、会話が止まった。

しゅごおおおおおおお！

どれくらい時間が経ったろうか。

聞いていた時間より、予想よりもずっと早くに汽車は来た。

がっしやんがっしやんと音を立てて、私達の前に汽車が止まった。

先ほどと同じように、人が入ったり出たりしている。

確かに、ちゃんとよく見てみると開くのはドアだし、窓ガラスもあるし、いくつもの車輪が見える。

「これの中に入るんだよね」

「いえ、これには乗りません」

「ええ!?!」

わけがわからない。

さつきは嫌がる私を引っ張ってまで乗ろうとした汽車に、私その気になつたら今度は乗らないだなんて。

「これは、逆方向へ向かう汽車なので……」

「逆方向？」

「ええ、僕達が乗りたいのはメルラへ向かう汽車です。これは、メルラから来た汽車です」

「少しややこしい。」

「あっちに行ったりしないの？」

「しません」

「そっかー……」

馬車みたいに好きな方向に走ってくれば良いのに。

笛の音が鳴り響くと、がっしやんがっしやん音を立てながら汽車は行ってしまった。

また、私達は汽車への乗り場へぼつねんと残された。

「……」

リルは無言で3枚目の銅貨を取り出すと、ハリウスさんに差し出した。

「……流石に、受け取れませんかよ」

ハリウスさんは、やんわりと断った。

「今度には乗るんだよね？」

「はい、乗ります」

リルは一足先に立ち上がって、こちらを振り返っている。

あれからかなり待った後、前回とは逆の方向から汽車が来た。

暇つぶしに聞いた話だと、ハリウスさんは首都よりも少し先で降りるらしい。

つまり、私達が先に下りるから汽車に乗る間はハリウスさんとずっと一緒という事だ。

汽車の中に入ってみると、なるほど確かに家だ。

向かい合わせの長椅子がいくつもある部屋が、いくつか繋がっているらしい。

「わー……」

何か凄い光景だ。

「……………」

リルは無言でその長椅子のうちの一つに座ると、宙に文字を描いて、鈴を鳴らして目を閉じた。

「おやすみ、だそです」

ハリウスさんはその向かいに座ったから、私はリルの隣に座った。

しばらくすると、笛の音と共にしゅごーと音を立てて、部屋中が地震のように揺れ動いた。

がこん。

と、音を立てて、風景が変わっていく。

ゆっくりと動いている。

だんだんと、風景の変わり行く速度が上がっていく。

がっしやんがっしやんという車輪の音も、大きくなっていく。

「……………うるさいね」

「そうですね」

ハリウスさんは、苦笑した。

「……………なんでこんなおっきな音がするのに、リルは平気な顔で眠れるんだらう……………」

「なんででしょうね……………慣れてるんでしょうか」

しばらく窓の外を眺めていると、遠くに遺跡が見えてきた。

誰か偉い人のお墓のある、あの遺跡だ。

…ちよつと待とう。

「私あそこから街まで一日かけて歩いたのに……………」

あつという間に遺跡の傍を抜け、遠くにいつてしまった。

ちよつとシヨックを受けた。

「歩かなくて良かった……………乗って良かった……………」

この汽車というものは、とても便利なものだ。私は学習した。

「あの森の中で修行をしていたんですか？」

しまった。今はリルが眠ってしまったている。わざわざ起こしてごまかすのも不自然だし、ここは私の力でなんとかするしかない。

「ええと……………はい、まあ……………」

とりあえず、適当に返事をしてお茶を濁す事にした。下手に何か言
つて墓穴を掘るよりは絶対マシだ。

「成る程……あの森の何処かには世界樹があると聞きますし、魔学
には重要な地なのですね」

「……はあ」

世界樹って何？

と聞きたいけど、それを言ったらリルの造った私達の設定が根本か
ら崩れかねない気配を察した。

もしかしたら、あの淡く光る綺麗な樹のことももしれない。

それなら、ポッケの中に葉っぱがまだ一つ残っている。

……見せるかどうか考えて、やっぱり止めておく事にした。

この木の葉は、私の記憶の手がかりだ。だけど、余り人に見せるべ
きではない。そんな気がする。

「こんな事なら、もつといっぱい採っておくんだったかなー……」

少し後悔した。私はあの光る木の中に吸い込まれるようにして、気
がつくと遺跡の中に居た。

遺跡の方から森に戻る事はできなくて、一方通行だった。

明らかに魔法の産物の力だ。十中八九、それが世界樹なんだろう。

この葉っぱが貴重な品だったのなら、沢山とっておけばしばらくの
間の路銀に困る事は無かったはずだ。

野宿なんかしないで、ふかふかのベッドの宿屋で眠れたらうに。

すると、私はそんな高価な品物を一枚飲んでダメにした事になる。

しかも、物凄く不味かった。

……あまり深く考えない事しておこう。

多分、珍しくてもそれ程の価値は無いんだろう。きっとそうだ。

魔法使いのリルが欲しがってたのも、何かの間違いだ。

そういう事にしておこう。私の中では。

「……いっぱい採る？まさか、世界樹を発見したんですか？」
しまった。

「や、いえ、えーっと……こつちの話です、えと……あ、ほらこれ」

昨日リルから貰った種を取り出した。

「これは……また、この辺りでは珍しい品ですね」

「あんまり採れないの？」

「ええ。セルリアではとても珍しい物です」

軽く墓穴を掘ったらしい。

「何でも知ってるんですね……」

むしろそっちに驚いた。

「いえ、そういうわけでは……形が特徴的なのと、用途が幅広いからですね」

ハリウスさんは謙遜しているけど、聞いたものに全てしつかり答えしてくれるのは凄い。

「それは、向日葵の種です。夏になると太陽に向かって花を咲かせるんですよ」

「へえ……」

違和感を感じた。

この向日葵という花の話を、前に聞いた事があるような気がする。

「なんだっけかなあ……」

思い出せない。

「それにしても世界樹に、遺跡に、汽車に、魔法使いか……」

確かにあの子は魔法使いだったけど、それ以外は皆初めて聞いたような事ばかりだ。

流れるように珍しいものと遭遇する旅路に、さしたる苦勞も無くトントン拍子に進む旅路に、不自然さを感じた。

「これも、気のせいなのかな……」

私の独り言は、がたんごとんという汽車の機械音にかき消された。

「それでは、また機会がありましたら」

「はい、また！」

「……」

ハリウスさんは手を振りながら。リルは宙に描いて会釈をした。

あれから何時間も掛かってメルラの駅にたどり着いた。

道中、眠っているリルの分の切符を車掌さん？という、切符の確認に来る人に提示するのに苦労した。

声を掛けても揺さぶってもなかなか起きず、起きたら起きたで状況がつかめない様子だった。

この子は寝起きが悪いらしい。

がっしやんがっしやんと音を立てて駅を去る汽車に手を振った。

汽車の中から周りの風景を見ていたけど、この街はすごい。

背の高い建物が山のようにあって、首都というのはまるで他の街とは別世界のようだ。

というか、私の記憶にある街並みと比べると本当に別世界だ。

駅で働いている人に切符を渡して、外に出てみるとこれまた物凄い人の群れだった。

ミア・フォルトの家のあった街より、凄い。

比較にならないほど凄い数の人がごった返しててお店が立ち並んで、客引きの人とかが大騒ぎしてる。

「……お祭りでもやってるの？」

リルは首を振った。

普段からこうらしい。ハリウスさんが居なくなって通訳の人が居なくなっちゃったから、またリルとは味気ないやり取りしか出来なくなってしまうた。

リルは私の服の裾を掴んで引っ張ると、『あっち』とでも言うように指差した。

「うん、わかった」

リルは慣れた様子で歩いていく。私はその後をついていく。

ミア・フォルトというのはどういう人なんだろう。

歩きながら、これから会う事になる女性について思いをさせてみる。何しろ、世界一有名と言われる魔法使いさんだ。

きつと凄く綺麗で、背なんかすらっとして高くてスタイルも良くて、髪なんか腰まで伸ばしてたりとかして、ハリウスさんみたいに物知

りで、杖か何かを持ち歩いたりしてるんだろう。

番犬に二匹の魔物が居るらしいけど、娘さんのリルの紹介だし、多分私は安全だろうし。

人を噛んだりしないような子なら、ちょっとくらい触ってみたい。

「ふふ……」

思わず、笑みがこぼれてきた。きっと、これで私の記憶の事もわかる。そんな気がする。

そうしたら、大忙しだ。汽車を使って住んでいた街に帰って、家を探してあの子を探して、お父さんとお母さんと、この旅のことを話すんだ。話したい事はいっぱいある。

そうしたら、あの子に魔法を教えてもらって、ちゃんと文字を読み書きもできるように勉強するんだ！

「ようし、がんばってこう！」

「……？」

リルが首を傾げながら振り返った。

「さ、早く行こう」

リルは少し驚いたような顔で頷くと、また私の前に立って歩き始めた。

早くミア・フォルトに会いたい。早く、早く。

元々足早なりルをそれでも追い越しそうになるのをぐっと堪えて、

私は、ミア・フォルトの家へ向けて歩いた。

一章 『再会』と良く似た『何か』 八話目

Wrote: RIL

さて、困った。

『誰か使いが来るか何か変化があるまで』のミアの家への滞在任務。変化はあった。これで帰れる。

少女を殺さずに、あの化け物を封じ込める事が出来た。ここまでは殊勲賞物だ。

後は、少女を殺さずにベルクの元へ送り届ける。任務は元々そういう趣旨だったんだらう。

極力呪言を使つて欲しくなさそうだったベルクの様子も、これで納得いく。

唐突な遭遇にあまり深く考えなかったが、化け物は『血塗れシーラ』のような……むしろ神格はそれ以上の、底知れない何かを感じさせる伝説級の存在だ。

そんなものがほいほい歩いていて、騒ぎにならないわけがない。

実際、この家に着くまでの間にそんな奴は見なかったし、ここに滞在する数日間も見かけなかった。

この少女に使役されていた。この少女の中で隠れていた。この少女に寄生している。もしくは実はこの少女そのものが奴で、普段は巧妙に擬態している。

……考えられる理由はだいたいこれくらいか。

「……………」

少女のほつぺたをつねってみたが、奴が出てくる気配は無い。

たかがトカゲの怨霊ごときがあんな力を持っているわけがない。

しかし、奴は爬虫類の骸骨をしていた。考えられるのは……奴は、竜族の怨霊？

バカバカしい。それなら確かにシーラ・ル・レッドを遙かに上回る

魔力にも納得いくが、そんなものに憑かれた人間が無事でいられるわけがない。使役しているようにも思えなかったし、そもそもその場合少女が私を襲うようにけしかけた事になる。

ぐだぐだと考えたが、結局どちらにせよこの少女はどういうわけか、奴と共存している。ようは異教徒の魔法使いの関係者。つまりは、セルリア公国における教会の敵。

「……………」

度合いに寄ってはベルクの味方か。

そう結論付け、この街の司教を呼ぶ事でこの事態を収束させるのは止めておく事にした。

そもそも、ベルクが私をこの街に置いたのはこの出来事を予見しての事なのだろう。教会への報告自体すべきではないのかもしれない……………しかし自力でなんとかするとなるとかなりの手間だ。

金貨があるから封印式の触媒だけでも教会から買うか……………とも考えたが、それだとこの少女をベルクの元へ連れて行く汽車代を払う事が出来なくなる。

身柄を教会に引き渡す羽目になったら、それこそ本末転倒だ。

いつもながら、ベルクは詰めが甘すぎる。私はこんな事態を想定しては居ない。

ある程度でもこの状況になる事が予見できていたのなら、もっと大金を用意するなり魔封石を持たせるなりをするべきだ。

……………あの脳無しめ。

仕方なく、独力で化け物への封印式を編み込み始める。

先ほどは運良く押し込む事が出来たが、もう一度やれと言われたら絶対に無理だ。奴も多少なり学習しているだろう。

おそらくは、宿主の方を先に呪いで縛ったから身動きが取れなくてやむなく戻っただけだ。もう一度やればまず少女の方が確実に死ぬ。私ひとりでは問題の先延ばししか出来ない。それならベルクの元へ帰るまでの間、外に出られないようにする。そういう封印を組む。

「……………」

文字描きの要領で、魔方陣を描く。そもそも文字描きの魔法の用途はこつちが本懐のだが、それに使っている人を殆ど見たことが無い。私ですら、数える程しか使った事が無い。

「……………」

困った。呪言と封印とは相性が良いからなんとかやれないかと思っただが、やはり触媒が何も無しでの長時間の封印は構造的に無理がある。

そもそも封印とは土地に縛る為の物だ。自由に動き回る生物に縛る封印など、人の身には余る。

その昔、捕らえた悪魔をモルモットに直接封印して魔力供給せず経過を調べてみた結果、ものの10秒で狂化し、30秒も持たずに悪魔がモルモットの体を食い破って出てきた実験結果を思い出した。意外と、ミアの力で色々とやっていた三代目の傍に居た経験則は、無駄では無いらしい。

……少女の全身に、簡単には消えない素材で魔方陣の文様を描くほうが確実か。

本人が目覚めたら泣かれるだろうが、大勢の人々が生きるか死ぬかの境目なのだからこの際仕方ない。

最悪、話がこじれたらベルクに治療させて望みの魔具でも作らせれば良い。

体中に呪言を書き込み、それで発動する呪いを媒介にして、少女の持つ魔力と私の注ぐ魔力で発動し続ける封印式。

これならいくらか現実的だ。メルラに着くまでの1日や2日程度なら、だましましたましょっていける。

私が筆談に使う羽ペンのインクでは明らかに足りないなので、少女により深い眠りの呪言を掛けて市街地まで走って買ってこくる。

銅貨2枚。普通に生活したら、一年掛けても使いきれない量だ。メルラでは文字描きが通じるから、十年使えるかもしれない。

ミアの家に戻ると、少女はまだ目を覚ます様子が無く安心した。

さし……………」

脱がすか。

野外で申し訳ないが、残念な事にミアの家の中は展示物がごちゃごちゃとされているし、私一人で少女を運ぶのも手間だ。何より、どの道人払いにするのだから片付けたり運んだりする手間が面倒くさい。庭を中心に『不可視』の呪言を掛ける。

普通の人間ならこれでこちら側を見ることは出来なくなるのだから、殆ど関係は無いだろう。

とりあえず服を脱がす過程で、少女の荷物を確認してみる事にした。せめて彼女の名前だけでもわかれば、呪いの構成もぐつと楽になる。スカートの片方のポケットからは、銀貨3枚と銅貨2枚が出てきた。おおよそ12〜3歳程度に見えるが、その年代の街娘が持つてるにしては少し大きな額だ。

こちらのポケットに入っていたのはただのお金のようにだから戻すと、もう片方を探ってみる。

「……ッ！」

思わず出しかかった声を止めた。

驚いた。

なんで、こんな小さな女の子が、世界樹の葉なんて持っている？

昔、三代目が金貨10枚以上掛けて世界樹の葉を一枚買い付けた事がある。

伝承通りに本当に淡い光を放つ木の葉で、大量の魔力を内包していた。

この木の葉は、あの時の木の葉と同じものだ。

伝承において常に光り輝き魔力を発するという世界樹は、傷がつけられると - 例えば、枝を手折ったり葉を採り過ぎたりすると - その後数十年、場合によっては数百年という間隔で輝きを失い、その間魔力を失うと言われている。

だから、世界樹の葉なんて貴重な術具が市場に流通する事はほぼありえないと言って良い。

そんな世界樹の葉が、5枚。

5枚だ。ありえない。

世界樹の葉は、私の手元に残しておく。

これさえあれば、多少強固な封印式を組んでも十分以上にメルラマで……いや、その気になれば数ヶ月持つ。

「……」

さらに探ると、魔封石が出てきた。

それも、私でも見た事が無いほど高純度の品物が、幾つも。

見た所、時間に纏わる魔法を封じていた形跡がある。

……この子は、何者だ？

高級な術具専門の行商人か何か？

いや、確かこの街の近くの森の何処かに世界樹があつたはずだ。

教会ですら正確な場所を把握していなくて、年に幾人も世界樹を求めた教会の人間が行方不明になっていると聞く。

しかし、『鴨が葱を背負ってくる』という何処かの国の諺を思い出した。

世界樹の葉なぞ、賢く売れば5枚もあれば金貨60枚近くなる。

魔封石だって、これほどの高純度の物がこれだけあれば、金貨にすれば2枚は下るまい。

この少女の正体も、何故こんな品物を持っているのかもわからないが、これだけ高価な術具が揃っていれば、わざわざ心身に負担を掛ける呪いを使う事も無い。

魔方陣を書き換える。

陣の支点に魔封石を置いていき、式の構築に間違いが無い事を確認する。

少女を引きずって魔方陣の中に入れようとした所で、先に石を置いた事が間違いだった事に気付く。

一旦石を拾いきってから、少女を陣の中心に寝かす。

石を置きなおして、魔物に対する呪言で封印を掛け始めた。

ここで封印に呪いを使っている事に気付いたが、これは問題ないだろう。

魔封石は、魔法の力を封じる事が出来る石だ。炎を封じておけば、封じた分の炎を後から発する事が出来る。

冷気を封じておけば、その分の冷気を好きなときに発する事が出来る。

術式に組み込めば、魔力を込めるだけで魔法を発する魔具の原材料となる。

今回は、周辺の……少女の魔力を使って、『魔物が外に出られなくする』檻を造る。

魔抜いは祝言の専門分野だが、魔封じは呪言の専門分野だ。

呪言の通じる相手に良かった。相手が怯んでくれなければ、自分の土俵で戦う事すら出来なかった。

光り輝く魔方陣に呼応するように、魔封石の光が天に昇った。

眠りの呪言を解いても、少女はまだしばらく目を覚まさなかった。

どうしたものかと少女の頬に触れていると、物凄い勢いで起きられて

ゴッ

という音が響き渡った。

勢いに負けながらも、少女が目を覚ました事で奴が起きないかを警戒して鈴を向ける。

……どうやら、封印式はちゃんと機能しているらしい。

もしくは、奴の気紛れで今は中に居るだけか。

どちらにせよずっとこうしているわけにもいかないので鈴を下ろし、少女と同じように痛む額を押さえた。

「だ、だいじょうぶ……？」

私は頷いて答えた。

「えっと……」

念の為目を覚ますまで起動したままにしていた魔方陣が気になっている様子だから、簡潔に答えた。

『貴方に良くない物がとりついていたので、封印を施した』

「わあっ!?!」

何故か、驚かれた。わけがわからない。もっと細かく説明するべきだろうか。

『貴方にー』

「待って」

文字描きをする手を掴まれた。

「私、字、読めない」

驚いた。

いや……この街事態は豊かだが確かに、ここは辺境だ。都会と違って子供の習字率はそれ程高くないのかもしれない。

すると、少女に対する山ほどの疑問も伝えようが無い。仕方なく身振り手振りでなんとか伝えようとするが、全く伝わらない。

少女は私から何かを読み取る事をさっさと諦めた様子で魔方陣の方に目を向けた。

「あれ?このガラス……」

しまった。

「あれ……?」

こんな事になるのがわかっていたら、目を覚ます前に魔封石を戻しておくべきだった。

……というか、魔封石を言うに事欠いてガラスとは。どうやらこの少女は本当に無知なようだ。

私は少女のスカートを指差し、その指を魔封石に対して向けた。

「あの……多分、一緒に光る葉っぱが入ってたと思うんだけど……」
言葉が通じないのなら、言い訳のしようがない。私は素直に世界樹の葉を全部取り出した。

『勝手に盗ってすまない。しかし緊急の措置だったから仕方なかった。貴方にとりついた魔物を封じる為には貴方の名前かこれらの道具が必要でー』

「もう、人のもの勝手に取っちゃダメでしょ」

指で額をつつかれた。

……物凄く悔しくなってきた。

少女が掌を差し出してきたが、困った。世界樹を返す事に異存は無いが、最低でも一枚は少女に使わないと、運が悪ければメルラに着く前に内側から食い破られかねない。

それこそ、三代目が実験に扱ったモルモットのようには。

「……もしかして、欲しいの？」

欲しいといえば、欲しい。最終的には全て返す事になるのだが、私が必要なのは少女の屍骸ではなく生きた少女だ。この子をベルクの屋敷まで無事に送り届けるまでが、任務だ。

「じゃあ、一枚だけ返して？残りはあげるから」

少女は、少し考えた末そう答えた。

確信した。

この子は、無知なんだ。

魔学に対して何の知識も無い。

それなら、ベルクの屋敷に着くまで世界樹を私が預かっていても問題無いだろう。

私は頷いて世界樹の葉を一枚返した。

それだけではなんなので、婦人に貰った花の種と一緒に渡す事にする。

「お礼にくれるの？ありがとう」

頷いて答えた。

「このガラスも、取って良い？」

魔封石を自ら身につけてくれるとは願ったり叶ったりだ。私は頷いた。

少女が石を全て取り上げたのを確認してから、魔方陣を消した。

「ありがとう」

どうやら、無知は無知でも察しは良いようだ。私は気付かないふりをした。

ミアの家に展示されているケトルを持ってきて、煎じた世界樹を水に溶かすと、焚き火にあてた。

ただの鉄だろうに、よくもまあ腐食せずに残っていたものだと感心する。

「そういえば、貴方のお名前はなんていうの？お母さんは？」

まあ確かに、私くらいの見た目の子供が一人で居たら当然気になる話だろう。

文字が読めないというから余り期待せず、名前を宙に描く。

『RIIL』

「あ……い、る？」

ああこれは名前が伝わる事は無いだろう、と思いながら相手が続ける。

予想通り、しばらくの間少女に付き合っつて途中で、彼女の名前がシアという事を知ったー結局、私の名前は彼女に伝わらなかった。

文章以前に、文字そのものの読み方を間違えて覚えているような人に、名前を教える事の難しさを知った。

大衆の習字率の低かった大昔なら兎に角、ずっと首都でサヤと共に生活していたからそんな苦労をした事が無かった。

しかし不思議な事に、私が喋らない事については何も言及してこなかった。

気になるだろうに、文字が読めないという知識の割に教養の無い人間では無いらしい。

そこは好ましい。

しかし、気になることがある。

シアという名前。

ミア・フォルトの親友が、シンシアという名だったはずだ。

似た名前と、世界樹や魔封石を持っていた事実。

状況証拠は必要以上だ。十中十、シアは彼女。

すると、もし先ほど彼女を呪言で死に至らしめていたら、私の手でミアとの約束を違える事となっただろう。

今更ながら、冷や汗をかいた。

「お母さんは？」

首を横に振って答えた。実際に母と呼べる人はもう居ないし、説明するとややこしくなる。

ベルクの屋敷に着くまでは、シアの質問には適当に答えておく事にした。

お湯が沸騰したのを確認して、マグに注いでシアに渡す。

「ありがとう」

ふーふーと息を吹きかけて一口飲むと、シアは眉間にしわを寄せた。不味いらしい。

三代目は、実に美味そうに飲んでいたが……あの変人は舌も狂っていたのか。

「……何の紅茶だろう」

私は、世界樹の葉を見せた。

「その葉っぱを入れたの？」

頷いて見せた。

「……残しても良い？」

そんなにも飲みたくないらしい。どれだけ不味いのか。

私は首を横に振った。むしろ、全部飲んでもらわないと困る。私はシアにケトルを差し出した。

「……全部飲ませる気？」

頷いた。これはシアの為だ。

「あなたは飲まないの？」

頷いた。これは嗜好品ではない。薬品だ。シアが飲まないと意味が無い。

「はああ……がんばってこう……」

意外と素直に頷いて、シアは涙を浮かべながら続きを飲み始めた。

これで一安心だ。世界樹の魔力を彼女が摂取すれば、彼女の中に居る『奴』に内側から食い破られる事は、防ぐ事が出来る。

ちゃんと説明出来れば彼女も納得して飲めたらうに、少々心苦し

かった。

夜はシアが何処かに行かないように、袖を掴んで過ごした。

事ある毎に「どこにもいかないから」と笑うシアに、もう面倒くさいから『寂しいから人について歩く女の子』を演じる事にしておいた。

一応、彼女を常に確保しておかないといけない。居なくなると困る。一晩シアの服の裾を握ったまま寝た。サヤ以外の人間と寝るのは、久しぶりだ。

翌日はシアに手を揺さぶられて目を覚ました。

「おはよう?」

私は、朦朧とした意識で『おはよう』と宙に描いて答えた。体がだるい。

昨日は、呪言を使いすぎてしまった。奴に片腕を食われた事も関係しているんだろう。

「美味しいパンあるよ、美味しくて赤い水っぽい香辛料がついてるの」

シアが茶色い紙袋を取り出した。

私は、返事を宙に描きかけてはたと気付いた。シアは文字が読めない。

文字描きを止め、私は首を横に振って答えた。

「いらないの?」

頷いた。

「おなか減るよー?」

横に首を振った。

寝る前にシアが言っていた事を思い出す。

彼女が記憶喪失で、ミアの眠る遺跡から歩いてミアキャベルまで来たという事。

あたり一面に広がる高純度の魔封石で出来た絨毯の上で眠っていて、

目の前に世界樹があった事。

これで確信した。シアはシンシアだ。

早急にベルクの屋敷まで連れて行く必要がある。

シアは大きなパンを千切って片方を袋に戻すと、手元の方を食べ始めた。

それを見て、私も花の芽に水をやらなくちゃいけない事を思い出した。

井戸からマグ一杯の水を用意してくると、庭の端の花壇に水をやる。新芽の片方は順調に育っていたが、私が昨日踏んでしまったもう片方は、折れて潰れてしまっている。

気がつくと、パンを食べ終えたシアが隣に居た。

『ごめん。これからは一人で頑張って』

私はそれだけ描くと、マグをミアの家に戻してシアの服を引っ張った。

「どうしたの？……わ……ちょっとまって、わっ……」

シアは躓いたりしながらついてきた。

しばらくの間、十数日前に歩いた道を逆方向に歩いていく。

時々駅の方角を確かめ、後ろにシアが居ること、街中でシアから『奴』が出ていない事を確認する。

暇つぶしなのか、シアに色々と聞かれたが、面倒なので適当に答えた。内容は覚えていない。

「あとどれくらい歩くの？」

シアは疲れているようで、これは適当に答えるのが可哀想な質問だと思った。

昨日呪言を掛けられた病み上がりだ。労わる意味も兼ねて、これには真面目に答えることにする。

来た道の方に を描き、行き先の方に x を描く。

を指差してシアの背後を指差し、 x を指差して行き先を指差す。

から x に向かって線を引き、半分辺りで手を止める。

これで通じただろうか。

「あと半分くらい？」

通じた。私は、こくりと頷いた。

「普段、画とか描いたりするの？」

また意味不明な質問が飛んできた。首を振って答える。

「あと、半分かー」

シアはうんと伸びをして、笑いかけてきた。

「よし、がんばってこう」

あまりに良い笑顔で笑いかけられて、話半分に相手をしていた事に少々罪悪感を感じたので、私は彼女から目を逸らした。

駅にたどり着くと、シアは少し興奮している様子だった。

『メルラまで子供2人』

駅員に描き、金貨を使って切符を買う。

「わ……金貨なんてはじめて見た……」

恥ずかしいから止めて欲しい。

2枚の切符とおつりの銅貨4枚を受け取り、片方をシアに渡す。

「え……つと、そんな大金使っちゃって、お母さんに怒られないの！？」

文字が読めないシアに色々と説明するのは面倒くさい。

シアの質問は一先ず置いておいて、ここらで誰か適当に通訳を頼めそうな人を探すことにしよう。

辺りを見渡してみる。

まず出来れば、一人なのが望ましい。

そして身なりがきちんとしていて、教養と学のありそうな人間……男の方が良いだろう。

人の群れの中から、金髪碧眼で整った顔立ちの、長身の男を選んで『声を掛けてみる』。

彼にした理由は七代目のように、何処か薄幸そうな雰囲気だったからだ。

彼の袖をくいと引つ張って気付かせると、目を閉じて会釈をし、文字を描いた。

『失礼します。こんにちは』

「ええ、はい、こんにちは。」

『私は喋れません。姉は文字を読めません。銅貨一枚で、姉との通訳を頼めませんか？』

「文字を？」

『姉は幼い頃から世俗から離れ、教会で魔法の修行をしていたもので』

「なるほど……引き受けましょう」

私は彼に銅貨を一枚渡すと、彼を連れてシアの元へ戻った。

「どうも初めまして」

「は……はじめまして」

シアは状況がわからなくて困惑しているようだ。

「教会の修行、お疲れ様です」

「はあ……？」

ああ困ってる困ってる。

「そちらのお嬢さんに通訳を頼まれました……いや、妹さんと会話が出来ないというのも大変ですね。それにしても、その年でそれ程にまで世俗から離れた修行をしていたとはご立派です」

「……はあ……」

「まず……今はリルと読んで欲しい」

ここまできて、シアも得心がいったらしい。

そこから先は途中まではスムーズに話が進んだ。

私はシアの妹、という設定。

昨日寝る前話に聞いた感じ、浮世離れたシアは世俗から離れていたという設定。

私の母はメルラに居るという設定。

「わかりました……ところで、キシャってなんですか？」

男性は、かなり驚いた様子だった。

……長い間街に居なかった設定にしておいて、良かった。

『姉は、物心ついた頃からずっと協会の中から出なかったから物知らずで』

「ああ……そうでしたね、世俗から離れるというのはそういう事なのですか……」

昨日寝る前、ドラゴンを見たというシアの発言にピンとくるべきだった。不味い流れだ

「汽車というのは、この駅から乗れる乗り物です……ほら、着ましたよ。あれです」

ガシャガシャと機械音を立てながら駅に止まる汽車に、シアは露骨に怯えていた。

「ひ！」

予想通り逃げようとしたシアの腕を掴み、止める。

『早く乗りましょう』

「行きますよ」

苦笑していた男性が、私の言葉を読み上げる。

「やだ！やだ怖い！やっぱ歩いていく！あんな！あんなドラゴンに食べられたくない！」

「ドラゴン……？」

やっぱりか。シアが見たというドラゴンとは、まさに汽車の事だった。

何をどう見間違えればそうなるのだろう。

シアの服の裾を掴んで、何度か引っ張った。

「やだ」

強引に連れて行こうとしたのは失敗だったようで、私に捕まれなかった方の手でひっしと柵を掴んで抱え込んでしまった。

「やだ」

『来て』

「やだの」

『来なさい』

「怖いものは恐いの」

『怒るよ?』

私はシアの手を離すと、オロオロと……本当に、『オロオロ』といった言葉がよく似合う様子の男性に説明してもらおう事にした。非常に面倒くさい。

『あれがドラゴンでない事を伝えてもらえますか?』

男性はこくこくと何度か頷いた。

「ええと……お姉さん、落ち着いてください。まず、あれはドラゴンではありません。そもそも、生き物ですらありません」

「だって動いてるじゃない! 煙吐いてるじゃない! 怒って唸り声あげてるじゃない!」

『汽車の構造とか、わかりますか?』

男性は「ええ」と返事をすると、シアに説明を始める。

「汽車が動くのは乗り物だからです。煙を吐くのは、動力に石炭を使っているからです。音は機械音です」

「後半さっぱりわかんない!」

「つまり、危険なものではありません。その証拠に、中から出てきた人も皆無事でしょう?」

「外に出られたのは入った人のほんのごく一部で、皆中で死んじやつたかもしれないじゃない!」

男性は、言葉を失う。

『本当にすみません、姉は本当に世間知らずなもので頭が痛い。』

「世俗を離れるというのは、大変な事なんですねぇ……」

「とにかくやだ!」

どうするべきか。男性は手を組んでうーんと唸ってから、シアに説明を再開した。

「あれは、動く家のようなものです。見てください、壁面に窓ガラスが張られているでしょう?」

私は上手にシアへ汽車の事を説明する知識を持たないから、男性に

任せる事にする。

「大きな家に、馬車に使われるよりも頑丈な車輪を幾つもはめ込んだようなものです。落ち着いて見てみて下さい」

上手い例えだ、と思った。これならシアも納得してくれるだろう。

当の彼女は、ちらりちらりと汽車の方を見て「例え相手が魔物でも、目が合わなければ気付かれないという物では無いと思うが」

「でも、それだと引つ張ってる動物が居ないじゃない！それに、煙を吐いてるし家の中火事じゃない！食べられるのも嫌だけど焼け死ぬのも嫌！」

それでも、乗る事を拒否した。

男性は、私と同じように額を手で押さえ込んでしまった。

頭が痛い。どうやら、シアの頭の中では『車輪がついているもの』前で動物が引つ張るもの』という図式がそう簡単には揺るがないらしい。

ピイイイイイイイ！

「あ……」

警笛の音に汽車を振り返ると、がたんごとんと音を立てて汽車が発つてしまう所だった。

不味い。汽車なんて一日に3通しか止まらないじゃないか。これを乗り過ごしたら何時間も待つ事になる。

私と男性は、顔を見合わせた。多分お互いに同じような表情をしているだろう。

動き出した汽車はぐんぐんと速度を上げ、すぐに見えないくらいまで遠くに行ってしまった。

「どうしようかな……」

男性は口元に手を当て、困った顔で考え事を始めた。

「……」

申し訳ない事に、男性が汽車に乗れなかったのは私達のせいだ。何も言わずに銅貨を一枚取り出すと、男性に手渡した。

「……すみません、いただきます」

男性は、それを懐にしまいこんだ。
私はシアに向き直った。

私の表情から何かを感じ取ったのか、シアはびくりと身を竦めた。

一章 『再会』と良く似た『何か』 九話目

Wrote: RIL

言葉が通じないのはわかっていたが、とりあえず憤りを発散するのにシアに対して説教を行った。

シアには私が怒っているニュアンスは伝わったらしい。ニュアンスだけは。

彼女はいかにも『よくわからないけど頷いておこう』というような顔でこくこくと頷いていた。

こうなってしまうのは仕方が無い。

待ちぼうけに付き合わせてしまった男性と、お互いに少し詳しい自己紹介をし合った。

男性はハリウスという名で、学者をしているらしい。行く先はメララより先の駅という事だから、安心してシアの相手をさせられる。

そして汽車の中で寝ても寝過ぎさず済みそうだ。

シアに汽車について質問攻めにされているハリウスを遠目に見ている、思った。

運が良い。

私はあの義妹と違って科学技術や錬金術には詳しくない。

好奇心旺盛な子犬のようなシアの相手など、私の知識では出来なかった。

汽車の構造には興味が無いから、時々ハリウスに文字を描きつつ座って適当に線路の向こうに見える鳥を眺めていた。

「……ごめんなさい」

「いえいえ」

しばらくの問答の末、シアはようやく汽車がドラゴンでは無いと理解してくれたらしい。

私は適当に『まったくだ』と描いて、嘆息した。

「それにしても、お姉さんはこれほどまでに世俗から離れて、一体どんな修行をしていたんですか？興味があります」

その質問に、シアは露骨に困った様子で私に視線を送った。

シアは嘘をつくのがそれ程上手いわけではないらしい。仕方ないので助け舟を出す。

『教会においても秘匿事項とされる魔法の修行だから、それは他人にあまり詳しく話すわけにいきません』

「なるほど……それにしても、姉妹揃って優秀な魔法使いさんなんですね」

『それ程でもありません』

しばらくすると、逆方向への電車が来た。

シアはおっかなびつくり、しかし興味深げに汽車に近づぐ。

「これの中に入るんだよね」

「いえ、これには乗りません」

「ええ！？」

道理の仕組みが理解できたわけではないらしい。

「これは、逆方向へ向かう汽車なので……」

「逆方向？」

「ええ、僕達が乗りたいのはメルラへ向かう汽車です。これは、メルラから来た汽車です」

混乱しているらしい。

「あつちに行ったりしないの？」

「しません」

「そっかー……」

シアは残念そうな顔をした。

警笛や煙を噴出す音、機械音と共に汽車がまた駅を発つ。

何やら、申し訳ない。私は三枚目の銅貨を、ハリウスに渡そうとした。

「……流石に、受け取れませんよ」

やんわりと断られた。

彼は結構なお人よしのようだ。何処か幸薄そうな理由も、わかった気がした。きつと彼の人生、今回の私達のようなのにつき合わされ貧乏くじを引く事も多いのだろう。

それから数時間、待ち続ける。

シアはハリウスと惣菜パンを分けて食べた。

私が物を食べない事に二人は「得にシアは「疑問を持ったようだが、『宗教上の理由で夜しか食事をしてはいけない』という設定にしておいだ。」

何も、魔法使い全てが教会の人間ではない。

姉妹で信じる神が違うという事にハリウスは疑問を抱いたようだが、深く詮索はしてこなかった。

また、何時間か経つと待ちに待ったメルラ行きの汽車がやってきた。

「今度のは乗るんだよね？」

「はい、乗ります」

私は少しはしゃいだ様子のシアを尻目に、一足先に汽車の中に乗り込んだ。

前の汽車から何時間も待ったせいか、シアは完全に汽車への恐怖をなくしたようで、むしろ嬉々としてついてきた。

「わー……」

何やら感心しているらしい。

私は疲れたから、シアの相手はハリウスに任せて寝る事にする。

いつも通りサヤへの寝る前の挨拶をして、呪言で遮音を行って目を閉じた。

「それでは、また機会がありましたら」

「はい、また！」

『ありがとうございます』

メルラの駅でハリウスと別れる。

帰りでも行きと同じ過ちをしてしまった事に少々気恥ずかしさがこみ上げてくる。

車掌が切符の確認に来た際、シアに揺さぶられて起きたが、何故音が何も聞こえないのかしばらくわからなかった事だ。

自分で遮音をしておいてこれでは世話はない。

大きな機械音を立てながら、汽車は去っていった。

隣で、シアが犬の尻尾のように腕をぶんぶんと振っていた。

駅から外に出ると、騒がしくも懐かしい、見慣れたメルラの喧騒に包まれた。

シアは落ち着き無くきよろきよろと辺りを見渡す。

人の群れを見慣れていないらしく、ミアキャベルの駅の時よりも興奮している様子だった。

「お祭りでもやってるの？」

私は首を振って答えた。この辺りはいつもこんな感じだ。

放っておいたらはぐれてしまいそうなので、彼女の手を取った。

ベルクの屋敷を指差し、そちらに行くように促す。

「うん、わかった」

私が歩き出すと、シアもそれに倣って歩き出した。

「ふふ……」

何が楽しいのか、シアは含み笑いをする。

「ようし、がんばってこう！」

何事か考えていたのだろうか、いきなり何かの宣言をされた。

「さ、早く行こう」

私が足を止めて振り返ると、急かされた。

わけがわからないが、汽車の時と違って率先してベルクの屋敷へ行きたがっているなら都合が良い。

私は普段より足早に屋敷へと向かった。

「おかえりなさい！」

『ただいま』

屋敷のベルを鳴らした途端、サヤが顔を出した。

手には箒を持っていて、丁度エントランスホールの掃除をしていたらしい。

サヤと目が合った瞬間、彼女は青ざめた。

「リル……ああ……こんなになってしまった……」

サヤは左手で私の右手を取った。

一目ではれてしまったようだ。サヤは表情を戻すと、シアに向き直って言った。

「はじめまして。ようこそおいで下さいました、シンシアさん」

「あ……はい、はじめまして……」

「私はサヤと申します」

「……シアです」

私も右手でサヤの左手を取り、目を閉じて二人で小さくお祈りを唱える。

シアは名乗っても居ないのに名前を呼ばれーそれも愛称ではなく、本人すら覚えていない本名の方をー困惑している様子だった。

「そちらでお掛けになってお待ち下さい。今、ベルクを呼んできます」

サヤはエントランスホールに置かれているソファへ座るようにシアに促した。

シアが何か聞いてきているようだったが、この屋敷にはサヤとベルクが居る。

私ではシア相手にはまともな返事が出来ないし、面倒なので無視した。

「シア……!」

サヤはベルクを呼びに行こうとしていたが、その必要は無かったようだ。

階段のテラスから驚いたような真剣な声色で、本当に『思わず呼んでしまった』という印象でベルクが姿を現した。

「…………誰？」

この屋敷に着てから、初対面なのに会う人会う人皆が自分の名前を知っていたら、それはシアも驚くだろう。

それも、倍近く年の離れた男に感慨深げに名前を呼ばれたら、記憶喪失でなくても困惑する事だろう。

「シア…………シア…………いや…………サヤ。シアの相手は任せた」

「…………はい、わかりました」

ベルクはすぐにシアから目を逸らすと、私の手を取って階段の上へと上り始めた。

ああ。と私は思った。

サヤに一目ではれたのだから、ベルクを誤魔化せるとも思ってた居なかったが。

少し、憂鬱だ。

「シアが…………生きてた。シンシアが生きてる」

部屋の扉を閉めると、ベルクは扉にもたれかかるようにしながら、喜びを噛み締めるようにもらした。

見ると、ベルクは泣いていた。

いや…………泣く、というより『涙を流していた』。

なんとなく、彼の気持ちはわかる。

本当なら、誰よりも早くシアと話したいんだろうに。

いくら相手がベルクとはいえ、その手を煩わせるのは少し心苦しい。

「ああ…………悪いな、リル。初代からの記憶が、ちよつとな…………」

ベルクは涙を拭くと、「ふう」と息を吐き、普段あまり見られない真剣な顔になった。

「…………で、リル。何があつた？半分以上減ってるじゃないか」

そんなにも消耗していたのか。それほどまでにダメージを負っていても、それを殆ど感じない事には違和感を感じた。

何から話すべきだろうか？

考える。

……とりあえず。

「ごふっ!？」

無防備なベルクのみぞおちに、思い切り力と体重を込めた右ストリートを叩き込んだ。

「げふっげふっ……何故……?」

ベルクは膝について、腹を押さえながら苦しそうに声を絞り出した。とりあえずそれだけで気が済むはずが無いので今度は文句を言うてやる事にする。

『あんな化け物と戦う事になるとは聞いていなかった。アレは何者だ。彼女の肩口から化け物が出てきた』

「あ……それな……」

ベルクは頬をぽりぽりと書くと、私から視線を逸らしながら、言った。

「まさかこんなすぐにシンシアが目覚めると思ってなくてげふっ!？」

腹がたつたので蹴り飛ばしてやった。はやり、確信していた通りあれはシンシアだった。

『つまり私はベルクの見立てでは、もつと長々と一人で野宿を続けさせられる予定だったと』

「ちよつと待て落ち着け?確かにそれは間違つてないんだが、あの伝説の大司教ヴァイヴェンの封印だぞ?まさか二週間やそこらで破れるとは思つて無くてだな……応援を送るハズだったんだ」

『応援?』

「レイナをな。まあ、捕まらなかったわけだが」

『あいつを?』

ベルクが、一枚の紙切れを取り出して渡してきた。

『アブルと新商品の珍しい果物探しの旅に出るのじゃ。しばらく帰らん。探さんで欲しいのじゃ』

「……………」

とりあえず書き置きだつたんだらうこの紙を力の限りビリビリに破いてやる。

本当に、大事な時にばかり役に立たない義妹だ。

「それに、アレもそう簡単に目え覚ますはずじゃなかったんだよ。

あーほらなんて言つたかな……渡り歩く厄災。サデリス・ル・ウオーカーだっけか？アレは教会でも機密中の機密だからな」

『何故私にも教えなかった？』

「悪いとは思つてる……が」

一旦、ベルクは言葉を区切って言い難そうに髪の毛をぼさぼさとかいた。

「お前、あの子がシンシアだつて知つてて呪言なんて掛けられたか？」

ぐさり、とそのベルクの言葉が突き刺さつたような気がした。

確かに、私はあの子を『殺すつもりで』呪言を使った。

それこそ、本当に手加減する余裕なんて無かつたし……加減した呪言など、奴には効かなかつただらう。

「……俺なら無理だ」

私にも無理だ。永い間『ミア』の傍に居た私が、シンシアの命を危険に晒すような事が、出来るわけ無い。

「……わかつてくれたか？」

諭すように言いながら、ベルクが近寄ってくる。
だが。

『それとこれとは話が別だ！』

私は、ベルクの足を思い切り踏ん付けてやる。

「……いや、痛いんだが」

『それならそれで、何故私に術具を持たせない？何故封印式の触媒代すら持たさなかつた？明らかに『渡り歩く厄災』相手では装備が足りない過ぎた！』

「めばしい魔具も何もかも大抵は壊されるか盗まれちまつてたし……

…何より金が無か」

今日二度目の右ストレートを、ベルクの腹に叩き込んだ。

ベルクも今回は、踏みとどまったようだ。忌々しい。

『シンシアが世界樹の葉と魔封石を持っていなかったら、二人とも死んでいた所だった』

「世界樹の葉？」

『シンシアの持っていた異常な高純度の石で『渡り歩く厄災』に蓋をして、世界樹の葉を煎じて飲ませた』

「……ナイス判断だ。よくやった」

ベルクは曲げた右手の指を唇に当てながら、何事かを考え始めた。

これはベルクの……というより、どの代にも共通して言える仕草だ。私は、シンシアから預かった4枚のうち、3枚をベルクに渡した。1枚残したのは、直感の問題だ。『1枚は私が自分で持つておくべき』そういう予感だ。特に深い意味は無い。

「……本物、だな」

ベルクは険しい顔をした。

「確かに、あった。封印式の維持に世界樹の力が有効だった……」
眉を潜める。

「……なんで忘れてたんだ？」

数秒間、目を閉じる。

「なににせよ今はリルお前だ。どっか削られたな？ちょっと服脱げ患部見せろ」

目を開いたベルクは意識を切り替えるように私へ指示すると、棚の上から木箱を取り出した。

一瞬、躊躇したが着て居たワンピースのドレスを脱ぎ始める。

こういう時に、ベルクが男な事に不便さを感じる。

こういう時は例え3代目のような変人でも、女の方がマシだ。それに、多少方向性は違えども肝心の頭の狂い具合はベルクも三代目も大差無い。

何の気無しにベルクを見ると、世界樹の葉を木箱にしまつて振り向いた彼と、目が合った。

『こつち見るな』

「いや、見なきゃ診察のしようが無いだろうが……そもそも見えて困る程な」

『せめて脱ぐ途中は見るな変態』

ベルクの腹を殴りつけて背を向けると「こちらから見えないからあちらからも見えないというわけでもないと思うが、気分の問題だ」ドレスを脱いで放り、上半身裸の下着姿になって、まるで診察台のような簡素なベッドの上に横になる。

「……右腕か」

『何故見てる』

ベルクは普通にこちらから視線を外していなかった。レディに対する礼儀はベルクの頭の中には毛頭無いらしい。

「いやだって俺今医者だし」

『死んでしまえ』

「はいはいお人形さんは素直に言う事聞いて下さいね……で、身体全体が衰弱してるように見えるが。足は大丈夫なのか？」

『死ね』

「いや医者としてだな」

『脱げと？』

「だから医者として」

『脱げと？』

「……お前な」

『脱げと？』

「もういいもういい、そこまで言うんなら直接の患部は右腕だけなんだな？全身かなりヤバい雰囲気だが」

『右腕を喰いちぎられた感じがした』

ふむ、とベルクは先ほどまでふざけていたのを感じさせない真剣な表情になった。

「痛みは？」

『喰われた時は恐ろしく痛かった。今は少し痺れる程度。痛みは無

い』

「喰いちぎられた感じっていうのは……：：：：： 比喻か？」

『いや、本当に右腕が持っていていかれるのが見えた。奴が持っていた腕を喰う毎に激痛がした』

ベルクは成る程な、と一言漏らして人差し指を口元に当てた。

「そりゃ相手が怨霊の類だったからだな……：：：：： 持ってかれて結びつきが弱くなってんだ。本当なら痛いほうが正常だ」

『どういう事？』

「壊死しかかっているって事だ。感覚の方から崩れてんだよ。全身に行き渡らせるべき魔力が右腕へ過剰に集められてる事でなんとか右腕の形が保たれてる。ただ、傷口からの魔力の流出が酷すぎてダダ漏れになってやがる。ほっときやすぐ機能停止」

ベルクは私の右腕を取ると、二の腕辺りを押さえ始めた。

「ああぶにぶにしている」

『死ね！死んでしまえ！』

ベルクは本気でただお医者さんごっこを遊んでるかの如く、私の腕を妙な手つきでさする。

だが、彼の指先から魔力は感じる。一応、真面目に治療しては、いるらしい。一応は。

「この辺だろ喰われた場所。今ので塞いだ。運が良かったな、本体は無事で」

確かに、運は良かった。身体の方が壊されていたら、道中のシアの相手が面倒だった。

「まあとりあえずこれで、出血多量死みたいな死に方はせずに済むわけだ。良かったな」

『もつと真面目にやれ』

治療が終わったので私は起き上がろうとしたが、ベルクに肩を押さえられて押し倒された。

『何のつもり？』

「魔力の補充。そんな状態じゃ現状維持もままならんだろうが」

『いらない』

「いや必要だ。」

『寝てれば治る』

「いつかはな。俺は今治したい」

『シンシアが目覚めたからって焦るな』

「ウォーカーもいつ目覚めるかわからん。手駒は必要だ」

『嫌だ離せ触るな』

「聞き分け悪いな」

ベルクは私の腹の辺りに馬乗りに乗るかかって、左腕で私の肩を押さえると右腕で宙に文様を描き、魔力球を造りだした。

全面的に体重を掛けて押さえ付けられてるから、手足をじたばたさせてもびくともしない。

『重い。どけ強姦魔』

「言っに事欠いてなんて事言いやがる！」

ベルクは造りだした魔力球をふわりと宙に浮かせ、自分の魔力を私の波長に合わせるように、私の左胸を中心に魔方阵を描く。くすぐつたい。

「……………ついでだから豊胸手術でもしてやろうか？」

『後で断頭台に送ってやる』

「さて容れるぞ。ちと痛いガマンしろ」

濃密な魔力が、私の左胸の魔力炉に流れ込んでくる。胸を中心に、全身が火照って熱くなる。収縮していた血管から急に正常に血が流れ出したように、体中が痺れる。痛い。ガタガタと痺れに震える指先が物に触れると、またそこから新たな痺れと痛みが襲ってくる。

「うっ……………」

「お、久々にリルの声聞いた」

『死ね！お前さっさと死んでしまえ！』

動く事もままならないから、指を使わず直接文字描きをベルクに叩きつける。

「この胸みたいに可愛い声だったな」

『今すぐ死ね!』

「寝めたつもりなんだが」

『神経を疑ってやる』

「さて……出力上げるぞ、もう少しで終わる」

「……ッ!」

今度は意地でも声は出さなかった。

全身の痺れが徐々に強くなり、だんだんと熱に浮かれるように頭が朦朧としてくる。

手足がびくびくんと痙攣し、眠気以外の理由で意識が遠くなる。

息も荒くなるが、それでも声だけは出さなかった。

「……これで終わりだ。まあ寝とけ」
断る。

描いたつもりが、宙に何も現れない。魔力が身体に馴染んでいない。今は半ばベルクの魔力に侵食される形になっているから、意識が飛びそうな上に体の自由も利かない。

それでも必死で意識を繋ぎとめていると……

「な……何してるの!？」

ばたんとドアを開く音と、シアの大声で、全てが緩んだ。

これはいよいよもって寝ているわけにはいかない。

何やら面白い事態になりそうだ。

一章 『再会』と良く似た『何か』 十話目

Wrote: SIA

正確にはわからないけど駅から何時間か歩くと、リルは立ち止まって大きなお屋敷を指差し、敷地へと入っていった。

どうやらここがミア・フォルトの家らしい。立派なお屋敷だ。一昨日勝手に野宿に使わせてもらったお屋敷より、数段大きくて、でも何処か古さを感じさせるような屋敷だった。

リルが扉の横のベルをからんからんと鳴らして玄関を開こうとしたら、勝手に開いた。

「おかえりなさい！」

出てきたのはリルと同じくらいの年頃の女の子だった。金色の髪の毛を腰まで伸ばして頭には小さなリボンを乗せ、リルとお揃いのようなドレスを着て腰には見慣れない風貌の柄の剣を帯びている。

リルは微笑みを浮かべて何か文字を描きながら、頷いた。

「リル……ああ……こんなになってしまった……」

女の子がリルに目を向けると、一瞬で女の子の様子が一変した。

なんか、最近こんなのはつかだなーと思う。少し慣れてきた。きつとこの子も魔法使いなんだろう。そうすれば納得がいく。

女の子はリルの右手を取りながら、私に言った。

「はじめまして。ようこそおいで下さいました、シンシアさん」

シンシア？

「あ……はい、はじめまして……」

そつえば、私は直接的に自分の名前を思い出したわけじゃなかった。

『シアと呼ばれていた』事を思い出したから今までシアと名乗っていたけど、例えば見知らぬ他人からでも呼ばれるとシンシアというのが本名のように思えてくる。

でも、そうだとしてみても何でこの子は会ったことも無い私の名前を知っているの？

「私はサヤと申します」

「……シアです」

世界一有名とか噂されているミア・フォルトの家の人間だ。もしかしたら、予知とかなんかそんな魔法で私に来る事も私の記憶ももうわかっているのかもしれない。

リルはサヤの手を取ると、二人で両の手を握り合う形になって、目を閉じて呟いた。

「『エンゲージ』」

……婚約？

二人は目を開いて手を放すと、私に似向き直った。

「そちらでお掛けになってお待ち下さい。今、ベルクを呼んできます」

「ありがとうございます」

丁度、歩き疲れていたところだ。サヤの勧めてくれるがままソファに座った。

サヤは向こうへ行ってしまおうようなので、私の傍に残ったリルに聞いてみる。

「ねえリル、サヤも魔法使いなの？」

これで魔法使いなら、私の一般人と魔法使いを見分ける方法はかなりの信憑性を帯びてくる。

それを見越したように、リルには聞こえないフリをされてしまった。この屋敷に入ってから、全体的に何か心を見透かされているかのようない感じがする。

そういえば、この屋敷にはバリケードが無い。やっぱりあの家は別宅で、こつちが家なんだろう。

「シア……！」

あれこれ考えていると、名前を呼ばれた。

振り返ると屋敷の中の階段の上から、知らない黒髪の男の人が降り

てくるところだった。

「……………誰？」

わからない。多分会ったこと無い人だ。

「シア……………シア……………いや……………サヤ。シアの相手は任せた」

「……………はい、わかりました」

何度か、『何て声を掛けたらいいのかわからない』というような感じで私の名前を呼ばれた。

記憶喪失になる前に会った事のある人なんだろうか？

……………思い出せない。

男の人はリルの手を取ると、足早に階段の上へと戻っていった。

……………何がしたかったんだろう。

全然わからない。

「えっと……………」

取り残されたサヤに、話しかけてみる。

「何のお話をしましょう？シンシアさん」

呼ばれ方が、引くかか。まずはそこからしよつ。

「シンシアって……………私の事？」

「はい」

サヤは小首を傾げた。

「サヤは、私の事を知ってるの？」

いきなり核心をついてみる。

「そうですね……………シンシアさんの事を話に聞いた事は、ありました。そういう意味では知っていました……………初対面です」

よくわからない返事だ。私の知り合いの知り合い？という事なんだろうか。

とりあえず

「その、シンシアさんっていうの……………慣れないから、シアって呼んでほしいな」

「では、『シアさん』と呼ばせていただきます」

この子は物腰も穏やかだし、あまり人を呼び捨てにするタイプじゃ

ないらしい。妥協する事にする。

「ええと……サヤは私の事を何処で聞いたの？誰に？」

サヤは怪訝な顔つきになった。

「昔ここで、ミアに聞きました。リルがシアさんを連れてくる事は、ベルクに……何故、そんな事を気にするんですか？」

ミア。ミア・フォルトの事だろう。間違いない。やっぱりここは、あの街で有名だったミア・フォルトの家なんだ！

「や……実は私、記憶喪失で……その、シンシア？って名前も覚えてなかったの」

サヤは目を見開いて驚いた。

「……自分の名前すら覚えていなかったんですか？それでは、ミアは……ミアについてはシアさんはどれだけ覚えていますか？」
まるで、怒ったように。

「え……つと、確か世界一有名な魔法使いとか、2000年前に伝説の魔物をやつつけたとか……あ、この家がミア・フォルトのものだとか？」

「……まさか、シアさんはミアの事を何も覚えていないんですか？」

荒げたサヤの声は。彼女が握った拳は、震えていた。

「そんな……ミアは、どれだけの思いで、貴女を……」

わけがわからない。わからないけど……今、多分、私は彼女を傷つけた。それは、わかった。

「ごめん……ミア・フォルトの事は、それくらいしか知らない……」

「いえ……こちらこそ取り乱してすみません」

サヤは申し訳なさそうにうなだれた。

「記憶喪失だなんて……大変でしたでしょう？」

「や、えーと……割といろんな人に助けて貰ったし、すぐにリルと会えたからそんなに……かな？」

これは、本当の事だ。

「そうですか……それは何よりです」

サヤは元気が無い。私がミアについて何も覚えていなかった？事が、余程シヨックだったらしい。

彼女の中では、私がミア・フォルトについて詳しく知っている事が前提……つまり、私はミア・フォルトの知り合いか何かだったらしい。

世界一有名な魔法使いと私が、知り合い？

そんなばかな。

「……この流れで聞くのもなんなんだけど……リルはミア・フォルトの娘さんなんだよね？サヤもそうなの？」

サヤは目をぱちくりとさせた。私から目を逸らして、口に手を当てて考える。

「……娘、と言えば娘にあたりますが……私達とミアの関係を説明すると長くなります。ですが、私とリルはれっきとした姉妹です。」

「サヤとリルは二人姉妹なんだ……どっちがお姉さんなの？」

「いえ、妹にあたる存在はもう一人居ます。リルと私とは……若干、私の方が先に造られたので私の方が姉と言えますね。一番下の娘は……今は旅に出ているようで、連絡が付きません」

サヤはにこりと微笑んだ。

……や、造られたとかまるで物か何かみたいない方されても困る。それでも、リルがサヤの妹だという事はわかった。

ずっと気になっていた事を聞いてみることにする。

「ええと……っていう事は、リルはサヤの妹なんだよね。何でリルは喋らないんだろう？初めて会ったときは、ちよっただけ喋ってたような気がするんだけど……私、文字が読めないからリルと殆どお喋りできなかったんだよね」

サヤの目が、すつと……細くなった。

まずい事を聞いてしまったらしい。

話題逸らしに、さっさと別の事を聞いてみる事にする。

「や、えつと……じゃあ、この家に、ミア・フォルトが居るんだよ

ね？」

サヤは少し考えるとどちらの質問にも答えず、先ほどよりも静かな口調で、提案してきた。

「一つ、ゲームをしてみましよう」

「ゲーム？」

どうやらこの子も例によっておかしな子の一人のようだ。魔法使いは変わってる人ばかりらしい。

質問されたらぱっと答えて、それでおしまい。一件落着。それで良いじゃないか。

それでも一応、聞いてみる事にする。というか、聞く以外に選択肢が無い。

「仮に……の話ですが。仮に、ミアがこの家に居ると。そう仮定します」

「仮定の話なの？」

「ええ、仮定の話です。『屋敷の何処かにミアが居る』と。そう考えて下さい」

「うん」

考える。屋敷の中にミア・フォルトが居る。考えた。元々そう考えていたから、難しい事じゃない。

『この屋敷の壁をぶち破って、いきなり汽車が飛び込んでくる所』みたいな、突飛な話じゃない。ごくごく普通の仮定話だ。

「ミアさんがミアの居る部屋を一つ選んで、その部屋にミアが居ればシアさんの勝ち。リルが喋らない理由を教えて差し上げる事を約束します。その部屋が空だったら、シアさんの負け。リルの事が気になるのでしたらベルクにでも聞いてください。彼ならきっと答えます」

サヤは、にこりと笑った。

「……わかった」

私は、引きつった笑顔を造った。

サヤはリルについて何も教える気が無い事が今、よくわかった。

外から見た全景があんなに大きかったお屋敷だ。普通に考えて、部屋の数は10や20ではない。

その中の一つから、ミア・フォルトの現在居る部屋を一つ見つけ出す。

それも、予備知識無し。もし彼女の部屋の印なんてあっても、多分私じゃ字を読めない。

そんなに喋りたくなければ素直に秘密と言えば良いのに。それで私が納得するかどうかは別として、このゲームは明らかにアンフェアだ。

それでも、乗りかかった船。どうせ話す気の無い相手なのだからゲームを取り消しにして口を割らせる事は出来ないだろうし、逆にそれで唯一の機会を失う事にもなりかねない。

……別に、他人の秘密を暴くのが楽しいってわけじゃないんだけど。「ここだと思つたら、どんな部屋でも開けていいの？」

一応、ルールの確認をする。「ええ。どの部屋でもかまいません。ただし、一度限りなので慎重に」

言質を貰った。怪しい扉を開けて、『この部屋を開けたせいで伝説の魔獣が』なんていわれても、私のせいじゃない。

世界一と言われる魔法使いの屋敷だ。そんな開かずの間があっても不思議ではない。

そうすると、ちょっととした博物館見学の気分だ。ちょっとだけ恐いけど、好奇心の方が勝る心境。

私は、ソファから立ち上がった。

「ようし、頑張るところ」
勝負だ。

私はまず、広間から階段の上の方に向かった。

理由なんて得に無い。強いて言えば、泥棒が窓を割って入れる一階

よりも、侵入し難い二階の方が珍しい物がありそうな気がしたからだ。

「賭けをしたら」

迷わず階段の方に向かった私についてきながら、サヤは呟いた。

「私は、シアさんが勝つことに賭けます」

「……心理戦？」

白々しい。

「本心ですよ」

サヤは、邪気を感じさせない笑顔で答えた。あまりに良い笑顔過ぎて、表情が読めない。

彼女の言葉の意図が読めない。私のペースを乱して判断を鈍らす魂胆？

「そうですね、シアさんが全てを忘れていなかった場合……金貨を何枚出しても釣り合う、とても割の良い賭けです。勝ち試合です」
サヤは、可愛らしく両の掌を合わせたて微笑んだ。

……というか、こんな小さな女の子にゲームとか賭けとか言わせるなんてミア・フォルトはどんな教育をしてるんだろう？

妹は無愛想で喋らなくて野宿癖。姉は愛想良くて喋るけど、時々ぼろりとゲームとか賭けとか不穏なキーワードが目立つ。

この分だと、一番下の妹というのも何か怪しいものがあるのかもしれない。会ってみたいけど会ってみたくない。

廊下を見ると、ずらっと部屋が立ち並んでいる。

右か、左か。少し迷う。

心理戦には心理戦だ。乗ってやろう。

「サヤはどっちに行くのがお勧め？」

サヤは少し視線を上にする仕草をした末、肘は腰元につけたまま、手首から先を曲げて人差し指で方角を示した。

「右です」

「じゃあ右にしよう」

「……私を信じない流れじゃなかったんですね……」

サヤは何やら複雑そうな表情をした。なんとなくだけど、このゲームの結果でサヤの人柄がわかりそうな気がする。彼女がペテン師かどうか。

どうせゲームは私が負けるんだから、本命はこっちに移っている。

「じゃあ、次はここからいくつ目のドアが怪しいと思う？」

「……好きなドアを開けたら良いと思います」

流石に警戒されてしまったようだ。

仕方なく、適当に廊下を歩く……と、近くで何か物音が聞こえたような気がした。

「何か、今、聞こえたよね？」

「はい、私も聞こえました」

音のした方のドアの前に立つ。

「サヤはこのドアの向こうが怪しいと思う？」

「そうですね、怪しいです」

サヤの返事を確認して、私はドアを開いた。

「……やっぱり私を信じない流れじゃないんですね……」

サヤの声は殆ど耳に入らなかった。

ドアの向こうの光景に、我が目を疑う。

一旦、ドアを閉じてまた開いてみようかとも思ったけどやっぱりやめた。

「な……何してるの!？」

思わず大声を上げてしまった。

そう。

私も、14歳だ。耳年増ではないけど、人並み程度にはその手の知識もある。

何してるか本気でわからないわけじゃない。

先ほどの黒髪の男の人が、半裸のリルに馬乗りになって、嫌がるリルの胸を触っていた。

男の人は私達に気付くと、リルの上から降りて私達に近づいてきた。

「ああ……サヤにシア。丁度良かった。ちょっとシアの方も診たい

んだがつ!？」

「こつち来るな変態っ!」

男性に向かつて、手元にあった適当なツボを投げつけた。

「……このツボ一つで金貨1枚近い価値あんだが……」

半ば事も無げにツボを受け止めた男性は、半眼でツボと私達とを見比べた。

「え……それはごめん」

「いや嘘なんだけどな」

男の人は、ごとりとツボを足元に置くいた。

なんか腹が立った。

「どうすればそんな状況になるんですか……」

サヤは呆れた顔をして黒髪の男の人の傍をすり抜けると、リルの方へ向かった。

「大丈夫?リル?」

シートでリルの身体を覆いながら、サヤが問いかける。

それすらおぼつかない様子で、リルは微かに頷いた。

「あんな小さい子に何してたのよ貴方」

私は、思いつきり黒髪の男を睨み付けた。

「治療だ」

「……『嘘つけ』、だそうです」

リルの発言の翻訳が飛んできた。第三者がいるとリルの言葉がダイレクトに聞けて楽だなー、と思った。

「話をややこしくすんなって」

黒髪の男は髪の毛をぼさぼさと掻きながら言った。

「えーっとだな、シンシア……先ず、誤解していそうだからもう一度言っと、さっきのは治療だ。患者が子供のように駄々をこねたら押さえつけていたに過ぎない。通じたか?」

「通じるわけないでしょ!?あんな小さな子裸にして力づくで押さえつけて、む……胸とかなんか触ったりして!この変態!近寄らないでー!」

リルは肩を震わせて笑い、サヤは苦笑し、黒髪の男は苦々しい顔をした。

何やら、リルとサヤは別段先ほどの状況を問題視していないらしい。それはそれで、かなりの大問題だ。

「いいかシンシア……俺は。司教で。聖職者で。こいつらの専門医だ。」

「世の中には年端も行かない少女にヨクジョウする変態も居るから気をつけろってお父さんも言ってた!」

私は、この子達の為にもここでこの男を説き伏せないわけにはいかない。

こんな変態的な行為が日常的に行われているのだとしたら、見過ごすわけにはいかない。

最悪、この男をふんじばってこの屋敷の主人が戻ってくるまで監視しておくくらいはするべきだ。

「そりやまた教育熱心なお父さんだな……てか記憶喪失だったんじゃないの?」

「今思い出したの!」

「成る程……必要に依じて思い出せるわけだ、ようは」

黒髪の男は、人差し指を曲げて口元に当てながら、何か考え始めた。

「……なんでベルクがシアさんの記憶喪失を知ってるんですか?」

「一応聞いてた。楽しそうな事してたね二人で。どうせ教えるつもりなら意地悪しないで教えちゃえばいいのに」

この男はベルクという名で、物凄い地獄耳らしい。

「……一応、シンシア。君の事も診察したいんだが?」

「嫌!絶対嫌!」

「まあそう言うと思った。誰か助け出してくれよ」

「えっと……『自業自得、断頭台に出頭して情状酌量を狙ってこい』」

男　ベルクが振り返ると、リルはいつもより小さい動作で文字を描いて、サヤが私にもわかるように通訳してくれた。律儀な子らしい。

「ひどいな、おい」

被害者本人はベルクを許す気が無いようだ。

「普通、あんな場面を目撃した後は誰だつて引きます。嫌がります」

「そもそも男の前で服を脱ぐなんて絶対嫌！」

「サヤも案外容赦無いな……まあ男の前が嫌なら、丁度良い」

ベルクは目を閉じて何事か聞き取れない言葉を呟くと、光と煙を発した。

「じゃあ……これなら、文句無いかな？」

煙が晴れると、ベルクの姿は無くなっていた。聞こえてくる声も、ベルクの物ではない。子供の声だ。

彼の代わりに、ベルクの先ほどまで着ていたぶかぶかの外套を着た、私と同じ年くらいの女の子が姿を現した。

肩に掛かる辺りで切ったクセのある金髪に、青い穏やかな瞳。整った顔立ちに、少し大人びた雰囲気。

この子を、私は知っている。

「これなら男に見えないし、問題ないでしょう？」

私は、あの子を、知っている。

頭の中で膨大な情報が流れ出した。

なんで、今まで思い出せなかったんだろう？

「ミアじゃない人がその姿で喋らないで！」

思い出した。

ミア。

ミアだ。

あの子は、ミアだ。

掌でその顔を叩こうとしたら、手を掴まれて止められた。

「失礼ねえシア……私もミアよ？」

問答無用でもう片方の手を出したら、そっちも掴まれる。

片腕を止められた段階でそれは予想できてたのでわき腹に全力で蹴りを入れたら、向こうには予想外だったのか綺麗に入った。

「じぶつ」

『ミアの姿をした男』は、派手に倒れるとげふげふとお腹を押さえながら咳き込んだ。

「今のはベルクが悪いです」

サヤに同意するように頷きながら、リルが何事か文字を描く。

「……『悪趣味』、だそうです」

サヤの通訳でリルが何を描いたかをを知る。

「まあ、シンシア？俺がミア・フォルトと呼ばれてるのは嘘じゃないんだ」

彼女の首飾りから、また煙が噴出して光が発せられると、ミアの姿をした「誰か」が、ベルクの姿に戻る。

やはり、ベルクがあの子に化けていたらしい。……魔法って何でもありなんだな、と思った。

「……ただし、俺は八代目だが」

その時の私には、その言葉の意味が、わからなかった。

一章 『再会』と良く似た『何か』 十一話目

Wrote: SIA

あの子は髪の毛にコンプレックスを持っていた。

とても綺麗な金色をしていたけどかなりの曲がりクセがある髪の毛で、いつも私の髪を羨ましがってくれた。

だけど私の髪の毛は、変に赤と黒の混ざった、不揃いな茶色。

私は逆に、その色が嫌いであの子の金髪がとても羨ましかった。

それでも……他の子供たちと違って文字の読み書きも出来て魔法の才能もあって皆の人気者で、そんな優秀なあの子が褒めてくれるのが嬉しくて。

だから、私は髪の毛を伸ばしていた。

伸ばすと癖が強く出る事を嫌ってすぐに髪の毛を切りそろえてしま
うあの子の分まで、私は髪の毛を伸ばしていた。

ベルクの化けた姿を見て、思い出した。

あの子の名前は、ミア。

ミア・フォルト。

私の親友だった。

「お茶が入りましたよ」

サヤがティーセットを手に、食堂へと戻ってきた。

落ち着いて話せるように、と私達は何人も座れそうな長いテーブルのある食堂へ移動をしていた。

ミアに誘われて行った教会で見た『絵画』と言うもので見たことがある。

貴族や王族なんかの特権階級の人が、食事をするのに使うような凄
い品。

私は緊張していた。

急に、様々なミアの事を思い出して混乱している事もある。

サヤは私とベルクにお茶を淹れると、リルと自分には気持ち程度淹れた。

「えと……お茶って、確かもの凄く高いんじゃないかな……？」

私の記憶では、ちゃんとしたお茶というのは異国から取り寄せるものだから物凄く高価な……それこそ、特権階級の人しか飲めないような品だったはずだ。

「いいえ、そんな事はありませんよ」

「今は、海路の安定と共に陸路も発達してるからな。この程度の粗悪品なら誰でも買える時代さ」

サヤが簡潔に否定すると、ベルクが軽く解説してくれた。

「粗悪品？」

「茶葉粉に異物を混ぜて、質を落として量を稼いだ大衆向けの品って事だ。そもそもこの茶葉粉の質も高級な品ではないしな」

初耳だ。やっぱり首都というのは凄いものらしい。

「俺は料理人じゃないから程度の違いはわからん……安物だってサヤが淹れれば十分美味い」

「ありがとうございます」

サヤは嬉しそうに微笑むと、テーブルに突っ伏して寝ているような状態のリルの正面に座った。

もちろん、今のリルは元通りにドレスを着ている。

駅から歩いている時は感じさせなかったけど、今は身体を起こすのも億劫なようだ。

どうやら、ベルクが『治療』をしていたというのは本当の事らしい。

「さて……まあ、何から話せばいいものやら」

ベルクは、行儀悪く長いテーブルに肘をつきながらお茶を一口すすった。

私も、一口飲んでみる。

熱い。そして、少し苦い。お茶というのはこんなものばかりなんだろうか？

こんなものが美味しいだなんて、やっぱりベルクもちょっと変わっている。

「それなら、先ず私がリルの魔法にまつわる事について話すのが一番かと」

ある意味、今は一番どうでもいい事をサヤが提案してきた。リルはぴくりと反応したが、どうでもよさそうに寝直した。本人も、別に隠す気の無い話らしい。

「……部屋に居たのはベルクだったじゃない。ミアは居なかった」ゲームは私の負けだから、と暗に伝えてこの話は切り上げてもらう。今はそれよりも大事な話があるはずだ。

「いえ、シアさんの探している『ミア』は居ませんでした……シアさんは、私とのゲームに勝ちました」

「まあ、やっぱりそれが核心だよな……サヤに誘導されてる感があったが」

ベルクは浮かない顔になり、サヤは苦笑いを浮かべた。勝ちという意味がわからない。

「いったいどういう事？」

「つまり……シンシア。お前の探していた『ミア』は、この屋敷に居ない。」

サヤはペテン師だったのか……と思った。

屋敷に居ない人を屋敷から探し出せ、なんて無理がある。ゲームとして成り立っていない。

確かに『仮定する』とは言っていたけど……仮定はあくまで仮定だ。正解の無いゲーム。

そもそも、この会談にミアが参加していない段階でその可能性はほんやりと考えていた。

それにしても。

と、考える。ミアは私と同じ年だったはずだ。

私とミアは、物心ついた頃から一緒に育った。

それが、世界一有名な魔法使い？200年前に魔物をやつつけた？

300年前から生きている？

絶対におかしい。計算が合わない。

それなら私は何歳になる？314歳？

「……あー……それで、これは本当に言い難い事なんだがな？」

ベルクは本当に言い難そうに、歯切れ悪く前置きをする。

「……お前の探すミアは、もう世界中の何処を探したって見付かる事は無い」

わけのわからない事を言い出す。

「……どういう事よ？」

聞き取り方によつては、性質の悪すぎる冗談だ。冗談では済まされない、そんな冗談だ。

ベルクは、静かな口調で続けた。

真剣な目が、怖かった。

「つまり……ミアは、死んだんだよ。およそ250年も昔にな」

思わず立ち上がると、椅子はガタンと音を立てて倒れ、テーブルに手をついた事でカップが倒れ、お茶が飛び散った。

「変な冗談言わないでよ！じゃあ私は！？ミアと一緒に育った私はどうなの！？ミアを残して私は250年も生きていたとでもいうの！？」

信じられない。こんな酷い事をいう人が居るなんて。

信じられない。折角思い出したミアが、何処にも居ないだなんて。

信じられない。ミアが、『250年も昔に』死んでいたなんて。

「落ち着け」

「落ち着いてなんて居られないわよ！」

ベルクは、眉間にしわを寄せて、真剣な顔で私を睨みつけてくる。怖い。

「シンシア。今年はエフィトス歴で何年か答えられるか？」
わからない。

怖い。

「そんなの知らないわよ！私は記憶喪失なの！」

「都合の良い時だけ記憶喪失になるんだな……今はジャリス歴263年。エフィトスの暦に直すと1853年の4の月だ」

エフィトスの名は知っている。神様の名前。神様の産まれた日から数えた暦。それがエフィトス歴。

それは、思い出した。でも、ジャリス歴なんてものは知らない。

「じゃあ自分の経験に聞いてみる、シンシア。お前はここに来るまでに知らない何かを見ていなかったか？珍しい何かを持ってはいなかったか？」

「そんなの知らないわよ！私は田舎で育ったの！都会の物なんて見たこと無いに決まってるじゃない！」

確かに、記憶喪失だった。でも、世の中の一般常識とか、そういう物はある程度覚えていたつもりだった。

……なのに、わからないものなんて、多すぎた。

「例えば、汽車。線路」

私は最初、線路が何なのかわからなかった。最初、汽車の事をドラゴンだと勘違いした。

「例えば、エフィトス硬貨……まあ、こっちは気付かず使っちゃったかもしれないが」

「……旧セロ硬貨？」

「なんだ、ソレは知ってたのか」

私は、知らなかった。パン屋のおじさんに教えて貰っただけだ。『これは、今では殆ど流通していない大昔の珍しい硬貨』だと。

「建築技術……街並だって、違ったんじゃないか？」

木造の家の少なさに、レンガ造りの家の多さに、違和感を持った。

「食べ物だって、物流技術の進歩のお陰で昔と大分変わっている。食生活そのものも、味付けも」

確かに、私はあの赤い甘くてしょっぱい香辛料の名前を知らなかつ

た。

「細かく挙げれば暇が無い。他に挙げれば服も、常識も、曆も、人に余っては信じる神でさえも」

街を歩く人々の服が簡素な物でない事に驚いた。

お茶なんて、特権階級の人の飲み物のはずだった。

ジャリス歴なんて知らない。

私は、信じる神様なんてエフィトス以外に知らない。

「……心当たりが、あるんだな？」

血の気が、引いていくのがわかった。足ががくがくと震えて、立っていらなくなる。

全身の力が抜けてしまつて、私は膝から崩れ落ちた。

「シアさん！」

へたりこんでしまった私に、サヤが駆け寄ってきた。

何故かわからないのに、涙がこぼれてきた。

「ミアは……」

「死んだ」

ベルクは冷たく言い放った。

「お父さんは？お母さんは？」

「死んだ」

「皆……他の皆は！？テリスは！？オーシュは！？ロセシーは！？」

思い浮かぶ友達の名前を、次々に挙げていく。

「皆死んだ」

「嘘……嘘よ！そんなの嘘だ！」

信じたくない。

「死んだ！もう皆死んじまつたんだ！」

「ベルク！そんな言い方……！」

「シアの両親も、ミアの両親も皆教会の中で死んだ！テリスは鼠の運ぶ病で死んだ！オーシュは事故で死んだ！ロセシーは寿命だ！兎に角死んだ！他にもシフェだつてフィロリーだつてカーラだつて

「皆死んだ！」

「ベルク！いい加減にしなさい！」

「嘘だ！」

「本当の事だ！250年も昔に、もう皆、死んじまつてんだよ！」
怒鳴り散らす男の人を、怖いと……その時は、思わなかった。

私は、泣いていた。

でも、ベルクは……ベルクも、私以上に涙を流していた。

「シンシアが。シアが。300年も眠っている間に。皆死んだんだよ、ミアの心だけ残して」

眠っている間に？

「心……？」

「教会の秘匿事項だ」

「教会……」

そうだ。ミアは。ミアは教会の人間だった。

「何よそれ……私が眠ってたって、どういう事？」

「……教会の秘匿事項だ」

「ミアの心っていうのは？」

「……今はまだ教えられない」

話にならない。

「……いろんな事教えてくれてありがとう。私はもう行くね」

「……何処に行くつもりだよ？シンシア。お前には行き場所なんて無いだろうが」

「教会。教会に保護してもらって、協会の人間になる」

ベルクは露骨に嫌な表情を作ると、私の行く手を塞いだ。

「お前を教会に引き渡すわけにはいかない。シアを殺させる事は絶対にさせない」

「なんで教会に行ったら私が死ぬのよ」

元々、記憶を取り戻せるような魔法使いを探す事を優先していただけだ。

ここで記憶の大半を取り戻して、それ以上の知りたい事は教えて貰

えない以上、もうここに用は無い。

それに、ベルクの言い草もわけがわからない。

「お前にとんでもない化け物がとりついてるからだ。お前ごと殺される」

「……引きとめる言い訳なら、もっと現実味がある事言つてよ」

心底、ベルクに呆れてしまった。

「ミアの事が教会の秘密なら、私が協会の人間になるの。どこがおかしいの？」

すり抜けようとした私の手を、ベルクが握って止めた。

「教会の秘匿事項を、ぼつと出の新人に教えるわけあるか？それを知るのに何年掛けるつもりだ」

「何年でも」

会話が、途切れる。

急に静かになった空間で、机から零れるお茶が地面に滴る音だけが、ぴちやりと鳴った。

「放して」

私は力任せに強引に腕を振ると、ベルクは手を放した。

「カエルのおじさんが、私には商売の才能があるって言つてた。どんな事したつてすぐに成り上がつてその『秘匿事項』とやらを教えてください。勝手に私の親友の名を語つて、邪魔しないで」

私がベルクに背を向けると、目の前にリルが居た。

眠そうな瞳で、宙に大量の文字を描く。

「リル！余計な事すんな！」

リルは見下すような目で私とベルクを見ると、さらに文字描きを続けた。

「リル！」

「落ち着いて下さい、ベルク。シアはリルの書く文字を読めません」

「……そのうちに文字を読めるようになったら、また来るね。リル」
リルは満足げに頷くと、文字を描くのをやめて食堂の椅子の元に座りなおした。

「……シアさん。ひとつだけ、私もお伝えして良いですか？」
「……どうぞ」

サヤは、何処か信用してはいけない面を持っている。

それでも、一応聞くだけ聞いておく事にする……この子とは、もう二度と会うことが無いかもしれないから。

「シアさんがミアから貰ったものを思い出せば……貴女の『探し物』は、何だつてきつとすぐに見付けられます」

「一番見付けたい人は、もう居ないの？」

「……人の心は、変わるものですから」

やっぱり、この子はわからない。

「サヤ！」

「これくらい良いではないですか、ベルク」

怒鳴るように名を呼ばれても意に返さず、サヤは微笑んだ。

「ありがとう。それじゃあ、また会うことがあったら」

私はそれだけ伝えて、3人に背を向けて歩き出した。

食堂を抜け、廊下を歩き、玄関の広間を通って扉を開く。

外は、もう帳が降り始めていた。

教会の場所なんて誰かに聞けばすぐにわかるだろう。

路銀があまり多くあるわけではないから、これからは教会に住み込

みのシスター見習いをする事になるだろう。

そういえば、いつかりルに買ってもらった汽車の切符代金を払いに来なくてはいけない。

リルに会いに来る口実を思い出した。

これで、少し気が楽になった。

これから、どうしようか。

シスターになったら、きつと毎日が忙しくて、質素な暮らしになるんだろう。

それなら、教会に行く前に一度くらいちゃんとしたレストランで美味しいものを食べるのも良いかもしれない。

一步、一步と庭を歩いて屋敷から遠ざかって、塀の元に差し掛かっ

たその時。

「シンシア！」

私を呼ぶ、ベルクの声に振り返った。

「何よ」

私は半身だけ屋敷の方に戻して、答えて返した。

「お前、これからどうするつもりなんだ？」

正直に答えてやろう。

「これからレストランで美味しいもの何か食べるの。早く行きたいから邪魔しないで」

「こんな時に飯の心配か。その次は？」

「……教会への道を聞く」

「まあ、道を知らないと言けないよな。その次は？」

「教会に向かうわ」

「まあそりゃ、道を教わったらその通りに進むよな。その次は？」

「何よもう、教会にいたら私は住み込みでシスターの仕事のお手伝いをさせてもらうの！もう決めたのよ！」

「で、その次は？」

その次は……次は、どうしよう。

「その時になつてから考える！」

「そんな程度の見通しじゃ、教会の秘密を知るなんて夢のまた夢だな！」

笑われた。

「何をどうしようとするの勝手でしょ！私はもう行くの！さよなら！」

最後に馬鹿にされたままで終わったのが、シヤクだった。

でももうベルクと会うことも、きつと無い。

「俺さー、司教やってんだよねー」

屋敷の外に歩き出した私に合わせるように、ベルクもこっちに向かって歩き出す。

「ついてこないでよ」

「しかも、教会から離れて居を構えられる許可すら貰ってる司教の

中でも特別に偉い人。この若さでスゲーだろ」

「何よ嫌味？それとも自慢？」

どンドン屋敷との距離は離れるのに、私とベルクとの距離は変わらない。

「両方だ」

ベルクは、にやりと笑った。

嫌な奴。

「なあ」

「何よ」

私は、もうベルクに振り向く事無く答えた。

「俺の元で、司教手伝いやってみないか？」

「ばっかじゃないの？司教は男の仕事でしょ？」

「だから、司教手伝いだつて。永遠の見習い。ようは下働きだ」

「やらない。人の親友の名前勝手に語るような人の元で働きたくない」

私は歩く速度を上げた。

「俺の屋敷さー、でっかかったろ」

もう無視だ、無視。

「この間空き巣に入られちまってな？家中荒らされちまってまあ、いやあ人手が足りなくて屋敷の整頓が追いつかなくて追いつかなくて」

無視。

「うちに住み込みで働いてくれる可愛い女の子でも居ないもんかな」

「……」

無視。

「そのついでに、文字とか教会の作法とか儀式とか魔法の勉強でもしたりして」

無視。

「それで最初から教会でも高位の位から始められれば、一気に教会の秘密にも近づけるのになー」

……足を止める。

「三食昼寝付だ。日給も出るぞ？」
振り返る。

「いくら？」

詰め寄る。

「ん？」

「いくら出してくれるのよ」

「歩合制だ。まだ決めてない」

「今決めて」

もしこの話に乗るとしたら、ある意味一番しつかりと先に決めておくべき事だ。

「……セロ硬貨二枚」

「硬貨二枚なんて子供のお小遣じゃない」

「嫌ならいいんだぜ？一からつらい修業して何十年も時間をかけて出世して、秘密のカケラでも知れる頃にはおばあちゃんだ」

ベルクはニヤニヤと上から目線で 実際、彼の方が頭ひとつ分以上背が高い 見下ろしてきた。

なんか腹立つ。

「俺の元で修業すりゃ、ただの一年と待たずに十年分は成長できるな、お前の場合」

「嘘くさ……」

「もし希少価値のある魔法の一つも覚えりゃ教会でも『それなりの地位』は、その時点で確保だろうな」
考える。

「五枚！硬貨五枚なら良いわ」

「ざっけんな二枚だ二枚！こっちが金もらえる好条件だったのに」

「じゃあ妥協して四枚」

「おっ前金貸出してでも俺に弟子入りしたい司教見習いがこの首都だけで何百人居ると思ってやがる……」

この取り決めが、将来的にかなり重要になってくる。賃金はほんの

少しでも粘って上げておくべきだ。

「じゃあ仕方ないから四枚」

「強情な奴だな二枚つたら二枚だ」

「六枚」

「増やすな！」

往来でにらみ合い、火花を散らす。

「お前絶対自分の立場わかってねえだろ……」

自分の立場なら、よくわかっている。

ベルクは、多分なんだかんだ言ってもきつといくら出したって私を手元に置きたがるはずだ。

教会に属しながら、教会を疑問視する存在。あの時のミアと同じだ。心底私を教会に行かせたくないらしい。

今回の取り決めは、私が入質を握っている有利な取引……その入質が私自身っていうのもただけだ。

「七枚」

「増やすな」

「八枚！」

「ええいくそ三枚だ三枚！それ以上はやらん」
勝った。

「じゃあ仕方ないからそれでいいや」

「ただし歩合制だかな。仕事無い日は二枚だ」

「えー」

……それは仕方ない。でも、ここは文句を垂らしておく事にする。

「衣食住全部提供する住み込みなんだ、我慢しろ」

「しょうがないな」

取り決めが決まった。色んな言質を貰った。

特に最後にさらっとベルクが言った事は重要だ。

新しい服が欲しいとベルクに頼めば、『取り決め』上ベルクがお金を提供してくれる事になる。

そうすれば、実際の私の稼ぐ額は大した問題ではないという考え方

も出来る。

案外、カエルのおじさんが言ってた『私に商才がある』というのは正しいのかもしれない。

「それなら、教会に行かないで貴方の屋敷に居てあげる」

「ああ、そうしとけ。屋敷にはサヤもリルも居る。十把一絡げを教育する教会より余程良い勉強になる」

私達は、並んで歩き出した。

向かう先は、教会ではない。ベルクの屋敷。

長く続く塀の先。屋敷への入り口の所まで戻ってくると、リルとサヤが二人して待っていた。

「おかえりなさい」

「……」

サヤは笑顔で言い、リルは宙に描いた。今回は珍しくサヤの通訳が飛んでこなかった。

「えっと……ベルクに言われて、この家のお世話になる事になった、シアです。改めてよろしく……」

もう二度と会わないくらいのつもりで屋敷を出たのに、とても気恥ずかしかった。

「口説いてきた。俺の勝ち」

ベルクは悪戯気に笑った。リルはぶいと向こうを向いた。

「あんた達何してたのよ……」

サヤが苦笑しながら、「まあまあ」と、なだめながら私に歩き寄ってきた。

「人の心は、変わるものだったでしょう？」

悪意の無い微笑みに、ああ……と思った。

『ゲーム』の時から少し思っていた事だけど、今確信した。

この子は、ペテン師だ。それも天然の、多分一番手に負えないタイプの。

サヤは含みを持たせた発言こそするが、きっと本当の事しか言わない。一度でもペテン師かと疑うと、引っかかる。そういう子だ。

ある意味一番信用できる。ある意味一番信用しちゃいけない。

「別に、教会に行く前にちよつとここで勉強する事にしただけだもん。教会にはそのうち行くわ」

「……人の心は、変わるものですから」

にこりと、彼女は邪気を感じさせない笑顔で微笑んだ。

どうやら、この屋敷にはまともな人が誰も居ないようだ。

リルは懐から銅貨を一枚取り出すと、ベルクがそれを取り上げた。

「本当に何してたのよ貴方達！」

「お前を連れ戻せるかどうかで銅貨一枚賭けてた」

ベルクはしれつと言い、リルも簡潔に頷いた。

「せめてそういうの本人の知らないトコでやりなさいよ！やっぱ私行く！教会行く！」

「まあまあ……」

サヤは私をなだめ両の掌を傾かせて合わせ、微笑みを浮かべながらあとずさった。

「魔法使いの館へ、ようこそ！」

二人が言って、一人が描いた。

何か、言葉に出来ない懐かしさを感じた。

「……よろしく！」

その日から、私の『魔法使いの館』での生活が始まった。

一章 『再会』と良く似た『何か』 十二話目

Wrote: BELLK

なんとというか、今日は、疲れた。

「ふう……」

安物の皮椅子を軋ませ、机に突っ伏して息をつく。

あ後はシンシアに適当な部屋をあてがって彼女の身の丈に合いそうな服を何着か見繕い、その後簡素な食事をとった。

終始、シンシアは笑顔を絶やさなかった。

……いや、厳密に言えば笑ったりしたりしたとたんに怒ったり喜んだりと喜怒哀楽の落差が激しく、ただ笑っていてくれるより無理をしているのが見え見えで痛々しかった。

よりによってあんな子供に『ウォーカー』がとりついているなんて、悪い冗談だ。

とりあえず教会にシンシアの身柄を押さえられる事態は防いだ事で、当面の危機だけは乗り切ったとも言える。

しかし、いつまでも教会からシンシアを隠し通せるわけが無い。

いずれはシンシアの事が教会に知れ渡る。もしくは『ウォーカー』がシンシアを内側から食い破る。

特に奴はウォーカーの中でも神話の神々に連なる格の悪魔だ。

シンシアが教会に捕まれば、悪ければその日のうちに『神殺し』の武器で刺されるか原型を留めない程焼き尽くされるか、それとも久しく見ない『ウォーカー』にとりつかれた者として、ホルマリン漬けか？

……運が良くても教皇のペットが軍部の人間兵器扱いだ。ロクな事にならない。

「……畜生っ！」

何が司教だ。俺の持つ権力で動かせる人間なんてたかが知れている。

それだって、『俺の』力で得た物ではない。あくまで『ミア・フォルトの記憶と力を持つ者』に与えられたお飾りの配下達。

大司教や教皇、軍部や国の上層部の一声であっさりと裏切るような信用出来ない駒に囲まれている。

無力だ。

俺は、こんなにも無力だったのか。

何も出来ない。『国』という大きな力の前に、『ウォーカー』の脅威の前に、何も出来ないのか。

「……ミア・フォルトはずっとこんな無力感と闘ってきたんだな……」

彼女は一体何を思っていたんだろう。

記憶と、心は違う。

それに、記憶だって不確かなものだ。

世界樹の葉を見た時に、感じた違和感。

何年も俺が管理していたミアの封印式なのに、何故俺はその仕組みをすっぽりと忘れていた？

世界樹が自然発生させる魔力を封印式の運用効率を上げる為に使っていた。

大司教ヴァイヴェンの伝説とまで云われる魔法を、ミアが半永久機関としてシンシアの封印という形に創りあげた。

……シンシアの封印に、ミアは立会ったはずだ。

なら、何故、俺はそんな重要な場面を覚えていない？

ミアの記憶に蓋をしたのは三代目のはずだ。彼女の意図は何だ？

「くそ……」

いつその事、国を捨ててセルリア公国の力の及ばない何処かへ逃げるか……？

それも、良いかもしれない。

ミアがずっとセルリアに拘っていたのは、シンシアの事があったからだ。

ウォーカーさえどうにかすれば、セルリア公国の外に出る事も……

「俺は馬鹿か！？そのウォーカーがどうにも出来ないからこんな事になったんじゃねえか！」

そもそもウォーカーさえどうにか出来てしまえば、シンシアの為に国を捨てる必要だってない。空想する。

「……そうして皆は、平和に暮らしましたとき。めでたしめでたし。もしもウォーカーがシンシアにとりつく事が無ければ。きつと、シアもミアも幸せに暮らせた筈だったんだ。

ミアは人生を大きく狂わされ、シアは今、生きるか死ぬかの瀬戸際を本人も知らずに歩いている。

シンシアは宗教だの、政治だの、国だの黒い事を知らないただの子供だ。

俺が、守らないといけない。

先代と約束した。

それは、ただの口約束だった。でも、今は違う。

「考えるベルク。考える八代目。つーかなんか教えてくれよミア。フォルト！」

……何も思い浮かばない。

「情けねえなあ、おい……」

サヤとリルにこんな姿を見せるわけにはいかない。シンシアには以ての外だ。

「……酒でも飲むかな……」

素面でいるより少しはマシかもしれない。

棚から適当なものを選んでみると、コンコンと扉を叩く音がした。

「……入ってまーす」

「どついうシチュエーションよ!？」

ばたんと扉を開いて、シンシアが入ってきた。

「……そついうお前はそのシチュエーションで扉を開くわけだない……」

「そ、そんなわけないじゃない！ベルクが馬鹿な事言うのが悪いの！」

シンシアも、ミアの記憶から随分と変わったもんだ。

シンシアはもじもじと扉を開いたまま中に入っただけ。

「どうしたよ？」

「……部屋の中、入っても良い？」

「構わんが」

リルのように無言で頷いて部屋に入ると、扉を閉める。

部屋の中に入っても、シンシアはまたもじもじと手悪戯をしているだけで、軽く扉に体重を掛けるようにして立ったままだった。

「……夜這いでもしに来たのか？」

「よ、よば……違うわよ！」

シンシアは入り口近くの本棚から分厚い辞書を取り出して、投げた。きた。

「ま、待てその辞書は一冊金貨いちま」

「騙されるかあ！」

普通に投げつけられ、今回は夜で視界が悪かったせいもあり、普通にぶつかると、

「痛って……」

「変な事言うベルクが悪いの！」

こいつ投げ癖ついてやがる。

「ったく……それでも銅貨2〜3枚の価値はあんだから乱暴に使わんでくれ」

辞書を持ってシンシアの傍まで寄って、元の位置に戻す。

近づいてみて、初めて分かった。

目が、赤い。

解散してから今まで、ずっと泣いていたのか……

まあ、あんなへビイな事を聞かされちゃ当然か。

「ベルク……」

「ん？どうした？酒でも飲んでみるか？」

「……………うん」

冗談めかして言ったつもりが、普通に頷かれてしまった。
まあ……………一日くらい、良いだろう。

「ベルク、聖職者なのにお酒なんて飲んで良いの？」

「これは葡萄酒だからな。つかお前こそ飲んじゃ不味いだろ、年齢的に」

大人しく椅子に座っているシンシアの前に、グラス半分くらいまで葡萄酒を注いでやる。

俺にも同じ量だけ注ぐ。

「何に捧げるかな……………」

「ミア」

「ん？」

「ミアが良い」

シンシアの中では、両親より誰より、ミアが一番重要なのか。

「まあ、それじゃあ……………ミア・フォルトに捧げて……………乾杯」

「乾杯」

キン、とグラスを当てるとシンシアは酒を飲むのは初めてなのか、手に持ったグラスをじっと見つめる。

えい、という感じで一気に全部飲み込むと、咳き込んだ。

「けふつけふ……………なにこれ、苦くて辛い」

「そういうもんだ、子供には」

笑みがこぼれてくる。

そうだ。俺はこいつを守るんだ。例え、何があっても。

「……………ねえ、ベルク」

「んー？」

「やっぱり、皆……………本当に、死んじやったのかな……………」

「時間の流れには逆らえないさ」

シンシアの目じりに涙が浮かびだす。

「これが、悪い夢で……目を覚ましたら、またいつもの生活が始まるんじゃないかな、って……」

「こっちが、現実なんだ。現実が悪夢より悲惨な事なんてよくある事さ」

「うう……」

シンシアは本格的に泣き出しそうになっているのを、必死に堪えている。

「ああほらお前酒なんて飲んだから酔ってたんだよ。風にでもあたるか」

シンシアの手を取ってテラスの方まで連れてきてやる。

季節は春なのに、夜は肌寒い。

シンシアは手すりに寄りかかるようにして、月を眺め始めた。

「皆……死んじやったのかなあ……」

ああこいつ酔ってやがる。

……いや、もしかしたら、素面でもずっと同じ思考をループし続けていたのかもしれない。

何度も、何度も信じられなくて、その事を考えてずっと泣いていたのかもしれない。

「そっぴや……酒といえば、昔テーリスが酒を飲んだって自慢してきた事があったなあ……」

「あ……それ覚えてる」

「そんでいつもテーリスに張り合ってたオーシエが家から葡萄酒を持ってきて……」

「オーシエがロセシーとカーラと3人で飲んでた！」

「ミアとシアは結局飲まなかったんだよな」

「テーリスも飲まなかった！」

「殆どカーラが一ビン丸ごと飲んで……」

「オーシエが家から葡萄酒とって来たの怒られてた！」

なんだ。結構覚えてるじゃんか、こいつ。

「鬼ごっこもしたよな」

「フィロリーがいつも負けてた！」

「あいつは太つてたからな……っーかシンシアも負けてばっかだったろうが」

「私は女の子だもんー」

「オーシエが鬼になったら……」

「いつもテーリスばかり追いかけてた！」

「フィロリーが鬼になったら……」

「いつもミアがつかまってあげてた！」

この子の記憶は、こんなにも幸せだったはずだったのに。

「あーそっぴやくくれんぼとかもしたな」

「シフェがいつつも一番に見つかった！」

「隠れるのが下手だからな」

「私は上手だった！」

「そっぴだ、何回かシンシアが隠れたまんま皆家に帰っちゃった事あったしな」

「でもミアが見付けてくれたよ？」

「ああ、ミアはシンシアを探すために頑張ったんだ」

「そっぴかーミア頑張ったんだあ……」

そっぴだ……そっぴえば、ミアは、大人達も見つけられなかったシンシアを探す為に頑張って……

「……シンシア、さっきお前どうやって俺の部屋を見付けた？」

まだ、シンシアには俺の部屋の位置は教えていなかったはずだ。

「なんとなくだよー」

シンシアは、にへらと笑った。こいつは酒に弱いようだ。

「なんとなく、か……」

「うん、なんとなく……リルとか、サヤは、年下の子だから……」

……そっぴや、まだシンシアには二人の正体を明かしていなかったか。

今はどうでもいいが。

「もう、皆には、会えないの？」

会えない。

その一言が、言えない。

「また皆と一緒に遊びたいよう……」

そんなのもう無理なんだ。

シンシアの一番幸せだった時間は、もう、終わってしまったんだ。

大人達の事情のせいで、もう、帰る事は出来なくなってしまったんだ。

「一人はやだよ……」

シンシアの瞳から、大粒の涙がこぼれ出した。

「皆死んじゃ嫌だよ……」

もう死んだんだよ、皆は。

それはなんて冷酷な言葉だ？

子供に辛い現実を突き付けるのは簡単な事だ。

でも、ミアの記憶は、俺にもある。

よく笑って、怒って、負けん気の強い娘だったミアが、今は泣いている。

「シンシア。お前は一人じゃない」

俺はシンシアを抱き寄せてやる。

「もう、ミアやテーリス達と会うことは出来ない。でも、新しく友達を作る事は出来る」

「やだ、ミアが良いの！私はミアが良い！」

「ここにはサヤが居る、リルも居る。それじゃダメか？」

「みああ……」

強情な奴だ。

……いや、もし他の奴がシンシアと同じ状況に立たされたら。

「そりゃ、ミアが一番だろうさ……他で代わりなんて出来ないだろうさ……」

ミアが狂人と呼ばれる程にシンシアへ執着していたように。

「……こっち来いシンシア！飲みなおすぞ！」

半ば強引に部屋に連れ戻すと、椅子に座らせた。

「みあー……みああ……」

「そつちはここに居る八代目でガマンしろ。大人は酒飲んで嫌な事忘れんだ」

シンシアのグラスになみなみと葡萄酒を注いでやる。

またシンシアは一息に半分近く飲んだ。

飲み方だけはうわばみな奴だ。

「苦くて熱い……」

「そういもんだ」

減った分だけ注ぎなおしてやる。

「増えた……」

「ああそりゃ増えるさ、注いだからな。ビンにまだ残ってるしな」

「魔法みたい」

「……ああそうかい」

どうやら本格的に思考回路が回らなくなっているらしい。

なだめて寝かしつけるのも面倒だから、そのまま潰れてしまつてくれるとありがたい。

「……そついや、シンシアはテーリスの事が好きだったな」

「うん……テーリス、今何してるのかなー……」

俺は軽いため息をついた。

まあ、酔つて記憶が混乱しているんだろう。

今くらいは、乗ってやろう。

その間にも、シンシアは葡萄酒を一気飲み干し、ビンから新しく注ぐ度に不思議そうに笑った。

「何してんだらうな……案外、シンシアみたいに酒でも飲んでるのかもな」

「えー……それはないよお、テーリスお酒飲めないもん」

「そうだっけか？」

「オーシエの持ってきた葡萄酒、一口で吐き出してたもん」

「そついえば、シンシアとミアはそれで怖くなって飲むのやめたんだよな」

「うん……」

シンシアの眼がだんだんと、うつらうつらとしてくる。

「まほー……」

「ん？」

「皆を見つける魔法があれば、すぐに、会いに行けるのにねー……」

シンシアは、その眩きを最後に、目を閉じた。

魔法。

『皆を見つける魔法』。

……なんで気付かなかったんだ。

あつたじゃないか。教会がシンシアに手を出せなくなる、とびつきり最高の作戦が！

「すげーな、お前！」

被った帽子ごと、シンシアの頭をなでてやる。

そうだ。ミアは、シンシアとの別れ際に一つ、とっておきを渡していたじゃないか！

俺はシンシアを彼女にあてがった部屋のベッドまで運んでやると、

シンシアに魔法を覚えさせるプランを考え始めた。

上手く行けば、教会の力を全面的に味方につけられる最高のカードになる。

後は、如何にして教会を利用してウォーカーをシンシアから追い出すか。そこだけだ。

月が、満月の形を崩し始めた夜の事だった。

一章で登場した人物・用語紹介

『搜索譚』と題して殆ど搜索らしい搜索してないよね、第一章。

本編ではつちゃけられない分ここではつちゃけていつちゃいませよー

一章における登場した人物紹介・・・

ーメイン層ー

シンシア・・・

主人公。プロローグ回で未登場だったりするけど主人公。記憶喪失。八話目でリルに推測で12〜3歳とか言われているけど14歳。

三話目もパン屋さんにお使いを褒められる年齢に見られているけど14歳。

つまりシアは この発言は削除されました

九話目で『渡り歩く災厄』と称される魔物に憑かれていたことが発覚。

十一話で300年も昔の人間だった事が発覚。

十二話で初恋も済ませてある事が発覚。

観察眼が鋭く利にもさといよつで、記憶喪失にもかかわらず交渉事には強い。

一章では終盤まで彼女の名を呼ぶ人が居なかった為、読者になかなか名前が定着しなかった事が悩み。

リル・・・

一章における語り手その2。語り手なのに喋らない。コレ如何に。

プロローグ回で文章中に一度も名前が出なかった唯一の一章メイン子。

四話目にてシアをして『小さな子供のよう』と言わしめるロリ子さん。今回はお色気も担当もした。

彼女の名誉の為に注釈付けると外見年齢は10歳以上には見えないはず。

五話目にて『呪言』というどこぞの迷宮で見掛けたような魔法を使う事が発覚。

ベルクを相手に肉体的、精神的に共にいたぶり罵倒するのが趣味。毒舌。きっと彼女の描く文字はスラングだらけ。

一章では中盤以降彼女が出ずっぱりだった為、名前すら定着しないシアの主人公の座を奪える体制にあった。

サヤ・・・

一章において一番出番少なくて影が薄かったかもしれないメイソ子。危うくシアに『ペテン師』の烙印を押されてしまう所だった。セーフ。

一章では明言されていないが見た目年齢はリルと同程度。ロリ率高いなメイン層。

十話目にて、シアから『サヤとリルは禁断の愛?』疑惑を受けている事には気付いていない。

シアの前ではリルの発言を翻訳する＝リルの描くスラングを理解して口語訳している。

さらにゲームだとか賭けだとかギャンブラー疑惑。危険だ。しかも心理戦で揺さぶりを掛けてくる。

鉄壁の微笑みポーカーフェイスが最大の武器。

一応礼儀正しいが、腰には異国の剣が待機している。やはり危険だ。一章ではプロローグ話の一話目以降、ほぼ終盤にちよろつと出ただけだった為、『この子誰?』の憂き目に。

ベルク・・・

一章における、というかメインキャラではほぼ唯一の男。しかしハーレムかという点で甚だ疑問が残る。リルからの虐待はとある業界ではご褒美らしいが彼にその気は無い。哀れ。

冷静に考えると見た目10歳程度の女の子二人を屋敷に囲っている男というわけで、客観的に見ると変態。

九話にてシアの倍くらいの年齢というのが明かされたが、実際28歳。

つまり十一話では道端で自分の半分の年齢の女の子を口説いていた（「ナンパ？」事になる。非常に危険だ。

一応、シアの中でのロリ疑惑はなりを潜めているがいつまたボロを出すか見ものである。

十話目にて、現在『ミア・フォルト』という名を彼が名乗っていて、その彼が八代目というのも発覚。

十一話のシアとのやり取り他で、鋭い人は教会の秘匿事項の謎に気付いていそうだが他の人に教えてはいけない。

それはネタバレである。

一章では最初と最後にちよろつと出てきただけだった割に、サヤより存在感が出た。やはりロリ疑惑強し。哀れ。

―超えられない壁―

パン屋のおじさん・・・

名称不明、三話目にて登場。

シアに新ゼロ硬貨（ジャリス硬貨）と旧ゼロ硬貨（エフィットス硬貨）の違いを教えた。

神様を信じている。彼の言う神様とはどちらの神様なのか？

わかってても他の人に教えてはいけない。

それは多分皆わかってるから恥をかくだけである。
シアに旧硬貨を貰ったお礼に、大量の惣菜パンと帽子をシアに渡す。
シアはこの帽子をえらく気に入り、いつもかぶっている。描くとき
面倒くさそうだ。

カエルのおじさん・・・

名称不明、三話目にて登場。

シアから旧セロ硬貨を安値で巻き上げようとするが失敗する。

カエルのような顔をしている。おそらくジブリ映画から出張してきた誰かだ。

自分の名前すら満足に書けない小娘に商談で負けた事からも、彼の質屋が早晚潰れる事は容易に想像つく。哀れ。

彼に商才のお墨付きを貰っても本気にははいけない。

間違っても、彼に弟子入りなどしてはいけない。自分の商才と人生を溝に捨てるようなものである。

しかし、シアの知らない所でその後旧セロ硬貨の転売に成功している。

ミアキャベルでシアの道案内をしたおばあさん・・・

名称不明、四話目にて登場。

観光地化されたミアの生家に入るには銅貨を一枚料金箱に入れなければならぬ事を教えてくれた。

四話目にてシアは渋々銅貨を払ったが、五話目にてリルは問答無用で無視した。

各々の性格と倫理観の違いを象徴するようなエピソードである。

ハリウス・・・

六話目以降登場

銅貨一枚でリルからシアへの会話の翻訳を頼まれ、快く承諾したのが運の尽き。

汽車に乗る事を嫌がるシアに振り回される間に日に3本しかない汽車のうち1本に乗り遅れるという事態に巻き込まれる。

その後、銅貨もう一枚でシアから汽車について質問攻めにされるが全てにまともな返答を返している。

彼になら『空はなんで青いの?』と聞いても答えられる事だろう。学者。薄幸。リルは彼の前ではスラングを使わずに丁寧語を描いていたようである。

リルは駅のホームにて主に薄幸そんな雰囲気です。ハリウスを『先代』と重ねて選んだ。つまりリルは先代の事がこの発言は削除されました

ーおよそ3000年の壁ー

シンシア…

この物語にオファーされて主人公に抜擢される事を知らなかった頃のシンシア。女の子。14歳。

テリスの事が気になっていた。でもそれ以上にミアの方が好きだった。

子供の恋愛なんてしょせんそんなものである。

もしくはシンシアはミア相手にこの発言は削除されました

ある日、『ウォーカー』にとりつかれてしまった事で彼女達の運命は大きく変わる事になる。

ミア…

シンシアと家の近かった、シンシアの幼馴染。女の子。14歳。物心ついた頃から魔法の才能があり、文字の読み書きも勉強して、教会に在籍しつつも独学で魔法を磨いていた。友達と過ごす時間が、幼い頃から多忙だった彼女の憩いの時間だった。皆にやさしい女の子。人気があった。美しい色合いの金髪だが、かなりのクセツ毛で、それが彼女のコンプレックスだった。誰よりも早くシンシアがテーリスを好きな事に気付き、密かに応援していた。

テーリス・・・

シンシアの3つ年上。仲間達のリーダー格。男の子。17歳。一番の年長者なので、時々少し大人ぶる事がある。

文字の読み書きが出来て、よく本を読む為時々他の子供達に知識をひけらかしていた。

シアにはそれがかつこよく映ったらしい。

つまりシアは年上が　この発言は削除されました
時々工場で働いていた。

オーシエ

シンシアの1つ年上。いつもテーリスと張り合っていた。男の子。15歳。

いつもテーリスと張り合う理由は、時々大人ぶって仲間たちの関心を集めるテーリスが気に入らなかった事と、シンシアの気を引きたかったから。

つまりオーシエは　この発言は削除されました

あまり頭は良くなく、シンシアと一緒にテーリスから文字を習っても、殆ど身につかなかった（シアもどっこいどっこいな気がするが）

。テーリスが工場に出入りするようになって暫くしてから、彼も時々工場で働くようになった。

ロセシー

シンシアの2つ年下。仲間達では一番年下だった。女の子。12歳。一番下の子の宿命か何なのか、少々我侷。シンシアは彼女を相手にお姉さんぶるのが楽しくて仕方なかった。

しかし我侷で、シンシアを含め人の言う事を聞かない。本人の憧れていたカーラの言う事くらいしか聞かない。

ちよっと可愛げの無い性格をしているが、可愛い顔立ちをしていて、仲間たちの中では一番裕福な家の子だった。

シフェ

シンシアと同じ年。仲間達ではかなり影が薄い存在だった。女の子。14歳。

初めてかくれんぼをした結果、あまりにも巧妙に隠れてしまい誰も見つける事が出来ず、誰も（ミアすらも）シフェが見付かっている事に気付かず、親にすら帰ってこない事件に気付かれず（誰かの家の厄介になっていると思っただけ）一晩中隠れて過ごしたトラウマがある。

その為、かくれんぼをする時はすぐに見付かるように適度に隠れるようになった結果、毎回一番に見付かるようになってしまった。哀れ。

ベルクの口ぶりから察するに、ミアは最後まで彼女のハイドスキルの高さには気付かず終いだっただけ。哀れ。

フィロリー

シンシアの二つ年上。太っていた。男の子。15歳。

足が遅い。鬼ごっこでは格好の標的。鬼ごっこではフィロリーに次いでシンシアがすぐに捕まるが、その理由は

ミア……普段大人しくて、優しくしてくれる彼女を追い回すのは何か可哀想

ロセシー……一番年下の女の子を追い回すのは何か可哀想

シフェ……何故か見付からない

テリス&オーシェ&カーラ……単純に足が速くて捕まえないという消去法によるもの。シンシアは負けん気が強く、安心して鬼を任せられるので都合が良かったのもある。

カーラ

シンシアの二つ年上。美人で勉強以外何でも出来たので、町の人に人気だった。女の子。16歳。

魔法こそ使えないが、ミアと同じく教会に在籍していた。

オーシェが溜まり場にお酒を持ち込んだ時は、彼女がほぼ全部を飲みきった。うわばみ。

ちなみにその時、後が怖いのでシフェは逃亡し、当事のフィロリーは食べ物に固形物にしか興味が無かった。

皆が制止する中で肝心のカーラがロセシーに勧めてしまった為、ロセシーはあの年で酒の味を覚える事になる。将来が哀れ。

作中で周知の事実として扱われている話や用語など……

セルリア公国……

他国ではメジャーなエフィトスの教えを認めず、新教のジャリスを

信仰する国家。公国だが教会の力が強い。

魔法については他国より秀でているものがあるが、その分他国と比べ銃器等の機械技術は少々発達が遅れている。

領土拡大を狙つての戦争が辺境では絶えないが、昔から戦争にはさほど強くない。

が、そこそこの強国ではあり小国とも言えない。そこそこ豊か。

魔封石・・・

魔力を蓄える性質を持つ宝石の結晶。

用途は様々であり、高価。

シンシアは『ガラス』と称していたが、実際に透明感のある石。

魔具・・・

魔法を封じた道具。純粹に魔封石に魔法を封じ、『発動のキーワード』で放つ消耗品が一般的。

魔法を術式として封じ、魔力を込める事で魔法に変換する半永久機関化された物はとても高価。

前者はランニングコストで、後者は初期費用でどちらにせよ高価な事には代わり無いので、普通は上流階級の人間にしか扱われる事は無い。

伝説に名を残すような超一流の魔具の武器は、『神殺し』(神格化された精霊、悪霊ですらも殺せてしまう武器)と呼ばれる事もあ

世界樹・・・

神話の時代から存在する、魔力を発する木。

その発生には多数な条件が必要なようで、人の手により苗木や接ぎ

木に成功した事例は無い。

光を放つその木の枝一つ一つ、葉一つ一つに大量の魔力を蓄えており、魔法の触媒として高価で取引される。

が、世界樹は傷つけると一時的に休眠状態に陥ってしまい、復活するまでの間隔は数十年、下手をすると数百年という長さで魔力を失う事になる。よって、世界樹の葉が触媒として市場に流通する事はほぼ無い、と言って良い。

セルリア公国においては、特別な許可を得た教会の関係者以外は世界樹に手を触れる事すら違法。葉を採取するなど以ての外。

ミア・フォルト・・・

セルリア公国では、『世界一有名な魔法使い』とされている。

それには少々の語弊があり、彼女より有名な魔法使いは歴史上に多数存在する。

正確に言うならば『現在生きている魔法使いの中で』という前口上が付く。

教会の資料によると300年以上昔から教会に在籍するとされ、時代によって姿・形をも変えて人々の前に現れ奇跡を起こすという謎の存在。

肖像画では血のように真っ赤な瞳に、赤い髪の毛をした長身の女性。

シーラ・ル・レッド・・・

『血塗れシーラ』と呼ばれるセルリア公国における歴史的な大事件の元凶。たった一人の魔物憑きの魔法使いの女性『シーラ』が首都近郊の街を幾つも壊滅させ、セルリア公国全土を揺るがした200年前の大惨事。歴史上の扱いは『内乱』。

当事、ほぼ無名だった『ミア・フォルト』という教会在籍者の女性の英雄と呼ぶべき戦果のお陰で、事態を収束するに至る。

その後、『ミア・フォルト』は100年以上昔から教会に在籍していた事が発覚した事等から『ミア・フォルト』は不老不死の人間として伝えられる事になる。『ミア・フォルト』が歴史に名を残した最初の事件とも言える。

サデイリス・ル・ウォーカー・・・

『渡り歩く災厄』と呼ばれる種類の魔物。文字通り人から人へ渡り歩き、宿主の人間を殺しても別の人間に乗り移って暴れまわる怨霊の類の魔物、悪魔。『ウォーカー』とも総称される。物理的な手段では殆ど対抗出来ず、ある意味では人という種族の天敵とも言える存在。

個別名『サデイリス』は教会においても秘匿事項。シンシアの現在の境遇と関係している。

―貨幣価値について―

およそ硬貨20枚で銅貨1枚。

およそ銅貨10枚で銀貨1枚。

およそ銀貨10枚で金貨1枚。

田舎なら硬貨2枚で簡素で大きなパンを買えたりするが、シア曰く『子供のお小遣い』

硬貨1枚の価値はこちらで言うおよそ50〜70円程度と思われる。

硬貨1枚50円で換算すると、

硬貨1枚で50円。

銅貨1枚で千円。

銀貨1枚で1万円。

金貨1枚で10万円となる。

つまり首都のメルラから辺境のミアキャベルまで、汽車で大人料金を支払うと片道9万6千円エ……

東京 名古の366キロを新幹線で移動するのと同じくらい？

鈍行なら北海道 鹿児島島の2670キロを行って帰って行ってが出来ます。つまり北海道 鹿児島 北海道 鹿児島が出来ます。

これを高いと見るか安いと見るかは人によるだろうけど、まず間違いない中流階級以上の乗り物です、汽車。

ちなみにシアを12〜3歳だと思い込んでいたリルが、シアが銀貨3枚以上持っていた事について『この年齢の子が持つには少々大きすぎる額』と言ってるが、実際そんな年の子が3万以上持っていたら大きな額。14歳に持たせるにしても大きな額。

二章 『探し屋さん』はじめました 一話目

Wrote: SIA

あれから。魔法使いの館に着てから、3日目。

館についたその日の夜の事は殆ど何も覚えていなくて、また記憶喪失かと恐怖した。

頭がガンガンして割れそうに痛くて、気持ち悪かった。

サヤからベルクの悪戯でお酒を飲まれたせいだと教えてもらったお陰で安心したけど、それはそれでベルクに対して腹がたった。

でも、あの夜は何かとても楽しかったような気がする。

結局、館に着いた翌日は頭痛や吐き気でベッドから起き上がる事も出来なくて、その翌日。

それが今日。

ミアの事を思い出してから、連鎖的に色んな事を思い出していた。

「あら……シアさん、もう起き上がって大丈夫なんですか？」

「ん、大丈夫だよ。ありがとう」

病気の女の子の部屋とこのもなんだけどに男が入るのはなんだから、という理由で昨日はずっとサヤが看病してくれていた。

ノック後返事する前に入ってきたサヤに、笑顔で返した。

昨日は返事の声を出すのも億劫だったから、サヤには勝手に入るようとにお願いしていた。

「朝ごはんは食べられそうですか？」

「ん、おなかぺこぺこ。何か食べたいな」

「わかりました」

二人で食堂に向かうと、ぶすつとした顔で頼杖をついているリルと、朝食を食べているベルクが居た。

「おはよう」

「おっ」

「……………」

ベルクはこっちに顔も向けずに言い、リルは宙に描いて答えた。

2日前の事と言いつい今の態度と言いつ、何か腹が立ったのでベルクのサラダの器を、こっちにずらしてやる。

「おいこらやめろ」

がっ！

とサラダの皿の取り合いのような状態になる。

「何してるんですか、二人とも……………」

サヤが呆れた顔をして戻ってきた。

ベルクの向かい合わせの席にスープとサラダとを置いてくれる。

「ありがとう、サヤ」

「いえいえ」

椅子に座ると、ベルクはテーブルに肘をついて、自分の食器を手で覆うようにして置いた。

「……………何してんの？」

「飯を守ってる」

「誰から？」

「シンシア」

遊ばれてる。

ここで反応するのも大人気ないから、ぐっと堪える。

「……………一昨日思った事なんだが」

「何よ？」

ベルクは両手を戻して、スープをスプーンでくるくるとかき回した。

「シンシアは何かを引き金に、その時に必要な記憶を思い出すらしい」

「そうなの？」

「割とな」

そういえば、確かにそんな感じはする。時々、その時に合った誰かの言葉をふっと思いつ出す。

パン屋のおじさんのときとか、一昨日ベルクと言いつ争った時とか。

私が朝食を食べ始めると、ベルクは食事の手を止めて私を眺めながら何か考え始める。

サヤはリルの正面の椅子に音を立てずに座った。

何か言おうとは思ったけど、真剣に考え事をしてるベルクの邪魔をするのも少しためらわれたので、静かにしている事にする。

しばらく無言のままの食卓は続き、居心地の悪いまま食べ終えてしまった。

サヤが気を使って……か、それとも無言の場から逃げ出す為かお皿を下げてくれる。

「ありがとう」

「いえ」

ベルクは目を目を閉じ、ふーと息を吐くと一つの提案をしてきた。

「……具合が良くなっただんなら今日の仕事についてきてみるか？」

「ベルクは司教でしょ？私も教会に行つて大丈夫なの？」

私は教会へ行つては絶対にダメだと、一昨日この館の厄介になるのが決まった時、約束したばかりだ。

「いや、今日は副業の方だ。教会はダメ」

ベルクは器用に、スプーンをくるくると指先で回して、手悪戯し始める。

「お行儀が悪いですよ、ベルク」

いつの間にか戻ってきたサヤにスプーンを取り上げられる。

「……ま、まあ、今日、リルと一緒に知人に会いに行くんだ。記憶を思い出すに色々見聞するのは有効だと思うが、どうだ？」

「知らない人に会うのが？」

「そいつ、かなり特殊な魔法使いだからな」

手を差し出すと、サヤはその手にスプーンを返してあげる。

「んー……わかった、行く」

『魔法使い』。それだけでも、会う理由には十分だ。

今度はどんな変人が出てくるのか楽しみに思った。

「……ところで、サヤもリルも朝ご飯食べないの？」

これは前々から気になっていた事だ。

もしかしたら使用人とかだから館の主と食事の時間をズラしているのかとも思ったけど、それにしたって二人が……

特に、リルが何か食べている瞬間に遭遇しない事に疑問を感じていた。

「あー……それな、何から話したもんだか……つと、来たか」

ぶおおおおおおおおお！

ベルクの言葉を遮るように、音がした。この音は聞いた覚えがある。確か、汽車が時々立てる音だ。

でも、この傍に駅は無いはず。

耳をすませば、ガタガタ……という音が近くで聞こえた。

肘をつけて仏頂面をしていたリルが、寝たフリをする。

サヤは食堂から玄関ホールに向かった。

「……知人さん？」

「いや、今着たのは別の奴だ。こつちも魔法使いだが」

さすが『魔法使いの館』。次々に魔法使いが現れるらしい。

「……そうだコイツをお前にやろう」

と言って、ベルクは私に一つの綺麗なバングルを差し出してきた。

「良いの？ありがとう」

「ただし受け取ったら絶対外すな。左手だ。外すな」

「……何それやっぱいらない」

まるで呪いか何かのようなものを感じる。

「つべこべ言わずに受け取ってさっさとつけやがれ！」

「何よそれ選択権私にはないの!？」

「……こなでも一応、ミアの作品だ。一応、な。八代目の」

ミアの作品。

「……いる」

「今おまえ絶対ミアって部分しか聞いてなかったろ」

私はベルクからバングルを受け取ると、左手首に通した。

ぴったりだ。きらきらと光って、綺麗。

「……似合っ？」

私はその場でぐるりと1回転すると、左手を前に出す形で会釈した。
「そいつはお前用に特別にあつらえた品だからな。魔具としての相性ならこれ以上無い程合ってるぞ？」

「……ベルクって絶対女の子にモテないでしょ」

「残念な事に司教だからな」

左手を太陽に向けたりしていると、サヤと一緒に男の人が食堂に入ってきた。

「いよう、ベル」

「今日も頼むぞ、クー」

「おうよ」

クーと呼ばれた茶髪の男の人は私に目を向けると、ベルクの首を脇で絞めて何かヒソヒソと話し始めた。

「なんだベルウいつもの2人と言いその娘と言いやっばお前そっち系の趣味かっ!？」

「ざっけんな俺は司教だ聖職者だ!誰がこんなお子様がすっ!

「……く……車をワイフ扱いする変態に言われたかねえっ」
全力で殴った割りにあまり効いていなかったらしい。

「内緒話なら聞こえないようにやりなさいよ……」

「はっはっは……いやわりーわりー。お譲ちゃんなんてお名前？」

「シン……むぐ」

ベルクに口を押さえられた。

「いやー実はこいつ、記憶喪失でな……自分の名前もおぼつかないんだよ」

名前を隠された。

……なんとなく理解した。

『教会の人』なんだ、この人は。

「まあそんなわけで、今俺らは、不便だからこいつの事を……って痛っ!」

ベルクの指を噛んで、塞がれた口を自由にする。

「自分の名前くらい覚えてるもん！」

ベルクに任せたら、変なあだ名が飛び出しかねない。

「シイ！私はシイっていうの。あなたは？」

私は、一度あの街で使った事のある偽名を使った。

カエルのおじさんの所で文字を書き間違った事で偶然出来た名前。地味に気に入っている。

「ふーむ……シイか。奇遇だな、うちの女房もシルビアってんだ」
結婚してる人らしい。

「俺はテイルクード。クーって呼んでくれ。テイルじゃ女みたいだし、クードじゃ納まり悪いだろ？」

人なつっこくて、何やらよく喋る人だ。

「わかった、よろしくね。クー」

「おう、よろしくなシイ子」

「……シイ子？」

「シイじゃ収まり悪いだろ？」

ベルクがさっき言ったことを思い出した。『こっちも魔法使い』…

…やっぱり、魔法使いは変人が多いらしい。

「良いあだ名つけてもらったじゃないか。よかったな、シイ子」

「うるさいっ！」

茶化してきたベルクの腹を思いっきり殴りつけた。

屋敷の外に出ると、汽車を小さくしたようなものが屋敷の外にあった。

これが汽車のような音の正体か。

「わー……凄い何これ」

「シルビアさ」

「シルビア？」

「そう、シルビア。俺の女」

クーは目の前の汽車モドキを指差して、事も無げに言った。

でもさつきクーは『シルビア』さんのことを女房だと言っていた。

「……………こっちはドラゴンなの？」

念の為ベルクに聞いてみる。

「いや、車って奴だ。線路無しで走る小さい汽車みたいなもんだ」

「生きてないんだよね？」

「ああ、ただの機械だ……………クーの車は魔具ではあるが」

『魔具』。また出た、よくわからない名前。さっきのバングルの時にも言っていた。

「んな……………てめ人様の女を死人とか無機物か何かみたいに言いやがって」

クーは『シルビア』の上に乗ると、何かをいじってがしゃんがしゃんと音を立て始めた。

「うっし水も満タン、エンジンも好調つと……………さ、乗ってくれ」

「……………安全？」

「クーの腕次第だから、汽車に比べるとかなり危険だな」

「セルリアーの車乗りは何言いやがる」

言いながら、ベルクはクーの椅子の後ろの方に座った。

リルもそれに倣い、ベルクの隣に座る。私はクーの隣に乗った。

しばらくの間がっしやんがっしやんと音を立て続ける。

「クー！まだかー？これじゃ着く前に日が暮れちまうぞ」

「もうちつと待て。シルビアはデリケートなんだ」

程なくして、ガタガタと音を立てて、ぶおおと煙を吐いて、シルビアは動き出した。

「わ……………動いた動いた」

「シイ子は車初めてか？」

「うん、初めて」

「そりゃシイ子には悪い事したな。シルビアに慣れたら他の車なんぞ乗ってられなくなる」

「皆、行ってらっしゃーい！」

「はい、行ってきます！」

「夜には戻る」

屋敷でお留守番のサヤに返事をした。リルは小さく手を振っている。だんだんと、馬車より少し速いくらいまで速度が上がっていく。

「わ、速い速い」

「おいクー！法定速度大丈夫なのかこれ！」

「おう！法定速度ジャストだ！スゲーだろ！」

汽車程じゃないけど、私が全力で走るより速い速度で街の景色が流れていく中で、クーに聞いてみる。

「法定速度って何？」

「街の中で出して良い最高速度って事さ。シルビアは本気になればもっと速く走れる」

クーは首を長く、注意して左右を見渡すと、にやりと笑って水晶のような物体に手を触れる。

シルビアは数秒の間を置いて、一瞬だけ凄い速さに加速した。

「わっ！」

急に加速した勢いで飛ばされそうになった帽子を慌てて押さえる。すぐに減速したけど、それはそれで前につんのめりそうになった。

「こらクー！危ねえ事すんな！リルも死ねつつてるぞ！」

「はっはっはっはっは……すっげーだろ！今の、役人にはナイショだぞ」

「うん！凄い凄い！」

「こらシイ！クーを調子に乗せんな！」

私達を乗せたシルビアは、街の中の大きな通りを駆け抜ける。

歩く人は、色の違うタイヤが使われている端の方を歩いている。珍しくて左右を見回していると、見慣れた物を見付けた。

「あ、馬車！」

三日前にリルと一緒に街を歩いた時は細いくねくねした道ばかり通ったから見掛けなかったけど、まだ現役らしい。

300年も時間が経っても殆ど変わっていない見慣れた物を見れて、

ちよつと嬉しい気分になった。

「なーんだシイ子は馬車派か？」

「んー、でもシルビアも気に入ったよ？」

「わかつてんじゃんか」

クーは嬉しそうにニコニコと笑った。

「クーはいつも人を乗せて走ってるの？」

「ああ、運ぶぜ。人も運べば物も運ぶ、セルリアーの運び屋さんだ」

「運び屋さんか……ちよつとかつこいいね」

「スゲーかつこいいだろ」

しばらく走っていると、他の車とすれ違った。

「……随分、シルビアと違う形だね」

「シルビアは特注品だ、そんじょそこらの車とはわけが違う」

「半分は俺が造った」

ベルクの声に振り返ると、両腕を組んでふんぞり返っていた。にわかには信じがたい。

「……本当？」

「魔具技師として見たらベル以上はそうそういねーな」

「もつと言つてやれもつと言つてやれ」

「普段が普段だから信じらんねえだろけどな」

「うん、信じられない」

「この野郎ども……」

大きな通りを抜け、寂れた町並みを抜けて、木々の生い茂る山道を走る。

森のように木々が生い茂っているけど、何度も馬車や車が通ったかのように地面が踏み固められている。

「ほい到着……つと」

小高い山の中腹にあった小さな家の前で止まる。

シルビアの音を聞きつけたのか、家の人を外に出てきた。

白い髪の毛を長く伸ばした、スタイルが良いけど目付きの悪い女性だ。

「ちょっとクー！ベル！ここにはリル以外の人間連れてこないでっ
て何度言えばわかるのよ！」

いきなり怒鳴りつけてきた。

「ベルの連れだから俺悪くねーよ？」

「乗せて来たのはクーでしょ！？」

「まあ落ち着けててティア。シイは別に悪人じゃないぞ」

「悪人だったら既に投げ飛ばしてるわよ！出来るだけ人を寄せない
でって約束忘れたのアンタ達！？」

かなり情緒不安定な人らしい。

クーとベルクと交互に食って掛かる。

リルが女性 ティア？ の服の裾をくいくいと引っ張ると、何か文
字を描いた。

「……同感。二人とも、荷物はそこに運んどいて」

「あ……あのー……」

半ば私を無視するようにリルの背中に手を回して歩き出した女性に、
声を掛けてみる。

「はじめまして、シイです」

女性は振り返ると、元々悪い目つきをさらに悪くして、私を睨みつ
けてきた。

「目つき悪くて悪かったわね。あたしは嘔吐きが嫌いなの。あなた
に名乗る名前は無いわ」

いきなり嫌われてしまった。

二の句がつげないでいる私を無視して、さっさと二人は家の中に入
ってしまった。

ベルとクーは荷台に積んだ荷物を運び出して、家の玄関脇に置いて
いる。

「ねえベルク、あの魔法使いなんだよね？」

「ああ魔法使いだ。それもとびきり性質の悪い魔法使い」

とびきり性質の悪い。

「えっと……例えば、どんな事が出来るの？」

「人の考えてる事を読める」
ちよつと考える。

「何でそういう事先に教ええないのよ!」
全力でベルクを殴りつける。

思いつきり、情緒不安定そうとか目付きが悪いとか悪口考えちゃったじゃない。

「……わかっててどうにかなるもんじゃないし、ティアは変に警戒する方が嫌がるタイプだからな……」

「……ちなみに、クーは何が出来るの?」

「俺?熱と炎をまあ、少し」

「何かを動かすような魔法じゃなかったんだ」

てつきり、シルビアはクーが魔法で動かしてるんだと思った。

「いやあ十分動かす魔法だぜ?シルビアの動力は、基本的には汽車と同じ蒸気機関さ。石炭燃やす代わりに俺の魔法の熱で動かすんだ。わかるか?」

「うん、後半全然わからなかった」

「つまりだいたい水さえあれば走れてスゲーって事だ。わかるか?」

「うん、つまりシルビアは凄いんだね」

「俺もスゲーんだけどな?」

「つまりその駆動部を造った俺も凄い」

「それを扱いこなせる俺がスゲー」

「クー程度に使いこなせる難易度調整に成功した俺が凄い」

「そうだね凄いね。ところで、リルだけ家に入ったみたいだけど良いの?」

くだらない俺凄い合戦が始まったから適当に口を挟むことにする。

「ああ良いんだ、ティアの依頼は一週間分の食料とリル分補充だから」

またわけのわからない事を言い出した。

「食料はいいとして……リル分って何?」

「リルは呪いの言葉の魔法使いなんだ。定期的にティアの魔法を呪

言で封じてる」

「封じたら、使えなくなるの？」

「いや、使える。ただ無意識に流れ込んでくるのはしばらくの間収まるから、その間は街にも降りたり出来るらしい。それ以上の呪言は精神に負担が掛かるから無理なんだ」

呪いの言葉。

……そういえば、ミアの家でリルと初めて会った夜もリルは文字で何かの儀式をしていた。

という事は私にも、何かの呪いを掛けていた……？

「さて質問が終わったなら俺も少し用があるから家入るぞ。シイは外に居た方が良い」

「ん、わかった。そうする」

あの人は苦手だ。

とりあえず、リルの事は家に帰ってからでも遅くはない。

「暇だったらクー手伝ってやれ。それじゃ」

ベルクは軽く手を振ると、扉をコンコンとノックしてから中に入っ
て行った。

追い出されるような事を言われてる雰囲気だけど、戻ってくる様子
が無いから気にしない事にする。

「……何してるの？」

クーは草むらを四つんばいになってがさがさと掻き分けていた。

「ティアの指輪探してんだ」

「指輪？」

「本人はもう諦めてんだけどな。前ティアの好物買い忘ちまったん
だけど」

「うん」

「腹いせに投げられて、その時に指輪がどっかいったらしいさ？」

「……え？」

「ああ今回はちゃんと買ってきたぜ？加熱処理したチーズ」

「や、そこじゃなくて……」

落ち着いて考えよう。

腹いせに投げる……は、置いておいて。

「指輪つてそんな簡単に抜けて無くなっちゃうものだったけ？」

「ティアが昔の恋人から貰った品なんだけどな？そいつ、ドゥールつてんだけど。驚かせたくてティアの指のサイズすら確認せずにあいつの誕生日に用意したのはいいけど、案の定サイズが合わなかったんさ。まあ、ティアもそれを気に入ったからそのままつけ続けて……」

「続けて？」

「……俺を投げ飛ばした時に無くして今に至る。およそ一月前の話さ」

……何か、複雑な気分になった。

断片だけ聞くとティアさんの自業自得のような、でも心情的にはクーが悪いような。

「つまり、クーはその指輪を探してるんだね？」

「おう。さっきティアは指輪つけてなかったから、まだ見付けてないみたいだしな。俺び代わりに俺が見つけてやんだ」

友達の為に泥に塗れるクーの事が、ちよつとかつこよく見えた。

「これ以上配達料割り引かれたままじゃ商売上がったりだもんな」
前言撤回。

「……恋人さんの思い出の品が見つからないのは可哀想だから、私も手伝うね」

「おう、ありがとなシイ子」

さて、と服を腕まくりして草むらに向かった。

「この辺にあるの？」

「多分。投げられたのはこの辺一帯のどっかだし」

クーは家の前を右手で指差して、そのままぐるりと半回転するように私達の着た道の方に向けた。

「……この辺一帯？」

「多分な」

冗談じゃない。大切な物なのにティアさんが一ヶ月も掛けて見付けられないのも当然だ。搜索範囲が広すぎる。

いや、もしかしたらクーが大雑把過ぎるのかもしれない。というか、絶対にクーが大雑把過ぎるのかもしれない。

これじゃ殆どヒントが無いようなものだ。

ベルクの用事が終わるまでに見付かりそうにはないけど、そこは諦めて草を掻き分けて探し始める。

「指輪、指輪……」

何気なく私の腰元まで生い茂った草を倒して進んで辺りをざっと見渡すと、きらりと光を反射する物が目についた。

「……あっさり見付かっちゃうし」
指輪だった。

少し薄汚れてしまっているけど、拾ってみるとちゃんと指輪だ。でも少し、気になることがある。

「クー！これで良いのかな？」

確認に、明後日の方向に居るクーに尋ねてみることにする。

「おー！シイ子、もう見つけたのかっ!？」

何をどう考えたらそんな遠くに、という程遠い所からガサガサと音立てながらこっちによつてきた。

「確かに指輪っぽいんだけど……大きすぎない？」

そう。指輪は、明らかに女性に送るような品物と思えないほどに大きかった。

私の指に合わせてみると、1・5倍なんてものじゃない。ともすれば指が2本入りかねない。

「ああコレだよコレ。デュールは馬鹿だかな、大きければはめられなくて困る事は無いとか言っつて、殆ど自分と同じサイズで造りやがってやんの」

「……ちなみに、ドゥールさんっていうのも魔法使いなの？」

「おう魔法使いさ。ついでに公国の兵士で1つの部隊を任されてる部隊長さ」

部隊長。いまいち偉さがぴんとこない。

「……ベルクの周りって……もちろんクーも含めてんだけど、魔法使いばかりじゃない？」

「そういう境遇だったかな」

クーは私から指輪を受け取ると、シンシアの荷台から布生地を取り出して綺麗に磨き上げてくれた。

「よし綺麗になった。ティアに持ってってやんな」

「クーが持っていていなくて良いの？」

「見つけたのはシイ子だろ？」

「でも、クーが持って行かないと、その……配達料？は大丈夫なの？」

ぴしっという効果音が聞えてくるようなほど、クーの表情が無表情で固まった。

ぎぎぎと言った感じに頭を抱え込むと、うんうんと唸り始めた。

「……わかりやすい人だ。」

「……なんかシイ子は第一印象でティアに嫌われちゃったみたいだし、それで仲直りさしてもらっちゃまえ」

クーは少年のように、にやりと笑った。

「ありがとう、クー」

何か、ティアさんが日用品をクーに届けて貰う理由が、わかった気がした。

きつと、彼の心根はとても綺麗なんだろう。それこそ、考えを読み取れてしまっても嫌悪する事の無いくらい。

「クーは来ないの？」

「シルビアの調整でもしてるさ。こいつは結構デリケートだからな」
「わかった」

鼻歌を歌いながらシルビアを磨きだしたクーを背に、ティアさんの家の扉をノックする。

「入ってこないで！」

家の中から、ティアの怒鳴る声が聞こえた。

相当嫌われてしまっているらしい。

「えっと……指輪、見付かったんだけどー」

言い終わるか終わらないかのうちに、がん！と大きな音を立てて木製の扉と私のおでこがぶつかった。

「痛っ！」

「……指輪？あんたが見付けたの？クーじゃなくて？」

「はい、これ……」

私はティアさんに指輪を差し出すと、彼女はひったくるように私から奪った。

「……絶対無理だと思ったのに……」

「まあ俺の勝ち」

椅子に座って腕を組んだベルクが、誇らしげにニヤニヤと笑っている。

リルがその隣で、頬杖をつきながら机の上にあった2枚の銅貨を懐にしまった。

「……何やってたの二人とも……」

「聞きたいか？」

「別に良い。だいたいわかる」

ティアはため息を一つ吐くと微笑を浮かべ、指輪を左手の薬指に付けた。

ぱっと見た感じだけでわかるくらい、ぶかぶかだった。

「……ありがとう、シンシア」

名前を呼ばれた。

『シィ』ではなく、本当の名前の方。

ティアさんは部屋の中に私を招きいれて扉を閉めると、扉にもたれかかるようにして私に向き直った。

「私は、レスティア。さつきはごめんなさい」

「私は、えっと……シア。シンシア。でも時々シィ」

彼女は『嘔吐きが嫌い』と言っていた。

なんとなくだけれど、その気持ちはわかるような気がした。

人の考えが読めるという彼女は、本心と自分への言動が乖離した人間への嫌悪が、人一倍強いんだろう。

「さつきは、名前嘘ついてごめんなさい」

「あたしこそ、指輪見付けてもらったと勝手に掌返して悪い事したわ」

ティアさんは左手の指輪を撫でながら普通に答えてくれた。指輪の効果凄い。

「……私もティアさんって呼んで良い？」

「じゃああたしもシイって呼ばせてもらおうわ」

ティアさんは全体的に物腰が穏やかになった。

もしかしたらリルに魔法を封じて貰ったお陰で、人を突っぱねる必要が無くなったのかもしれない。

「そんじゃ俺の用事も終わつたし、帰るとするか……」

「気をつけなさいよ」

「誰に言つてやがる」

「あんたじゃ無いわよ、ベル。リルとシイに言ったの」

「ありがとう」

リルも、同じく宙に文字を描いた。

「そういえば、シイ」

ベルクに伴われ帰ろうとしたら呼び止められた。

「あんたは便利な子みたいだし、時々うちに来ても良いから。その時はもてなすわ」

去りに際疑問を残されてしまった。

便利ってどういう事だろう？

「ティア余計な事言うなって。ほらもう行くぞ」

半ばベルクに追い立てられるように、ティアの家の外に出る。

「それじゃまた来月お願いね、リル」

リルはこくと頷くと、さっさとシルビアの座席に乗り込んだ。

ベルクもリルの隣に座って、私もクーの隣に乗り込む。

「それじゃまたね、ティアさん！」

「バイバイ」

ティアさんは軽く微笑みながら軽く手を振ると、さっさと玄関脇の荷物を家の中に運んでいってしまった。

結構ドライな人だ。

「うっし……そんじゃ行くぞ、シルビア！」

シルビアはがしゃんがしゃんと機械音を立て、さっき通ってきた道を逆に走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6651o/>

『10代目ミアの搜索譚』

2011年10月8日04時40分発行